
気がつけばいつもそこに君が

やくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけばいつもそこに君が

【Nコード】

N4990A

【作者名】

やくも

【あらすじ】

新しい「家族」になってもう十年。三人でいる風景は当たり前のもものになっていった。今までもそしてこれから、この当たり前がずっと続いていくのだらうと、そう信じてた。だけど、それでも……。過去は消せない。罪は消せない。記憶は消せない。一体いつまで、そうやって逃げ続けているつもりなんだ？自分の問いに、答えられない。目を逸らすな。答えはいつだって、すぐ近くにある。彼だって、彼女だって、結局同じなんだから。背負うものを見つけたら、きつと人は今よりも少しだけ強くなれるはずだから……。

First Day(1) : 半自動食器乾燥機(前書き)

この物語は物語上の舞台の中ではわずか四日間と言う短い期間の中で綴られているものです。

サブタイトルのFirst Dayというのは、物語の中での一日目ということであり、小説そのものとしての一話目という意味です。それでは相変わらず拙い文章ではありますが、最後までお付き合いいただければ幸いです。

First Day(1) : 半自動食器乾燥機

ヒーローに憧れた時期がなかったわけじゃない。
ただ、幼いながらも心のどこかでは感じ取っていた。

ヒーローになんて、絶対になれっこない。

少なくとも、あの日までは……。

それは、悪魔だった。

虚ろな視界の先、そこには確かに人ではない悪魔がいた。
振り下ろすその手が、耳障りな音を鳴らす。

「ッ！」

悲鳴。

涙に混じる声。

ただ、助けてと。

叶わない救いを求めて、叫んでた。

「起きろ！ 隼人！」

そんな怒鳴り声で、俺は夢の世界から現実へと引き戻された。
ぼんやりと目を開く。

霞んだ視界の先に、無機質な部屋の天井が見えた。
その、すぐ横に。

「やっと起きたか。このネボスケめ」

そう言っただけで呆れた顔を見せる、アイツがいた。
俺はゆっくりと布団の中から上半身を起こす。

寝起きでまともに働いてない頭では、思考も十分に機能しない。
ぼやけた目元をこすりながら、小さくあくびをした。

枕元の目覚まし時計の時刻を見る。

午前十時二十二分。

普段なら学校はとつくに始業の時間を迎えているが、夏休みである今はその心配はしなくていい。

……そうだ、今は夏休みじゃないか。

なのになんで俺は、こんな風に叩き起こされなくちゃいけないんだ。

休みの日に昼過ぎまで寝ていることくらい、別に珍しいことでもないだろうに。

「……………」

引き続き、俺はぼんやりとしたままソイツを……同居人である安曇七星を見上げた。

「朝ごはん、とつくに用意できてるんだから。さっさと起きてさっさと食べる。ほれほれ」

七星はしきりに俺を布団の中から追い出そうとする。

安眠を妨害された俺から言わせれば、それはいい迷惑だ。

俺の中では食欲よりも睡眠欲のほうが重要性が高い。

しかも夏休みとはいえ、こんな平日の真昼間から叩き起こされる覚えは何一つない。

したがって、俺は七星の言葉に従う必要はない。

「……寝る」

「……は？」

ボスン、と。

再び俺は体を横倒しにして、夢の世界へと旅立った。
自分の体温が残る布団の中が心地よいと思えるのは、いつになっ

ても不思議な感覚だった。

つまりあれだろう。

水泳の授業の後に服を着替えるとやけに暖かさを感じて、すぐに眠気が押し寄せてくるあの現象と似たようなものだ。

まあ、建前はこれ際どうでもいい。

ようするに、俺はまだ寝足りないという、ただそれだけのことなのだ。

「こら、待て！ 人がせつかく朝食の用意をしてやっただけで言うのに、何よその態度は！」

あー、ウルセエ。

耳元で何か正体不明の生物が雄叫びを上げているみたいだけど、そんなのは俺には関係ない。

大体、お前だって人が朝食作っても文句ばっか言うくせに。

やれ玉子焼きが甘すぎるだの、飯が柔らかすぎるだの、ドレッシングが違っただの。

自分のことを棚にあげて偉そうに説教するようなやつに、自由まで横取りされてたまるものか。

七星の戯言など意にも介さず、俺はまどろみの中に吸い込まれるように落ちていく。

その、刹那。

「……………んでしょ……………」

何か、こう。

決してこの世のものではないような、そんな囁き声を。

「……………つつてんでしょ……………」

聞いたような。

……………聞かなければよかったような。

「起きろつつてんでしょーがあ！」

「あ……………」

うつすらと開いた視界の先。

いつの間にか引き抜かれた枕が、天高く振りかざされ、一瞬の後

に俺の顔面へと直撃した。

鼻の頭と眉間と額、総じて言うなら顔面が全体的にヒリヒリと痛い。

本日未明、材質が綿百パーセントの枕という隕石が俺の顔面に直撃した。

落下地点の周囲に対する被害状況の報告は今のところない。
当たり前だ。

俺の顔面で防いだのだから。

そんな慌しい起こされ方を経て、俺は今こうして大して減ってもない胃袋の中に黙々と冷めた朝食を詰め込んでいる。

白米に味噌汁、野菜サラダに焼き鮭。

典型的な日本食であり、見た目も味も正直言って文句はない。

まあ、冷めてしまっただけはいるけれど。

「……ごちそうさん」

こう言わないとやたらと七星はうるさいので、俺は仕方なく呟く。

「ほい、お粗末さま。食器は自分で洗ってね」

ぐ、このヤロウ……。

相変わらず妙なところでしっかりしてやがる。

しかし、文句を言ったところで仕方ない。

実際、起きてきたのはこうして俺が一番遅かったわけだし、後片付けくらいはいつもやっていることだから苦にもならない。

蛇口をひねり、洗剤をしみこませたスポンジで手早く食器を洗っていく。

「あれ？ そういえば母さんは？」

洗い物をしながら、俺はリビングでテレビを見ている七星に声をかけた。

「明美さんなら、九時過ぎくらいに出かけたよ。町会の集まりとか言ってたけど」

「ふーん……」

洗った食器を乾燥機の中に並べていく。

時代は便利になったもので、今では食器の洗いや乾燥までもがボタン一つで全自動である。

その割りに俺が食器を手洗いしているのは、単に食器洗いの機械が最近調子が悪いからだ。

うちの……来栖家の中でもっとも科学技術が結集しているのは、恐らくこのキッチンだろう。

全自動食器洗い機はもちろんのこと、ガスコンロやグリルにも近代科学の結晶体が目を見光らせている。

その理由としては、来栖家は母親だけの片親生活ということが一番の理由になるだろう。

母親の明美は当然仕事をしているが、それを家事と両立させるのは決して楽なことではない。

なので、少しでも負担を減らすためにと、いつの間にかキッチンが目を見張る速度でハイテク化していったのだ。

もっとも、そんなことなどしなくても俺や七星だってある程度の家事全般をこなすことはできる。

だけど母親の明美としては、せめて食卓くらいは任せてほしいとのこと。

それでも今日みたいに用事ができてしまった場合などは、事前に俺か七星のどちらかが食事の用意をするという取り決めになっている。

今にして思えば、その取り決めのせいで俺はこうして無理矢理に叩き起こされてしまったのかもしれない。

かといって今日の当番が俺だとしても、結局は叩き起こされた拳句に飯の支度をさせられていたわけなので、どう転んでも俺に不利

だ。

とりあえずの遅い朝食を終えて、俺は一度二階の自室へと戻った。おかげさまと言うかなんと言うか、食事を終えた頃には眠気もすっかりなくなってしまうていた。

家の中とはいえ、いつまでも寝巻き代わりのジャージ姿でいるのも変なので、まずは普段着に着替えることにした。

着替えるとはいっても、薄手のシャツにジーンズを穿いてしまえばそれだけで着替えは終わってしまう。

しかも着替えたまではいいが、もうすぐお昼を迎えるこの時間。ぶっちゃけた話、これといってすることは無い。

かといって、私服に着替えてまで布団の上で寝転がるのもいささかどうかと思う。

と、思い出したように今更に締め切ったままだった部屋のカーテンを開け放つ。

窓越しに暑い日差しが差し込んできたが、今日はいつもと比べれば幾分か涼しいようだ。

風も出ているし、散歩がてらに外をブラブラするのも悪くないかもしれない。

ズボンのポケットに、財布と携帯をねじ込む。

特に目的地とするような場所はないが、足が向いたらその方向へ行けばいいだろう。

部屋を出て、階段を下りる。

リビングに入ると、七星はまだテレビに見入っている様子だった。テレビの中では、なにやら故郷特集のような番組が進行していた。それを食い入るように見ているのか、それとも全く目には入らず、ただボーッともの思いにでもふけているのか。

どちらにしても、七星はどこかぼんやりとしていた。

寝不足かとも思ったが、そうだとしたら先ほどの叩き起こされ方はあまりにも八つ当たりの的ではないだろうか。

触らぬ神に祟りなしとは言いが、触らなくてもこの神は怒り出すからタチが悪い。

やれやれと、色んなものが混じった溜め息を一つ吐いて、俺は口を開く。

「七星」

「……ん……ああ、何？」

心ここにあらず、とはこのことだろうか。

七星と一緒に暮らすようになってからずいぶんと時間が流れたけど、時々こうしてぼんやりとしている姿を見ることがあった。

まるで空を流れる雲のようにふわふわと落ち着かないというか、ひどく不安定な印象を受ける。

心当たりはあった。

だけどそれは、できるならもう掘り返してはいけない過去の出来事だ。

誰にだって一つくらいあるだろう、そういうものが。

誰にだってあるさ。

そう、俺にだって……。

「隼人？　どうかしたの？」

「……え？　ああ、いや。なんでもない」

「……変なの」

そう言つと、七星は少しだけおかしそくに笑った。

全く、勝手なヤツだ。

自分が同じような顔をしていたことなんて、これっぽっちも気付いていないんだろう。

だけどまあ、それでいいさ。

沈んだコイツの顔なんて、それこそ見たくない。

「俺、ちょっと街まで出かけるけど、お前はどっする？」

「……どっするって？」

……鈍いやつだ。

いや、俺もそういう意味合いで声をかけたわけではないけどさ……

…。

ハア、と。

もう一度溜め息をついて、俺は続けた。

「暇なら付き合えよ。たまには散歩ってのも悪くないだろ」
その言葉に。

「……………」

七星はどうしてか、呆気に取られたような、そんな顔をしていた。しかしそれも、束の間のことで。

「……しょうがないな。一人が寂しい隼人のために、私が特別に付き合っただけよ」

「バ……別に頼んだわけじゃ……………」

「はいはい、そういうことにしておきましょう」

七星は楽しそうに笑うと、準備をしてくると言って部屋へと戻っていった。

全く、わけが分からない。

でもまあ……………。

こういうのも、悪くはないだろう。

First Day(2) : 女ってワカンネエ

外に出ると、炎天下の日差しが勢いよく頭上から降り注いできた。それでも連日の暑さに比べればずいぶんとマシだと言えるが、やはり季節は夏、暑いものは暑い。

「ほら、何ボサツとしてんのよ」

俺が日差しの強さに目を瞑っていると、すぐ脇を七星はやけに機嫌よく通り過ぎた。

七星はベージュのブラウスにグレーのデニムパンツという、白を基調とした涼しげな格好に小さめのトートバッグを肩から下げている。

対して俺はというと、何が悲しいのか、黒の टी シャツに紺のジーンズ。

これではまるで、七星が熱を反射して俺が熱を吸収しているようなものだ。

今すぐ部屋に戻って着替えをしろとおもうかとも思ったが、すでに七星はスタスタと道の先を歩き始めてしまっている。

気のせいかな、鼻歌のようなものまで聞こえてくる。

「女って、わかんねえ……」

そう呟いて、俺はどこか納得のいかない足取りで、その白い背中を追いかけた。

俺達の住むこの佐倉町は、海に面した港町というイメージが強い。実際に町の東側には大きく港が展開され、街の特産物の多くも海産物がその割合を占めている。

かといって決して時代錯誤のある町ではなく、街の中心部には大規模なアミューズメント型施設や大型デパートの支店なども立ち並

ぶ。

こと生活に関して不便と思うことはなく、人ごみのごった返しになる都心などに比べて、はるかに環境がいいと俺は思っている。

家を出て、まずは住宅街に沿って続く道を歩く。

すると大きな道路にぶつかるので、今度はそこを右折し、さらに直進。

十分も歩けば、駅の看板が見えてくる。

そこを中心として、駅前のいわゆるアーケードや繁華街が大きく展開されているのだ。

さてと。

こうして出歩いてきたのはいいものの、目的も持たずにただ歩き続けるというのもそれはそれで体力のムダになる気がする。

いくら涼しいとはいえ、この炎天下の中をあてもなくさまよい続けるのは自殺行為に等しい。

「七星、お前どこか行きたいトコってあるの？」

「え？ 私？」

話を振られ、少し前を歩いていた七星は振り返る。

「っていつか、隼人はどこか行く場所があつたんじゃないの？」

「いや、何も。ただ、家にいるよりはいいかなと思って。最初に言っただろ。散歩みたいなもんだって」

まあ、散歩なら文字通りに歩いていればいいのだけど。

「うわ、無計画……」

非難の視線を浴びせられた。

と、こうしている間にも体温と体力はどんどん奪われていく。

何もしてないのにエネルギーだけを搾り取られるなんて、まさに理不尽の極みではないだろうか。

なので、とりあえずは。

「んじゃ、とりあえずその喫茶店にでも入ろう。暑くて仕方ない」
「ん、そだね」

ガラス越しに見える店内は、まだ比較的客足は少ない。
まずは冷たい飲み物でも口にして、午後の予定を立てるとしよう。

鈴の音を鳴らし、俺と七星は喫茶店のドアをくぐった。

すぐにウェ이터が寄ってきて、お決まりの案内文句を口にする。
「いらっしやいませ。二名様でよろしいですか？」

「はい。タバコは吸わないんで、禁煙席でお願いします」

「かしこまりました。ご案内しますので、こちらへどうぞ」
ウェ이터の後に続いて、俺は歩き出す。

そのあとに七星も続く。

案内されたのは四人席だったが、まあ店内の客足が少ないから問題はないのだろう。

向かい合うように座って、俺と七星はそれぞれにアイスカフェオレとアイスココアを注文した。

注文を受けると、ウェ이터は礼儀正しくお辞儀をし、カウンタ―へと戻っていった。

「ふう……」

背もたれに体を預けると、ふいにそんな溜め息が漏れた。

疲れたというわけではないのだが、暑さに参っていたというのは本当だ。

ちようどいいから、薄手の洋服も見て回ることにしようか。

そんなことを考えながら正面に視線を戻すと、七星はどうしてか俺の顔をジッと見続けていた。

「……？」

別にさほど驚くことでもなかったかもしれないが、体が勝手に飛び退くような反応を示してしまう。

そのまま一分が過ぎ、二分が過ぎる。

相変わらず七星は、視線をピクリとも動かさない。

ただジツと、俺の顔を見据えてくる。

ジー。

「……七星？」

ジー。

「おい、七星ってば……」

ジー。

「聞ってるのか？」

ジー。

「……バカ七星」

「なんだと！」

「うわっ」

「バカとはなんだ、バカとは！」

「バカ、お前。いきなり反応するな……」

「だからバカってなんだ、バカって！」

「今のは不可抗力だ。聞き流せ。それと、店内で騒ぐな」

その一言で、七星はようやくハツとなる。

幸い客足が少ないこともあり、他の客はこの小さな騒ぎには気付いていないようだった。

「うー……」

それで落ち着いたのか、テーブル越しに身を乗り出しかけていた七星は、ようやく腰を下ろした。

「つたくもー……」

ふてくされ気味の七星。

「それはこっちのセリフだ……」

グラスの水を一口含んで、俺は呟いた。

「何よー。いきなりバカって言われたら怒るに決まってるでしょー」

「その前だ、前。いくら呼びかけても反応しなかっただろ、お前」

「え？ 私？」

「そう。お前」

もとい、七星以外に誰がいるというのだろう。

あいにく俺は、生まれつき幽霊が見えるとかそういう特異な体質などは持ち合わせていない。

「……」

と、再び七星は黙り込んでしまう。

俺は全くもってわけがわからないままだ。

注文の品がやや遅れて運ばれてきた。

だが、特に待つというほど待っていたわけでもなかったので、多少の遅れはそれほど気にはならなかった。

ガムシロップとミルクをそれぞれ一つずつ流し込み、薄茶色の液体を口にする。

うん、うまい。

喫茶店の飲み物なんてただ高いだけでインスタントと同じじゃないかと言う人もいるが、そういうものはかりでもない。

俺はこの店に通いなれたというほど頻繁にやってくるわけではないけれど、ここのカフェオレの味は好ましいものだった。

遅い朝食のせいもあって空腹感はほとんどなかったが、胃の中の流し込んだカフェオレはほどよく隙間を満たしてくれた。

向かいに座る七星も、その甘ったるそうなアイスココアを口にしている。

わずかにほころんだようなその表情から察するに、口には合ったようだ。

しかしまあ……。

この店のアイスココア、俺はまだ口にしたことではない。

というか、基本的に俺は甘いものがあまり好きではない。

拒絶するほどに嫌なわけではないのだが、自分から進んで口にすることなどほとんどないと言ってもいい。

だからその、なんだろう。

店側からすればサービスなのだろうが、そのアイスココアにセツ

トでお得と言わんばかりについてくるバニラのアイスクリーム。
一体何を考えているのだろうと、真剣に悩み出しそうになる。

これがコーヒーの付け合わせならまだ納得できる。

コーヒーの苦味をアイスの甘味で補うといった具合だろう。

しかしどう見たって、アイスココアにアイスクリームは甘いものに甘いものの組み合わせでしかない。

これはようするに、客を太らせようという店側の隠れた陰謀なのではないだろうか。

もちろんそんなことはあり得ないだろうけど、甘いものが苦手な俺から言わせればこの組み合わせは拷問である。

恐らくこの先の将来、俺はこの店でアイスココアだけは決して注文することはないだろう。

「どしたの？ 隼人」

「え、ああ、何が？」

「さっきからジーツとこっち見てるけど」

「いや、特に意味はない」

アイスクリーム一つに後の人生設計をしていたなどと、バカらしくて口が裂けても言えやしない。

しかしその視線が手元のアイスに向けられていたと察した七星は、それこそ深い意味などなくこう言った。

「……食べる？」

「謹んでお断りします」

長く居座つても、体が冷房の気温に慣れてしまう。

お互いののを潤したあと、とりあえずはデパートの中を見て回ろうということに結論付けて喫茶店をあとにした。

ちなみに言うと、喫茶店はなぜか俺の奢りだった。

「私、付き合っただけでるんだけど？」

席を立つ際に満面の笑みでそう言った七星に、俺は大人げもなくわずかな殺意を抱いてしまった。

ちくしょう、この三百五十円をいつか倍にして返してもらうからな。

平日の真昼ではあったが、夏休みということも後押しし、デパートの店内はさすがに人が多い。

そういえば、時期的にももうお盆の真っ只中だった。

里帰りする人、してくる人、どちらにしても少なくはないのだらう。

とりわけ、特設スペースのみやげ物などは多くの家族連れや親子連れで賑わいを見せていた。

そんな人の波を掻き分けながら、エスカレーターを乗り継いで衣類売り場にやってくる。

このフロアは大小様々なテナントで構成され、参加店舗数は軽く十を超える。

フロアの中央にエスカレーターの乗り場があり、それを円形に囲むようにして店舗が構えられているのだ。

もちろん、店によって男性向けと女性向けでジャンルは分かれており、気がつけば七星はすでに服選びに没頭していた。

「むー……」

こっちもいいがそっちも捨てがたいなどと、唸るように七星は品定めをしている。

ほとんどの店舗では夏物大処分という看板を掲げ、店内の夏物も大半が割引価格にて放出されているようだ。

ちなみに俺は、適当にメンズのズボンやシャツを見て回っている。デザインもそうだが、まずは着心地に重点を置いている。

見た目の派手さとか、いわゆるカッコよさというのは二の次だ。そこまでファッションにこだわりはないし、どんな服でも着こな

せるという自信もない。

ようするに、普通でいい。

夏物とはいっても、どうせ暑さは九月の終わり頃まで続くのが毎年のことだ。

それを考えて、俺はズボンを二着とシャツを一着ほど購入することにした。

「ありがとうございますー」

今風の若い男性店員が、見た目に似合わず丁寧に袋詰めをしてくれたのが少し驚いた。

さて、こっちの買い物は一段落したわけだが。

「むー……」

七星は相変わらず奮闘していた。

いや、それでも七星なりに厳選した逸品を選びすぐっているのだろうけど……。

「うーん……」

その目はちよつとだけ、本気モードが入っているように見えた。

七星がさっきからにらめっこを繰り返しているのは、どうやらワンプीスのようだった。

似たような品を両手に掴んで悩んでいるようなのだが、俺からはどちらも同じものにしか見えない。

女っていうのはどうして、こんなにも電話と買い物が長いのだろう。

これはもはや、一種の社会現象として真剣に議論されてもいいような気がしてきた。

その後たつぷり二十分を費やして、結局七星は別のものを購入していた。

「あれだけ悩んで買わないとは、女ってわかんねえ……」

「何？　なんか言った？」

「……別に」

内心で呟いたと思っていたのに、無意識のうちに言葉に出してしまっていたようだ。

俺達は今、デパートの地下にある休憩場のようなスペースで休んでいた。

服を買い終えた後は、そのままさらに上の階にある雑貨売場へと向かい、同じフロアの百円ショップも渡り歩いた。

そこで買ったものはなかったが、適当に商品を眺めながら歩くだけでも時間は思いのほか過ぎていった。

その後、最上階にある書店に立ち寄った。

これといって特にめばしいものもなく、俺はマンガ雑誌を立ち読みして時間を潰していた。

しかし、ずいぶんと時間が経ったにもかかわらず、七星は一向にやってこない。

「探したい小説があるから、それまで時間を潰してて」

そう言った七星は、まだ現れない。

少し遅すぎやしないだろうか。

探して見つからないのならば、とりあえずは店員に聞いてみればいいだけのことだ。

それとも、七星も立ち読みに没頭してしまっているのかもしれない。

そうだとしたら願ける。

小説一冊を丸々読み切るとすれば、二時間程度の時間は当たり前のように消化される。

さすがにそこまで付き合うのはゴメンだ。

俺は荷物を持って、小説のコーナーを見て回った。

すると思いのほか簡単に、その一角に七星の姿を見つけることができた。

思ったとおり、立ち読みに没頭しているようだ。

「おい、七星。何やってんだよ」

「……………」

しかし、返事はない。

よほど読書に集中しているのだろうか。

「七星？　おい……………」

肩を掴んで小さく揺らす。

しかし、反応はない。

ならば、是が非でも反応してもらうつしかない。

これは喫茶店ですでに実証済みだ。

「……バカ七星」

ポツリと、囁くように言う。

同時に一歩退き、身構えた。

……………しかし。

「……あれ？」

「……………」

七星は微動だにしなかった。

おいおい、マジか？

どうなってるんだこれは。

恐る恐る、俺は七星に近寄る。

実はこれが気付かないフリで、近寄った瞬間にこっ首をグワーツと掴まれたりするんじゃないだろうか。

などと、恐ろしい想像を膨らませてしまう。

しかしそれも、ただの想像のままで終わる。

「七星、どうしたんだ……………」

と、顔を覗き込もうとして。

「……スー……………スー……………」

そんな、小さな寝息が聞こえてきた。

……………コイツ。

立ったまま寝てやがる……………。

よくよく見れば、手にしている小説もさっきから一ページとして捲られてはいない。

なんて器用なヤツなんだ。

驚きと呆れで、俺はドツと疲れが押し寄せてきた。

「こら、起きろ七星。寝てんじゃねー」

グリグリと、頭の頂点を押すようにねじった。

「……あう、痛い、痛いってば……」

意外とあっさり七星は目を覚ました。

目元を軽くこすりながら、手にしていた小説を閉じて棚の中へと戻していく。

「もー、何すんのよー……」

「よりによって、立ったまま寝るな。ムダに器用なんだよお前は」
まだ完全に起きていない七星の手を引いて、俺は足早に書店を後にする。

寝ぼけたままのコイツを放っておいたら、それこそどこに流れていくか分かったもんじゃない。

とにかく少し、休める場所に行こう。

という流れで、俺と七星は今に至る。

エレベーターの中でもウトウトしかけていた七星を引っ張ってく
るのは楽ではなかったが、水分補給をさせたらすぐに目が覚めた。
簡単な性格で助かる。

ガス欠の車体に給油したようなものなのだから。

「今何か、すつごく失礼なことを想像されたような気がする」

「……気のせいだろ」

俺はカップの中のオレンジシューズを飲み干した。

いつの間にやら時間だけがしつかりと流れ、もう夕方の四時にな

ろうとしている。

デパートの地下は食品売場にもなっているため、この時間になると夕食の買い物に訪れる主婦の客層が一段と多くなる。

「そろそろ帰るか。もう夕方だし」

空になった紙のカップ潰して、手近に合ったゴミ箱に放る。

「そうしよつか……あ」

ふいに何かを思い出したように、七星が声を上げた。

「何？」

「ごめん隼人。もう一ヶ所だけ付き合ってくれない？」

「そりゃ別にいいけど……あんま長くなるなよ？」

「分かってるって。ほら、行こう」

何がそんなに楽しいのか、七星は一足先に駆け出した。

その背中を追いかけて、俺もゆっくりと走り出す。

ふと、思った。

「これじゃ、俺が七星の買い物に付き合わされてるみたいじゃん……」

まあ、途中から分かりきってたことだけど。

First Day (3) : その男、目測百九十センチ

てつきりデパートの別のフロアに移動すると思っていたのに、七星はそのまま外のアーケード街へと向かっていった。

アーケード街は縦に長い商店街のようなものだ。

近年ではゲーセンやネットカフェの施設も多く立ち並び、ドラッグストアや薬局も軒並みを飾っている。

「えーと……あ、こっちだ」

右か左かと少しだけ悩んで、七星は左の道へと歩き始めた。

目的地はおるか、その場所さえも知らされていない俺は、ただ七星のあとについていくことしかできない。

夕方になり、アーケードの中も日中に比べるとずいぶんと人の数が増えていく。

人ごみが苦手な俺は、はつきり言えばさっさと帰ってしまいたい気分だった。

しかしまあ、理由はよく分からないが今日の七星はずいぶんと機嫌がいいようだった。

時折何の前触れもなく怒ったり、立ったまま寝るなどという大道芸は見せ付けてくれたものの。

どうせこのあとは真っ直ぐに家に帰るだけだし、そのついでにもう一軒くらい立ち寄る店があってもいいだろう。

とはいえ、一体目的地はどこなのか、俺には見当もつかないと、前を見ると。

「……あれ？」

いつの間にか、少し前を歩いていた七星の背中が忽然と姿を消していた。

慌てて振り返るが、そこにも七星の姿はない。

ぼんやりと歩いている間に、どんどん前へと進んでいつてしまったのだろうか？

いや、目を離れた時間はそれこそ数十秒程度のものだ、それは考えにくい。

一体どこに行ったのだろうか、俺は周囲のあちこちに目を配らせて……。

「わ……」

ふいに、あらぬ方向から腕を引つ張られた。

見るとそこに、七星が立っていた。

「な、七星……」

「何驚いた顔してるのよ？　しっかりついてきてくれないと困るじゃない」

「あ、ああ。悪い……」

「ほら。こつちこつち」

そうして引つ張られるがままに、七星は俺の腕を掴んで路地裏の狭い通りへと入っていく。

道幅は途端に狭くなる。

なんだか薄暗いし、人の出入りは多くはなさそうだ。

そんな道なき道を歩くこと数十秒。

「はい、到着つと」

七星はようやく俺の腕を離し、足を止めた。

「到着つて……」

七星の視線を目で追ってみると、そこは中古のCDショップのようだった。

ただし、立地条件はかなり悪い。

こんな路地裏にあるくらいだから、きっと客足も限りなくゼロに近いんだろう。

店の看板も古びて錆付いているし、ネオンサインはところどころの電球が切れている。

扱うものが中古なら、店そのものも中古だった。

しばし呆然と立ち尽くす俺を尻目に、七星はスタスタと店の中へと入っていく。

一応、自動ドアとしての機能はまだ失われてはいないようだった。しかし反応が鈍く、一度開いたドアはなかなか閉まろうとしない。その間に、俺は七星のあとに続いて店の中へと入っていった。

店に入った瞬間、雰囲気が変わった。

薄汚れてすす臭かった裏路地は、どこか大人びたムードの漂う酒場のようなイメージを思わせる。

ゆったりとしたテンポのジャズ系の曲が、雑音のない静かな店内をいつそう引き立てているようだった。

「いらつしやい」

カウンターにどっしりと構えた恰幅のいい中年男性。

この人が店のマスターだろうか？

ざっと見たところ、店内には店員らしき姿は見当たらない。

ということとは、そういうことなのだろう。

俺はカウンターのマスターに小さく頭を下げて、木造の店内に歩を進めた。

店内には中古のCDだけじゃなく、古今東西の様々なレコードも取り揃えてあった。

ほとんどが国外のバンドのものようで、俺にはタイトルさえ読めないものばかりだ。

どれもこれもが古ぼけたジャケットに納められてはいるものの、とても丁寧に扱われている。

中古といえは確かに中古だが、限りなく新品に近い中古だ。

店の奥の方に行くと、そこには比較的最近のCDが置かれていた。いわゆるJPOPや、ロック系の曲だ。

しかし、いくら新しくてもそれらはもう三年以上も前の曲ばかり。中古CDシヨップなのだから新作を探すのがおかしいとはおもいつつ、昔懐かしい曲をいくつも目にする。

もっとも、俺が懐かしいと思える曲の大半は自分でCDを持っていない曲だ。

どうしてそれが懐かしいのかというと、ようするにその曲が主題歌として使われていたドラマなどによる影響が大きい。

劇中で流れる挿入歌やエンディングで流れる曲は、回数を重ねて見るだけでいつしか口ずさめるようになるものだ。

ふと俺は、一枚のCDを手にとった。

「これは……」

それも昔、好きだったドラマの主題歌として歌われたものだった。あのドラマはかなり好きだったのに、どこか中途半端な終わり方をしてしまったのが納得できなかった。

まあ、当時の俺は十三歳。

恋愛ドラマの展開にいちいち反感を覚えるなど、今では到底ありえない話だけど。

ジャケットを裏返す。

隅の方に、手書きで値段が書かれたシールが張られていた。

値段は三百五十円。

まあ、さすがに中古というだけあってずいぶんと安い。

迷う時間はいらなかった。

俺は黒い買い物籠の中にCDを一枚入れて、再び店内をグルリと歩き始めた。

しばらく店内を回って、ようやく思い出した。
七星はどこだ？

入店してからもう二十分ほどが経っている。

長居はしたくないといっておきながらも、ずいぶん時間が経ってしまった。

「アイツ、どこ行っただ……」

この店は一階のフロアのみで構成されている。

決して広くもない店内だから、探せばすぐに見つかるはずだ。と、CDの棚からレコードの棚へと変わる途中に。

「あ、いたいた。おい、七……」

見つけたその背中に声をかけようとして、俺は思いとどまった。

七星は小さなテーブルのようなものに肘を寄せながら、大きなヘッドフォンに両手を添えている。

耳に流れるメロディのリズムを感じ取るように、片足の爪先が一定の間隔でトントんと床を叩く。

目を閉じ、メロディに合わせて何度も小さく頷く。

その横顔はどこか幸せそうで、つつい声かけのがためならわれた。

見れば七星が肘を乗せている小さな台のようなものが、他にも二つほど並んでいる。

レンタルショップなどで見たことがある。

これは確か、CDを視聴できるプレイヤーだったはずだ。

ようするに、実際に聴いて気に入ったら買ってくださいという店側の配慮である。

見た目は古臭いけど、客への心遣いは立派なもんだと、俺のこの店に対する印象は好感触だ。

「あ」

その声には俺は視線を戻す。

見ると、七星は大きなヘッドフォンを外してプレイヤーのスイッチを切るところだった。

曲の演奏が終わったのだろう。

「ごめんごめん、つい夢中になつてた」

「いや、別に待ってないからいいよ。で、お前は買うのモとかないのか？」

答える前に、七星が俺の手に提げた籠の中身を覗う。

「隼人はそのCD、買うの？」

「ん？ ああ。昔好きだった曲なんだ、これ。それにまあ、値段も安かったし」

「ふーん……」

「それで、お前はどうすんの？」

「え、私？」

「今聴いてた曲、気に入ってるなら買えばいいんじゃないか？ それとも、以外にもレアで値段がヤバイとか？」

「んー……まあ、確かにお気に入りではあるんだけど、ね……」

七星の言葉はどこか歯切れが悪い。

もしかして本当にプレミア物で、バカみたいな値段がついているのか？

「まあ、私のことはいいからさ。買うなら早く会計済ませてきなよ」

「え？ あ、ああ、そうだな」

促されて、俺はマスターの構える会計に向かう。

それに気付いてか、マスターの男性は読んでいた新聞を折り畳んで椅子から腰を上げた。

途端に、俺はギョツとした。

マスターの身長は、それこそ楽に百九十センチに届くのではないかという巨体だった。

プロのバスケット選手、いや、バレーボール選手並の背丈だ。

俺の身長も百七十八センチで、どちらかと言えば長身に部類される。

が、これは比べ物にならない。

今でも百八十センチに届かない二センチを嘆いているというのに、世の中上には上がいるのだと思い知らされた。

「三百五十円だな、毎度あり」

その体躯とは裏腹に、マスターの声色はとても温厚だ。

俺は財布から小銭を取り出し、ちょうど三百五十円をマスターに手渡した。

するとマスターは再び椅子に腰掛け、読み途中の新聞を捲り始めた。

なぜだか俺の中に、敗北感のようなものが芽生えてしまった。

「終わったぞ……って」

会計を済ませて戻ってくると、七星はまたヘッドフォンをして先ほどと同じ曲に耳を傾けていた。

だから、そんなに気に入るくらいに好きなら買ってしまった方がいいのに……。

やれやれと、目を閉じてリズムを取る七星の側頭部を軽く指で突いた。

「わっ……」

そんな声で振り返る七星だったが、俺が会計を終えたのを確認するとすぐに演奏を停止させた。

「あはは、ごめん」

「いや、いいけどさ。その曲、買えばいいじゃん。好きなんだろ？」

「……うん。まあ、ね」

やはり、七星の言葉はどこかはつきりしない。

遠慮がちと言つか引け目があるというか、どちらにしてもよく分からない。

「……まあ、いいか。なら、そろそろ帰ろう」

「ん、そうしょ」

一転して、七星はまた機嫌のよさそうな顔を見せる。

やっぱり女って、よくわかんねえ……。

「マスター、お邪魔しました」

店を出る際に、七星がそんなことを言ったので驚いた。

振り返ると、マスターは椅子に座ったまま片手を上げてそれに応えていた。

ますます驚いた。

First Day(4)：自由の羽根

家に着いたのは、ちょうど夕方の五時を少し回った頃だった。

「ただいま」

「ただいまー」

そう言つて玄関の扉を開けると、キッチンからまな板を叩く音が聞こえてきた。

母さんが夕食の支度をしているのだろう。

「あら？ 珍しく二人一緒なのね。お帰り」

料理の手を止め、母さんはキッチンからひよっこりと顔を覗かせて言った。

それはいいが、包丁を持ったままというのは危ないから気をつけてほしい。

「あ、明美さん、私も手伝います」

七星は一足早く家の中に入り、荷物をリビングのソファに預けるとキッチンへと向かった。

「あら、いいのよ七星。ゆっくり休んでなさい」

「いえ、お手伝いします。明美さんだって、今日は朝から忙しかつたじゃないですか」

「ああ、それね。ほら、もうすぐ海岸沿いの神社の夏祭りがあるでしょう？ そのことについての会合だったのよ」

「あ、そっか。もうそんな時期ですね」

キッチンから聞こえてくる二人の会話を聞きながら、俺はとりあえず荷物を持って部屋へと戻る。

荷物自体は重く感じるほどのものでもないが、なんだかんだで今日は結構歩き詰めだった。

おかげでふくらはぎの筋肉が少し張っている。
極端な運動不足ではないが、最近あまり体を動かしてなかったのも事実だ。

これを機に、少しは運動する時間を増やした方がいいかもしれないな。

ベッドに背中を預けながら、俺は今日買った服を袋から取り出す。値札などのついている不要な部分をはさみで切り取って、タンスの中に服をしまう。

「これでよし、と」

ちょうどいい具合に腹も減ってきた。

夕食まではもう少し時間がかかるだろうから、それまでは部屋でのんびり過ごすことにしよう。

何もせずにリビングでテレビをつけていると、七星がつるさいかな……。

さて、何をして時間を潰そうか。

と、手を伸ばした先に。

「……………」

今買ってきた、一枚のCD。

ビニールを破り、ケースの蓋を開ける。

机の上にあるCDプレイヤーにディスクをセット。

イヤホンを耳に。

読み込みの機械音。

再生のボタンを押す。

やがて、あの頃の懐かしいメロディが流れ出す。

自分でも気付かないうちに、笑みがこぼれる。

指先が、メロディに合わせて部屋の床をコツコツと叩いていた。

いつもと変わらない夕食の風景。

とりわけ今日は、いつもよりも賑やかだったように思える。

とはいっても、母さんが俺達二人にどこに行っていたのと聞き、それに対して七星が一方的に喋って俺は相槌と否定を繰り返しただけ。

全部に相槌なんて打ってたら、俺は今頃喫茶店で店員相手にディッシュ皿を投げ合って戦う、謎の奇人変人に仕立て上げられていた。今日一日の出来事を語るだけで、どうしてそこまで常識はずれなストーリーが展開されるのだろう。

今に始まったことじゃないが、七星の話の飛躍っぷりには気疲れさせられる。

夕食後の時間は緩やかに流れる。

母さんはキッチンで洗い物をし、俺と七星はソファに座ってテレビを見ていた。

内容はバラエティの番組なのだが、司会者とゲストのお笑い芸人が見事に噛み合わない。

それがまた番組全体の雰囲気をも別の方向から盛り上げる形となつて、大きな笑い声が沸き上がった。

こんな感じのトーク番組は、俺も七星も好んでみるものだ。

ただ単純に持ちネタを披露してくれるよりも、何気ない日常会話を面白おかしくしてくれるほうがより面白い。

と、ここで番組のコーナーが変わったようだ。

ここ最近、番組内で人気が出てきているという心理テストのコーナーが始まった。

スタジオの向こうから、このコーナーの顧問とも言わべき心理学者の男性がやってくる。

最近ではこういう、学者とか教授といったいわゆるお偉い方々もバラエティの番組で多く見かけられるようになった。

それが今時の視聴者には受けがよく、様々な番組でゲストやレギュラーとして取り上げられている。

『それではですね、今回もまた一つ、ちょっとした心理テストを皆さんに受けてもらいたいと思います』

心理学者の男性はそう言つと、問題の書かれたホワイトボードをひっくり返した。

するとそこには、簡単な図式で父、母、息子、娘と、それぞれに書かれ、それらが船の上で乗員のように並んでいる。

『今回ののはですね、もしかしたらちよつとだけ残酷なものかもしれません』

残酷という言葉に、司会者やお笑い芸人がここぞとばかりに突っ込みを入れる。

そのたびにスタジオに笑いが沸き起こり、いつそうヒートアップしていく。

司会者が適当なところで場を静め、引き続き心理学者の男性が先導する形になる。

『問題としては簡単です。これはですね……』

問題の解説が始まった。

それは、俺もどこかで一度は耳にしたことがあるような心理テストだった。

舞台設定として、登場人物は海の上を漂流しているという状況にある。

食料も水もすでに底を突き、助かる見込みはあまりにも少ない。

そんな彼らに、わずかに救いの目が出る。

遠くに陸地が見える。

あそこまで辿り着くことができれば、助かるかもしれない。

しかし、ここでアクシデントが起こる。

ボートの船底から、浸水が始まった。

結論から言つと、このままではボートは転覆してしまう。

が、誰か一人だけならボートに乗せたままでも陸地まで辿り着くことができる。

その場にいる誰しにも、すでにこの場所から陸地まで泳いでいける体力は残されていない。

同様に、誰か一人に助けを呼びに言ってもらったとしても、助けが来る前に彼らは溺れてしまう。

この状況で、あなたなら誰を助けますかという、そういう心理テストだった。

漂流者は四人家族。

それぞれ、父、母、息子、娘の四人である。

ゲストはそれぞれに手渡されたボードに、自分が助けるべきと思う人物とその理由を書いて提示する。

結果として、心理学的観点から捉えたその人間の深層心理が分かるのだという。

テレビの中の、しかもかなり限られた状況の問題ではあったが、なるほど、確かにこれはある意味で残酷かもしれない。

誰か一人を助けるということは、同時に残りの三人を見殺しにするということなのだから。

さすがにお笑い芸人のゲスト達も、問題の取り組みには真剣な表情で望んでいるようだ。

普段見せないような苦悶の表情を見せる人も少なくない。

「なんか、嫌な出題ねえ」

キッチンでの洗い物を終えた母さんが、テーブル越しにそんな言葉を呟いた。

「でもまあ、例えばの話だしさ」

俺は何気なく、気軽な感じで言葉を返した。

「まあ、そうだけだね。あんまりこういうのは好きになれないな、母さんは」

それは当然だと思う。

そもそもこの問題のような状況に遭遇することなど、それこそ常識で考えたら天文学的な確率のものだろう。

「ちなみにさ、母さんだったら誰を選ぶ？」

俺は背中越しに聞いてみた。

「んー、そうねえ……」

あまり好きではないといった割には、母さんは真剣に考えている。

しばしの間うーんと唸りながら、口を開く。

「選べないなあ、母さんは。そんなことを選ぶくらいだったら、全員が助かる方法を考えるわ」

それは多分、問題の答えとしては正解でもなく不正解でもないだろう。

俺も実際、母さんと全く同じ考えだった。

ありえないことだけど、そんな状況になったら誰を残すかではなくどうすれば全員が生き残れるかを考えたい。

設定をそのまま引き継ぐのなら、この四人は血の繋がった家族だ。赤の他人ではない。

その中から生かす一人と殺す三人を選ぶなんて、出来っこない。

「なあ、七星は……」

話を振ろうと振り返って、俺は思わず呼吸が止まりそうになった。そこに、見てはならない何かを見てしまったような気がして。

だからすぐには気付くことができなかった。

だって、ウソみたいだ。

どうして、七星は……。

「え、何？」

七星が俺のほうを振り返る。

……気付いて、いないのだろうか。

「ちよっと、どうしたの七星……」

俺の後ろの母さんも、その異変に気付いて声が裏返りそうになる。

「え？ え？」

やはり、七星は気付いていなかった。

驚きに満ちたその表情の中に、理由の分からない場違いな涙が流れていることに……。

自室のベッドの上、俺は明かりもつけずに灰色の天井をぼんやりと見上げていた。

眠るにはまだ早すぎる時間、しかしこれといってすることは何もなく、仕方ないのでベッドの上で天井を見上げている。

あの後……。

正体の分からない自分の涙に、七星は少しだけ取り乱した。その場をうまく取り繕ってくれたのは、母さんだった。

俺自身、何がなんだか全くわけがわからなかった。

「隼人、悪いけどちよつと、七星と二人にして」

そう言った母さんの言葉に、俺は素直に従った。

正直あの場では、俺は何もすることができなかっただろう。

不意打ちとも取れる涙に取り乱していたのは、七星以上に俺だったのかもしれない。

……もう。

終わったことだと思っていたのに。

あんな記憶は過去のものだと、捨て去ってしまったと思っていたのに。

そうじゃ、なかった。

少なくとも七星は、違った。

まだ心のどこかで、あときの傷を引きずっている。

アイツは悪くないのに。

罪を責められるのは、七星ではなく俺のはずなのに。

罪人である俺が全てを忘れ、犠牲者である七星がまだ過去を引きずっている。

……理不尽だ。

奥歯が軋む音がした。

行き場を失った怒りが、再び胸の内で膨れ上がってくるよう。
目を閉じる。

どうしてこんなにも、鮮明にイメージが流れ込んでくるんだろう。

赤い炎。

罵詈雑言。

打ち付ける、耳障りな音。

悲鳴。

泣き叫ぶ、声。

何度も振り上げる、悪魔の拳。

何もかもが燃え盛る炎の中で。

何度も、何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も……。

「やめろっ！」

自分の言葉の残響が、部屋の四方の壁に反射してしつこく耳の奥に跳ね返る。

「はあ、あ…… あっ、はあ……」

呼吸が整わない。

心臓の鼓動が否応なしに高まる。

ドクン、ドクン。

忘れかけていた記憶が呼び覚ます。

その手に残る、罪の重さを。

嫌でも思い知らされる。

あの、炎の中で。

俺は、間違いなく、確かに……。

「……………ッ！」

消し去れない。

拭い切れない。

それは、あの日から分かっていたことだ。

それは、最初から分かっていたことだ。
今更、それを……。

無かったことなんかに、できるはずがないんだ……。

コンコン、と。

部屋の扉を、どこか遠慮がちにノックする小さな音。

「……隼人、起きてる？」

その声に、俺は跳ね上がるように体を起こした。

「七星、か……？」

「うん……」

「待ってる。今開けるか……」

「あ、いいの。このままで聞いて」

立ち上がって歩きかけた体に急ブレーキをかける。

ドアノブを回そうと伸ばした手が、虚しく宙を泳いだ。

「さつきはごめんね。いきなり泣き出したりなんかしちゃって……
自分でも、よく分からないんだけどさ」

「……ああ。もう、大丈夫か？　少しは落ち着いたか？」

「うん。もう平気」

「……そっか。なら、いい」

「うん……」

それっきり、俺も七星もしばらく黙り込んだままだった。

もっとかけてやる言葉はあるはずなのに、どれだけ探しても正しい言葉が見つからない。

それはまるで、さつきの心理テストとよく似ていた。

どの応えも正解ではなく、同時に不正解でもない。

それでも俺は、思ったはずだ。

正解でも不正解でもない、別の答えを探すんだと。

だけど今は、見つけれない。

かける言葉が、見つからない。

「じゃあ、私はもう寝るよ」

「……ん、分かった」

「おやすみ、隼人」

「ああ、おやすみ……」

扉越しに、七星の足跡が少しずつ遠ざかっていく。

一瞬だけ訪れる安堵と、その直後に押し寄せる罪の意識。

俺は自分の無力さ加減に、また奥歯をギリと噛み締めた。

月明かりに照らされたカーテンを静かに開ける。

頭上には、綺麗な半月が金色に光っていた。

俺は机の上に放り出されたままの空のCDケースを取る。

中身のCDは、プレイヤーに入ってたまま。

詩もメロディも、全てが好きだった曲。

タイトルは、フリーブルーム。

自由の羽根。

「ウソばっか……」

俺は誰にでもなく、自分自身に呟く。

自由も羽根も、俺にはない……。

Second Day(1) : ネボスケ二人

いつの間に眠ってしまったか、全く覚えていない。

夜中にうなされるように、何度も目を覚ましていたのは覚えてい
る。

その度に俺は、惰眠を貪るように無理矢理目を閉じて眠ろうとし
た。

だが、睡魔はなかなかやってこない。

そんな意味のない奮闘をどれだけ繰り返していたのだろうか。

気がつけば俺はまた眠りについて、またうなされるように起こさ
れてはを繰り返していた。

頭が重い。

脳がそっくりそのまま鉛の塊にでもなってしまったかのようだ。

中途半端な眠気はくすぶるように残り、体全体もどこか気だるさ
で充満している。

起き上がることもさえも苦痛以外のなにものでもなく、かといって
目を閉じても一向に眠りは訪れない。

天井を見上げたまま、前髪をクシャリと掻き分ける。

まぶたは重いのに、不思議と目はしっかりと覚めていた。

「……」

首から上だけを横倒しにして、薄暗い部屋の中、枕もとの目覚ま
し時計を見た。

時刻は十二時半を示している。

昨夜からほぼ半日以上も眠っていたことになる。

だというのに、このだるさは何だ。

疲れは抜けるどころか、いっそう蓄積している。

いや、確かに肉体的な疲労は毛ほども感じられない。

昨日あれだけ張っていたふくらはぎの筋肉だって、今はもうなんともないのだ。

だから疲れが溜まっているとすれば、それは肉体的なものではなくて精神的なものだ。

腹ただしいことに、心当たりは嫌というほどに明確だ。

分かりきっていたことといえば確かにそれまでのこと。

一夜過ぎたくらいで何もかもを忘れ去れるくらいなら、誰だってこんな苦勞はしなくてすむ。

「う……」

両腕に力を入れて、なんとか上半身を起き上がらせる。

少しでも力を抜くと、鉛の頭はそれだけで前のめりに沈もうとする。

左右に頭を振って、どうにか意識を保たせようとするが、効果のほどはたかが知れている。

部屋の明かりが消えているとはいえ、なんだかやけに薄暗い。

俺はベッドから下りて、机に寄りかかりながらカーテンを開け放った。

昨日までの快晴がウソのように、空は灰色一色の曇天に包まれていた。

今はまだ雨は降ってこそいないものの、いつ降り出してもおかしくない。

吐き気がした。

空模様がそっくりそのまま、俺の胸の内を絵に表したように思えて……。

階段を下りる途中、トントんと包丁がまな板を叩く音が聞こえてきた。

キッチンに立つ人物はすぐ想像できたが、同時にどうしてだろう

という疑問も浮かび上がる。

リビングに足を踏み入れると、案の定、キッチンでは母さんが昼食の準備に追われているところだった。

「あら、おはよう隼人。ずいぶんと寝てたみたいね」

母さんは小さく微笑みながらそう言うと、出来上がった昼食を次々にテーブルの上へと運んでいる。

「……おはよう。母さん、今日は仕事休み？」

「え？ ああ、そっか、まだ言ってなかったっけ。昨日から一週間、お盆休みなのよ」

なるほどと、俺は納得した。

リビングに目を向けるが、そこは電気とテレビがついているだけで誰の姿もなかった。

普段ならソファの上でくつろいでいる七星の姿も、今日は見当たらない。

「……母さん、その……七星は？」

コトン、と。

サラダを盛りつけた皿をテーブルに置き、母さんは少しだけ難しい表情を見せた。

「まだ起きてこないわ。寝てるのか、部屋に閉じこもってるのか……」

……

「……そっか」

リビングの天井を見上げる。

その先は、七星の部屋だ。

今頃アイツは、何をしているんだろう。

何を思い、何を考えているんだろう。

また、あの時と同じなのか。

繰り返すだけなのか。

過ぎ去った日々の記憶が、俺の脳裏に焼き付けた記憶が甦る。

「……顔、洗ってくる」

俺はリビングを出て、洗面所へと廊下を歩く。

「ええ、そうしてらっしゃい」
母さんも俺の胸の内を読み取ったのか、普段に比べてどこか言葉が優しかった。

こんな不安定な心境だというのに、空腹だけはしっかりと安定を保っている。

朝の一食を抜いているだけあって、食欲そのものはあった。しかし、いくら食べても味が分からない。

おいしいのは分かっている。

ただ、何か足りない。

それは多分、味の工夫とかさじ加減とか、そういうものではなくて。

ただ単純に、いつもの三人の食卓が、今は二人だっていう……。ただ、それだけのことなのだろう。

時計の秒針が規則正しく時を刻む。

やや遅い昼食を終えて、俺は着替えを済ませてリビングのソファに座っている。

特に見たい番組もなかったけど、何かに集中していないと溜め息ばかりが出てくるので、とりあえず今はテレビの画面に集中している。

「はあ……」

ダメだ。

結局溜め息が漏れた。

それもそのはずだ。

一体俺は何が楽しくて、真昼間から料理教室入門なる番組を見なくてはならないのだろう。

しかも、昼食を食べ終えた後だ。

確かにそれなりにおいしそうなものが出来上がってはいるが、食いたいとは思えなかった。

それよりも何よりも、今になって再び眠気が少しずつ押し寄せてきた。

空腹が満たされたことで、休息の足りない体が睡眠を欲しているのかもしれない。

まあ、それも当然かもしれない。

俺が自分で記憶しているだけでも、昨夜のうちに起きた回数は四回だ。

一度目が覚めると、次に眠るまでに大体一時間近くは間があったような気がする。

そんなんじゃないともな睡眠など取れたといえるわけもなく、今頃になって眠気が出てくるのも不思議なことではなかった。

「……んー」

あくびを噛み殺して、少し背伸びをする。

体中のだるさはいくらかなくなっていたが、それでもまだ疲れのようなものが残っている。

今ここで眠ってしまったえば、多分夜中まで目が覚めないだろう。

一日の大半を寝て過ごすというのも考え物だが、この際仕方がない。

昨日みたいに気分転換で出かけようとも思ったが、外はあいにく天気は下り気味だ。

昨日までの連日の炎天下がウソのように、灰色の空の下は澱んだ空気が漂っている。

今にも雨が降り出しそうな空気は、それだけで寒気を運ぶ。

そいえば、今日は冷房がかかっていない。

それはつまり、冷房などなくてもわずかばかりに肌寒さを感じる日ということだ。

季節が急に変わってしまったような錯覚さえ覚える。

天気の下り具合は梅雨のそれだが、空気は秋から冬に移り変わる時期のものによく似ている。

まあ、どちらにしたって外出する気分にはあまりなれない。

寝る寝ないは別として、静かに部屋の中で過ごすというのは妥当な判断だろう。

リモコンのスイッチを切る。

電子音と共に、画面が黒く消える。

ソファから立ち上がるうとした、そのとき。

「おはよー……」

と、聞き慣れたそんな呑気な声で。

目元をこすりながら、今まさに起きたといわんばかりの七星がやってきた。

七星は顔を洗うと、遅い昼食に手をつけ始めた。

母さんは最初、心配そうにテーブルの向かいに座っていたけど、ほどなくして二人の会話は小さな笑い声に包まれていた。

まるで、昨日の出来事がウソのよう。

少なくとも、こうしてその横顔を見ている分には。

Second Day(2)：夕飯戦争

ポツリポツリと。

灰色の空の隙間から、とうとう雨粒が降り出した。

「やだ、洗濯物取り込まなくっちゃ」

週刊誌を読みふけていた母さんが、急ぎ足で庭に向かう。

降り出したばかりで、雨脚はまだそれほど強いものではない。

空と同じ灰色のアスファルトの地面が、雨に濡れて次々に黒く変色していく。

「雨、かぁ……」

窓ガラス越しに外の景色を見て、七星は呟いた。

ぼんやりと空を見上げては、どこか憂鬱そうに溜め息をついている。

俺はただ、そんな七星の横顔を眺めていた。

一夜明けて、七星は普段どおりに振舞っている。

俺は最初、それが無理して作っているものじゃないかと思った。

けれど、こうして見る七星は普段の何一つ変わらず、俺の余計な心配もただの考えすぎだったんじゃないかと思わせる。

それなのに。

まだ、頭から離れないんだ。

昨日の、七星の言葉が。

『 うん。 もう平気 』

平気なわけがない。

そんな声じゃなかった。

だけど俺は、それを確かめることができなかった。

なんのことはない。

ただ扉を開けて、七星の顔を見るだけでよかったのに。

できなかった。

心のどこかで、それを怖いと思っている自分がいた。
眠れない夜は、その反動だったのかもしれない。

もしかしたら俺は、未だに……。

自分と向き合うこともできずに、今日までを生きてきたのかもしれない。

「……………」

目を閉じれば、鮮明に思い出せる。

だから夜は、嫌いだった。

目を閉じなくては眠ることもできないのに、目を閉じれば何もかもが押し寄せてしまうから。

一体、俺は……。

いつからそれに、慣れてしまったんだろうか。

ゆっくりと目を開ける。

そのまま目を閉じていると、眠ってしまいそうだったから。
と……。

「……………え？」

目の前に、何かがある。

それが七星の指先であると気付くのに、ずいぶんと時間がかかった。

しかし、それに気付くよりも早く。

「おりゃ！」

そんな七星の声と共に、俺の額に軽い衝撃が訪れる。
ズビシツ、と。

あえて効果音を付けるなら、そんな感じだろう。

「な、なんだ……？」

突然の衝撃に、俺はたじろいだ。

その衝撃の正体が七星の手刀……ようするにチョップであることに気付くのに、やや時間がかかった。

「何してんだ、お前……」

「いや、何って言われても……」

目の前の七星はどこか笑いを堪えているような様子だ。

「隼人があんまりボーツとしてるもんだから、いっちょ気合いを入れてやるのかなと」

だから、どうしてそれでチョップが飛んでくるんだ、チョップが。気合を入れるって言えば、平手打ちだろ普通は。

いや、だからといっていきなり平手打ちを見舞われてもそれはそれで大迷惑なんだが。

「で、どう？」

「どうって……何が？」

「少しは目が覚めた？ あんまりボーツとしてると、脳が溶けるわよ」

身を乗り出しながら七星は言う。

今になって気付いた。

俺と七星の体の距離が、ずいぶん近い。

まあ、原因は七星がずっと身を乗り出しているせいなのだが。

そのせいで、わずかながらにも七星の胸元がはだけ、そこから肌が覗いていた。

不可抗力というか、あくまで意識して見ようとしているわけじゃないのに、正直目のやり場に困る。

「い、いいから離れる。危ないから！」

俺は目を背けながら、七星から視線を外した。

ああ、くそ。

なんだって俺がこんなに緊張しなくちゃいけないんだ。

口にした言葉とは裏腹に、俺の心臓は確かに鼓動を高鳴らせていた。

「む、なんか釈然としないんだけど」

七星は俺の態度が気に入らなかったのか、わずかに眉を吊り上げ

る。

「釈然としないのはこっちだ、バカ！ 少しは考えて行動しろ！」

「バ、バカって言うな！ 昨日あんだだけ忠告したのに、まだ分からないかアンタは！」

「うるせえ！ あれのどこが忠告だ！ ああいうのは駄々をこねるって言うんだよ！」

「うー、言わせておけば！」

ギヤーギヤーと。

俺と七星は、一体何が原因なのか分からなくなるほどに野次を飛ばしまくっていた。

そうしている間にも、時間だけが流れていく。

だけど、それでよかったのかもしれない。

胸の内ですぶつてた黒い気持ちはいつのまにか消え、口喧嘩しているこの瞬間さえも楽しいと、そう思えるようになっていたから。

雨は次第に降る勢いを増していった。

庭にもいくつかの小さな水溜りができ、降りしきる雨が一つまた一つと波紋を打ちつけていく。

パチン。

駒が盤を叩く。

どういう経緯か、俺と七星はリビングの真ん中で将棋を指していた。

それはというのも、母さんがどこからか見つけてきた将棋盤と駒をリビングまで運んできたのが発端だ。

その頃ちようど低レベルな争いを繰り返していた俺達は、その決着を頭脳戦に持ち込むことになったのだった。

だが、しかし。

対局もそろそろ終盤を迎えようとしているが、俺はかなり追い詰

められている。

俺の王将は守りをことごとく突破され、もはや丸裸に近い状態だ。対する七星は余裕どころか、俺の飛車と角をすでに奪い取っている。

これでどう戦えというのだろう……。

「はい。王手銀取り」

「げ……」

また負けた。

わずか六十二手で詰みである。

「ふっふっふ、まだまだね隼人」

勝ち誇り、七星は見下すように嘲笑う。

「ぐ……」

言い返そうにも、俺はグウの音も出ない。

一時間の間に五回の対局、結果は俺の五連敗。

そりゃ、将棋なんて基本ルールを覚えてる程度で戦略なんてものは何一つなかったが、まさか五連敗とは……。

プライドとか尊厳とか、言葉ばっかで形になってない色んなものが俺の中で音を立てて崩れ落ちていく。

「もう一勝負しようか？」

「……いい。もう遠慮する」

ドツと疲れが押し寄せる。

よもや全敗するなどとは、思っても見なかった。

得手不得手という言葉はあるが、そんなので慰められると余計に惨めになってくる。

「ふふん」

コ、コイツ、今鼻で笑いやがった……。

俺は将棋盤を運び、今はもう使われていない、過去に父親の書斎として使われていた部屋に入った。

もう使われなくなっただけでいぶん経つのに、掃除などの手入れは

しつかりと行き届いている。

どこか懐かしく感じる部屋の匂いが、少しだけ俺の後ろ髪を引くようだった。

押入れの戸を開け、そこに将棋盤を戻す。

俺の父親が死んで、もう十五年が過ぎようとしている。

幼い頃の記憶なんて、あてにはならないけど。

この部屋はあの日から……父親が最後にこの家を出て行ったあの日から、何一つ変わらないままだった。

掃除をしているのは母さんだろう。

部屋の大半を占める書物を整理すれば、もっと広く見えるんだろうけどな。

本の匂いの染み付いた部屋。

俺が父親と共に過ごした時間は、刹那的なほどに短い。

面影すらともに思い出せない父親。

写真でしか知らないその顔は、母さんによく似合う笑顔で笑っていた。

戸を閉めて、部屋を出る。

また、この場所だけ時間が止まる。

リビングに戻ると、時計は夕方の四時になったところだった。

「もう四時か……」

とはいっても、起きてからまだ三時間ほどしか経っていない。

今日はなんだか時間の流れ方が遅かったり早かったりで、時間感覚がおかしくなりそうだ。

雨は相変わらず降り続いているし、勢いも少し強まっているようだ。

さて、いよいよすることがなくなった。

せめて天気が晴れていれば、外に出かける気にもなっただろうに。

「さて、と……」

お茶を飲んで休憩していた母さんが、そう言って腰を上げた。
「んー。そろそろ買い物行つてこようかな」

なんだかんだでもう夕方だ。

夕飯の支度を始める時間もそろそろ押し迫っている。

「ああ、いいよ母さん。買い物は俺が行ってくる」

「あら？ 頼まれてくれるの？」

「うん。何もしないでボーッとしてるよりはいいから」

「それじゃ、お言葉に甘えるわね」

そう言つと、母さんはメモ帳に買い物リストを書き始める。

その間に俺は部屋に戻り、上着を取つてくることにした。

夏とは言つても雨の中を半袖で歩くのは寒そうだ。

「はい。それじゃお願いね」

母さんからメモの紙とお金を受け取り、俺はそれをポケットの中に突っ込んだ。

「んじゃ、行ってくる」

「はい、気をつけてね」

靴を履き、玄関の扉を押し開ける。

「結構強いな……」

軒先に立つと、思った以上に雨脚は強まっていた。

風はないが、気温も肌寒さを感じるほどに冷え込んでいる。

「つと、いけね。傘は、つと……」

「はい」

「あ、サンキュ……つて、ちょっと待て」

「何？ まだ忘れ物？」

「そうじゃない。つてか、何でお前がいるんだよ七星」

「何よ。いちゃ悪い？」

「いや、別に悪くはねーけど……」

「なら問題ナシ。さあ、さっさと行きましょー」

そして一足先を歩き出す七星。

「はあ……ま、いつか」

考えるよりも諦める方が楽だと、俺は結論を出す。

傘を広げ、道を歩く。

バラバラと音を立てて降る雨の中、数歩先の赤い傘が、嬉しそうにくるくると回っていた。

「ジャガイモ、ニンジン、タマネギに牛肉……って、どう見ても今夜はカレーだよな、これ……」

母さんに渡されたメモを見ると、そこにはカレーの定番の食材一覧が書き連ねられていた。

いや、そもそもメモの一番上がカレールーになっている時点でモロバレなんだけど。

「ニンジンにタマネギ、つと。あとは牛肉だけ？」

俺の隣でカートを押す七星が声をかける。

「いや、他にもあるな。トイレットペーパーと洗剤と、あと牛乳だな」

メモを読み上げながら、俺と七星は並行して歩く。

最寄のスーパーであるここは、時間帯的にも多くの客足が集中していた。

品揃えを考慮すれば駅前まで足を伸ばした方がいいのだろうけど、大体の日用品や食材はここで揃う。

それに今日は雨降りだ。

雨の中、わざわざ遠出したくないと思う人も少なくないのだろう。

「よし、と。んじゃ、あとは牛肉だけだな？」

「そうだね。って、ちよつと待って」

「つと、何だ？」

歩き出した俺の肩を七星が掴む。

「いいから、もうちょっと待って」

そう言う七星は、なにやら熱心に携帯のディスプレイを凝視していた。

なんなんだ、一体？

と、そんな疑問を浮かべたとき。

「ダッシュ！」

「……は？」

七星は突然走り出した。

それも、肉売場に向けて一直線に。

『ただ今よりお肉売場にて、タイムサービスを行わせていただきます。数に限りがございますので、お早めにご利用ください』
そんな店内放送が流れたのは、七星がダッシュした直後のことだった。

「まさかアイツ、これを狙ってたのか……」

七星がジッと携帯を見ていたのは、そこにあるデジタル表示の時計でタイミングを計っていたのだろう。

事実、七星の動きに合わせるようにして、周囲で目を光らせていた主婦の方々が押し寄せるように肉売場に集結した。

「……なんだ、これは……」

すし詰め状態とはまさにこのことを言うのだろう。

肉売場の正面はちよつとした戦場へと変貌し、無言の圧力が奥様方の士気を高揚している。

『はい、押さないで。押さないでください。数は十分にご用意しておりますので、どうか押さないでー』

売場担当の店員の人だろうか、メガホンを片手に構えて売り子をしている。

俺はその人ばかりが恐ろしく、中々近くに寄れないでいた。

いや、誰だってこんな後継を目の当たりにすれば引くと思う。

それよりも、我先にと突っ込んでいった七星は果たして無事なの

だろうか？

肉の有無よりも、本気でアイツの身が心配になってきた。

「お待たせ」

「うお！」

と、七星はいつの間にか俺の背後に立っていた。

しかもその手にはしっかりと、戦利品の割引シールつきの牛肉が握られていた。

「チョロいチョロい」

「……」

俺は感心していいのか呆れていいのか、どちらにしても言葉が出ない。

「……お前、スゴいな……」

「そう？ 慣れれば結構簡単だけど」

慣れる、か。

……アレに、どうやって慣れると？

俺達の目の前では、未だに争奪戦が繰り広げられている。

規模こそ小さいものの、あれは間違いなく戦場だ。

「……さっき携帯見てたけど、あれってやっぱりタイミングを計ってたのか？」

「そうそう。日によって微妙に誤差が出るんだけどね。まあ、今日は平均より少し早かったかな。主婦の人達が一瞬で遅れてたし」

一瞬、ねえ……。

あの、ミサイルみたいな勢いで飛びついたオバサン達の反応は、あれでも遅れていたということだ。

「ま、なんにしても私の敵じゃないけどね」

勝ち誇り、七星は言う。

……もはや何も言うまい。

俺は今日、あまりにも身近すぎて気付かなかった戦争を目の当たりにした。

それでいいだろ？

「どうしたの隼人？　なんか疲れてない？」

「いや、別に疲れてはないけど……」

溜め息を一つついて、俺は続けた。

「お前、いい母親になると思っよ。うん」

「な……」

俺としては、特に意味もなく告げた言葉だった。けど、七星にとってはそうではなかったようで。

「……七星？　どうかしたか？　顔、赤いぞ？」

「べっ、別に！　な、何でもない！」

何でもない割には、やたらとろれつが回っていない。

「……そうか？」

「そう！　ぜ、全然おかしくない！　おかしくない！」

二度繰り返す。

わけが分からない。

俺、何か変なこと言っただけ？

雨の帰り道。

行きとは違い、今度は俺が七星の数歩先を歩いている。

が、なにやら七星の様子がさっきからおかしい。

「落ち着け、私……何も聞いてない何も聞いてない何も聞いてない」

「……」

そんな囁きがさっきから聞こえてくる。

その表情は赤い傘が邪魔して読み取れないが、どこか慌てているのは確かだった。

帰宅した途端に、今まで強かった雨脚が目に見えて弱まり始めた。何にせよ、雨が止んでくれるならそれに越したことはない。

庭の草木に水をやる手間が一回だけ省けたと思っておこう。

「ただいま」

「ただいまー」

「はいはい、ご苦労様」

エプロンをかけた母さんがキッチンからやってくる。

俺はカレーの材料が一式詰まった買い物袋を母さんに預け、家の中に入った。

七星もそれに続く。

「お金、ここに置いとくよ」

「ええ。……あら？ 思ったより安く上がってない？ セールもやってたの？」

「ああ、それは……」

答える代わりに、俺は視線を七星に移した。

「タイムサービスやってたんで、それのおかげだと思います」

「あ、そうか。今日は木曜日だったわね」

そこで素直に納得するということは、母さんもあの戦場を目の当たりにした、もしくは挑んでいるのだろう。

この家の女性陣は、とてもパワフルだと改めて実感させられた。

いつもと変わらない夕食の時間が過ぎていく。

七星と母さんは食事よりも会話を楽しんでいるようだが、俺は会話よりも食事を優先する。

「母さん、おかわり」

「早っ！」

隣にいる七星が驚きの声を上げる。

「喋ってばっかいるからだろ。別に極端に早いわけじゃねーって」

「何言ってるのよ。会話と食事があるから団らんになるんじゃないの」

「そうか？ 食いながら喋ると、かえってマナー違反な気がする」

「食事の手を止めればいいじゃないの」

「それだと腹が減るだろ」

「はいはい、そこまでそこまで」

小さく笑いながら、母さんは俺に皿を渡す。

「そういう会話だって、立派な団らんよ。二人とも、気付いてる？」
言われて見ればその通りだった。

「でも、七星の気持ちも分かるけどね」

「さっすが明美さん。分かった、隼人？ 食うだけが脳じゃないのよ」

「……すごい言われようだな、おい……」

そんな俺と七星のやり取りを見て、母さんはどこか本当に嬉しそうに笑みをこぼした。

「そっか……もう、十年になるんだね。この三人が家族になってから」

その言葉に、俺も七星も食事の手を休めた。

「いつの間にか、こうしてるのが当たり前になってたもんね。振り返ってみれば、本当に色々なことがあったけど……」

「何だよ母さん。いきなりさ……」

「あら？ おかしい？」

「いや、そんなことはないけどさ」

俺はグラスの水を一口含む。

隣の七星は、どこか真剣な表情で母さんの話に耳を傾けていた。

「十年、か…… あっという間でした。少なくとも、私にとっては七星が口を開く。

どこか嬉しそうに、楽しそうに。

「元はといえば、全部私のわがままから始まったんですよ」
カチャリ、と。

スプーンが皿の上に置かれる。

「私が一人になったとき、本当なら親戚に引き取られるはずだった。それを私が無理言って、そうしたら、明美さんが私を引き取るって」

「……ええ、そうね。そんなこともあったわ」

母さんはゆつくりと目を閉じ、開く。

「それが今から十年前、か……本当に、月日が経つのは早いものね」

「ホント、そうですよね……」

「衝突もあつたし、すれ違いもあつた。でも、今となつてはいい思い出ね。二人目の子供が、意外な形で授けられたんだもの」

その言葉に、七星は微かに頬を赤らめて笑った。

「でもまあ……」

そこで母さんは一度言葉を区切り、なぜか俺に視線を向け直して続けた。

「七星がこの家にいたって言った本当の理由は、別にあるんだろうけれど……ね？」

最後にまた、視線を七星に戻す。

俺は母さんの視線に倣って、隣の七星に視線を移した。
するとなぜか、七星はさっき以上に頬を……いや、顔全体を真っ赤にして固まっていた。

「な、な、な、何言い出すんですか明美さん！ わ、わ、わ、私は別に隼人が……」

「あら？ 私、隼人がどうこうなんて言ったかしら？」

「あ、う、それは、その……」

「……………」

おいおい……。

俺は今聞こえないフリをしているけど、当然会話は筒抜けだ。

その、なんだ。

なんだかとてもなく恥ずかしくなるような会話をしていないか、この二人……。

「……ごちそうさん。俺、先に風呂入ってくるわ」

ここは逃げの一手だ。

この様子じゃ、母さん悪ふざけの矛先が俺に向くのも時間の問題

だろうし。

「ちょ、ちょっと待ちなさい隼人！ アンタ、絶対に誤解してるから！」

誤解するような会話じゃなかったらうと、内心で呟いて立ち去る。

「こ、こら！ 待て、バカ隼人！」

七星の罵声も母さんの笑い声も無視して、俺は階段を上がる。

ああ、もう。

うるせえな……。

恥ずかしいのは、お前だけじゃないんだよ。

Second Day(3)：風呂上がり雨上がり

湯船の中の体から疲れが抜けていく。

「ふう……」

一日……いや、具体的に言えばまだ半日も経っていないが、やはり一日の締めくくりは風呂に限る。

時々、自分の精神年齢が異常なほどに老化しているんじゃないかと思ってしまうときがある。

だがそんな雑念も、湯船の中で足を伸ばしていれば気にもなりはしない。

大して疲れなど溜まってもいないはずなのに、湯船に浸かった体はなかなか強情だった。

体も髪も洗い終わり、少しお湯に浸かってすぐに出るはずだったのに、いつの間にかリラックスしてしまっている。

そもそも俺が風呂にやってきたのは、あの食卓での恥ずかしい会話から逃れるためのことであって、入浴が目的ではなかった。

普段、風呂に入るときも俺は最後に入るようにしている。

これは別にそうする理由らしい理由があるわけじゃないが、言うなればアクシデントの事前対策とも言うべきか……。

早い話が、一つ屋根の下で年頃の男女が生活を共にするというのは色々な意味で危ない。

まあ、この家の場合は母さんがいてくれるから問題はないんだけど。

今でこそ俺達三人の生活は当たり前になっているが、それはこの生活の始まりが今から十年も過去のことだからだ。

当時は俺も七星もまだ七歳。

当然年頃でもなんでもなし、その時点ではただの幼馴染の延長

上のものでしかなかった。

が、十年も経てば話は別だ。

七星はどうか知らないが、少なくとも俺はそう思っている。十七歳という年齢は子供でもなく、かといって大人でもない。ようするに中途半端なわけだが、それでも大人に向かって進んでいる途中だと俺は思っている。

この年齢になれば、一つ屋根の下で生活を共にするというのがどういう意味を持つのか嫌でも理解させられる。

それは決して嫌悪感を抱くようなものじゃないけど、俺だって間違いを犯さないようにといくらか慎重にもなる。

形は家族といっても、俺と七星に血の繋がりは無い。

そんな因果関係が拍車をかけたというわけじゃないが、俺は時々、七星を異性として意識していることがあるんだと思う。

もちろん、全部に自覚症状があるわけじゃないけど。

もしかしたら七星も、そういうことがあるのかもしれない。今までは当たり前のように共に生活をしてきたから、それを意識しなかっただけで。

「……って、何考えてんだよ俺は……」

ここが風呂場だということを差し引いても、俺の体温はわずかに上昇しすぎだ。

さっさと上がって、湯冷めしないうちに着替えてしまおう。

最後に軽く顔を洗う。

よし、さっぱりした。

「隼人、いる？」

湯船から出ようと浴槽の底に手をついたとき、洗面所から母さんの声が聞こえた。

「うん、いるけど？」

曇りガラスの向こうに、母さんが何かを腕に抱えているようなシルエットが見えた。

「いつも使ってるタオルがまだ乾いてないから、代わりの洗濯機の上に置いておくわね」

「ん、分かった。ちょうど上がるところだったから」

そうは言いながらも、母さんがそこにいるんじゃない出れないじゃないか。

親子とはいえ、見られたくないものがある。

仕方なく俺は、もう一度湯船の中に体を預けることにする。

「ねえ、隼人」

「ん、何？」

風呂場という密閉空間にいるせいだろうか、俺の言葉は浴室の壁に反響して大きく耳に届く。

「さっきの話の続きなんだけど」

「……うん」

正直、やめてくれと言いつうになつた。

母さん、その我が子をいじるクセは直した方がいいと思う。しかし母さんの言葉は、俺にとって予想外のものだった。

「……まだ、悪い夢を見るとときがあるの？」

その問いに。

「……………」

俺は、言葉を失った。

視線が虚ろになる。

目の前にあるのは、体温よりも少し暖かいただのお湯なのに。

揺れるその、水面が。

いつしか轟々と、渦を巻いて。

ゆらり、と、歪んで。

視界が霞む。

目の前の色という色が、黒く塗り潰されていく。

黒く、黒く、どこまでも黒く。

呼吸さえ忘れて、その色に視線は釘付けになる。

やがてその黒色の液体が、わずかに光に映える。

黒が薄れて、新しい色が現れる。

それは。

赤く、赤く、どこまでも赤く。

深紅と呼ぶに相応しいその色合いは、まるで生きているように蠢いた。

脳裏を掠めるイメージ。

一瞬だけ、心臓が破裂しそうなほど高い鼓動を鳴らす。

ドクン。

体が熱い。

体温が上昇しているわけじゃない。

お湯の温度が上昇しているわけでもない。

熱いのは、周囲。

もう一つの真紅。

猛る炎が、いつの間にか周囲を焼きながら迫っていた。

「……隼人、隼人、どうしたの？」

「……っ！」

その声に、俺は意識を取り戻す。

「え……何、母さん？」

「何って……何度呼んでも返事がないから、てっきりのぼせちゃったのかと思ったわよ」

「あ、ああ……ごめん。大丈夫だから……」

「そう？　ならいいんだけど……」

母さんにはそう返したが、正直大丈夫ではないかもしれない。

すっかり抜けきったはずの疲労が押し寄せるように逆流し、俺の体は鉛のように重かった。

呼吸もどこか荒く、体内の酸素が著しく減っている。

心臓は何かに驚いたように活性化し、慟哭のような鼓動を繰り返す。

湯船の中だというのに、正体不明の寒気を感じた。

にもかかわらず、触れた額は焼けるような熱を持っていた。

「ごめんね。母さん、余計なことを聞いたわ……」

「……いや、大丈夫だから。気にしないで」

「……ええ」

それだけ言うと、母さんのシルエツトは洗面所から消えた。

スリッパが床を叩く足音が、廊下の向こう側に遠ざかっていく。

俺の中の正体不明の熱と疲労は、未だに体内でくすぶっている。

……正体、不明？

おいおい、笑わせるなよ。

誰かが耳元で囁いた。

心当たりなんて、一つしかないだろう？

幻聴にしては、やけに痛いところを突いてくる。

俺はもう一度顔を洗って、重い体を浴槽の外に引き上げた。

雨は上がっていた。

縁側に座り、俺は夜というにはまだどこか明るい夏空を見上げている。

ところどころにまだ厚い雲が浮かんではいるが、紺色の澄み渡る空にはいくつかの星が姿を覗かせている。

水溜りの残る庭の上を吹きぬける風が、火照った体に心地よい涼風を送ってくれる。

これでスズムシの泣き声でも聴こえてくれればかなり風流なのだが、あいにくとこの住宅街にそれを望むのは難しい。

「……………」

方膝を抱えるようにして座っていた俺は、軽いめまいを覚える。

風呂上りからずっとこうして夜風に当たって休んでいるわけだが、なかなか体の重苦しさはなくなるらない。

風呂場のとくに比べれば、それでもずいぶんマシになったのだが。

「……っ、ダルイな……」

スポーツドリンクを一口含む。

のどは一時的に冷たさで潤されるが、胸の辺りでは未だに熱がくすぶっていた。

その熱が時折、言葉にはできないほどの猛烈な吐き気を促す。

とはいっても、それは普通の嘔吐感のようなものとは全くの別物だ。

まるで胃の中の胃液や臓器、血管から血液までのその全てをぐちゃぐちゃにかき混ぜられているような。

腹の中に自分以外の何者かの手があって、それがあらゆるものを握りつぶして回るような、そんな悪寒じみた感覚。

「……っ！」

めまいと吐き気が同時に起こる。

俺は背中を壁に預けて、片手で頭を、もう片手で胸を驚掴みにする。

皮膚に爪が食い込む痛みも気にならず、ただ不快感だけを掻き毟るように指先が軋む。

「う、あ……っ！」

たまらずに悲鳴が漏れる。

そのまま苦悶の時間が流れる。

数字にすれば、それはたった十秒足らずの出来事。

「はっ、は……あ、はあ……」

呼吸が荒い。

消えかけた体内の熱が、再び沸騰したお湯のように上昇していた。その代わりに、押さえつけている頭と胸からは痛みは消えていた。これほどの熱さを体は持っているのに、流れた汗は驚くほどに少なかった。

額の汗を袖口で拭おうと、腕を上げる。

「痛っ！ な、何だ？」

持ち上げた左腕、いや、その先。

ちょうど左肩の辺りから、鋭い痛みが走った。

衣服の下に隠れて、その部分は地肌を晒していない。

だが、分かる。

その下には、大きくも小さくもない傷跡が一つ、今も消えることなく残っている。

痛み出したのは今日に始まったことじゃない。

今までにも何回も、何の前触れもなく突然痛み出したことがあった。

それは、十年前のあの日に負った傷。

俺が今まで生きてきた十七年という短い人生の中で、恐らくもっとも大きな罪を犯した日。

傷口はとつくに塞がっている。

ただ、傷跡だけが戒めの刻印のように未だに消えない。

その傷跡が疼くように、時折こうして鋭い痛みを告げるのだ。

まるで、俺に語りかけるように。

囁くように、一言。

人殺し。

と。

「ふー、さっぱりしたー」

そんな声に横を振り返ると、そこにはちょうど風呂上りの七星の姿があった。

体からはまだ微かに湯気が立ち上り、頬も紅潮している。

いつもならそんな姿を見れば、俺は少なからず目のやり場に困っていただろう。

だけどこのときは、まだ少し頭の中が混乱していたのかもしれない。

気がつけば俺は、口を開いていた。

「……なあ、七星」

「ん？ 何、隼人？」

「お前、さ。覚えてるか？」

「何を？」

「その……」

言いかけて、俺は言葉に急ブレーキをかけた。

傷跡の残る、しかしもう痛みのない左肩を右手で押さえ、沸き上がってくる言葉を必死で呑み込んだ。

「……隼人？」

俺の様子がおかしいのに気付いて、七星が一步俺に寄る。

「……悪い。やっぱ、なんでもない」

「……変なの」

そう言々と七星は、手にしていたアイスティーを一口含み、リビングに戻っていった。

……バカか、俺は。

よりによって七星にそんなことを口にして、どうなるっていうんだ。

あの出来事を掘り返されて一番辛いのは、七星だって分かってるだろう。

それなのに、俺は……。

「……………」

疲れているのかもしれない。

こんな風に連日、あの日のことで苛まれるなんてのは今までなかった。

そうだ、疲れているんだ。

そう自分に思わせることでしか、今の俺は平静を保つことができなかった。

一日が終わる。

どうして今頃になって、あの頃の夢を見るようになったんだろう。終わりが見えない悪夢に、俺は今夜も苛まれるのだろうか。

一人で眠る夜を不安に思うことも、今まではなかったはずなのに。

「……………」

考えたところで答えは見つからない。

明日になったら、何もかもを忘れ去ってしまいたい。

そう、願わずにはいられなかった。

助けてと、呼ぶ声がした。

だけど、体が動かない。

痛みという感覚だけが、唯一俺の視界をクリアにしていた。

悪魔の手は、容赦なく、ためらいもなく振り下ろされる。

助けなくちゃいけない。

痛みに歪む視界の先。

助けなくちゃいけない。

誰かの泣き声が聞こえてた。

助けなくちゃいけない。

分かってる。

分かっているのに、どうしてこの体は動かないんだろう。

分かってた。

俺なんかじゃ、ヒーローにはなれないことなんて。

ずっとずっと前に、分かっていたことなんだ。

Third Day (1) : 三文の徳はなし

今朝に限って目覚めは早かった。

相変わらず部屋の中が薄暗いのは、電気が消えてカーテンも締め切っているせいだが、それにしたってやけに静かだった。

起き上がってカーテンを開けることで、俺の中のその疑問は解消された。

外はまだ微かに明るい程度で、ようやく朝陽が東の空に浮かび上がったところだった。

すずめの鳴き声を耳にするのもどこか懐かしく、空気に紛れてうつすらと白い靄が漂っていた。

それもそのはず、何しろ時刻はまだ朝の六時半にもなっていない早朝だ。

こんな時間に活動しているのは、ジョギングとラジオ体操に出かける人々くらいのものだろう。

起きたばかりでばやけた目には、朝の日差しも毒物だ。

早すぎる目覚めにまどろみを殺しながら、俺はとりあえず顔を洗うべく、部屋をあとにした。

洗面所で顔を洗う。

キッチンに明かりはついてしたが、そこに母さんの姿は見えなかった。

調理途中の朝食がテーブルに並んでいたので、そのときはたまたま席を外していたのだろう。

タオルで顔を拭く。

自分で言うのもなんだが、驚くほどに目覚めは爽快だった。

昨夜までの体の重さもたるさも、今はウソのように吹き飛んでしまっている。

ただ一つ文句があるとすれば、一体何が悲しくてこんな早朝に目を覚ましてしまったのかということだった。

繰り返し返すようだが、こんな早朝に目が覚めてもやることなど何一つない。

限られた一日の時間をムダに使おうとは思わないが、それにしたって少々度が過ぎている。

俺にはラジオ体操の日課もなければ、ジョギングの習慣もない。

夏休みとはいえ、ただでさえすることが少ない平日。

できることならもう少し、ベッドの中で惰眠を貪っていたかった。しかしまあ、顔まで洗って吹き飛ばした眠気はもうやってこない。普段学校のある日だって、こんな早くに目が覚めることはないのだから。

「ま、仕方ないか……」

なにはともあれ、これからまだ二度寝に挑むというのもどこかバカらしい。

眠気がないということは、睡眠はしっかりと摂ったということなのだから。

あとは、そうだな……。

のんびりと朝食を食べながら、今日の予定を考えることにしよう。

「わあっ!」

と、リビングにやってくるなり、母さんは思わず一歩飛び退くようにして声を上げた。

「……何してんの?」

俺は奇怪な姿勢のまましばし固まる母さんを横目に、リビングのソファに座った。

「あー、ビックリした。朝っぱらから心臓に悪いわ……」

「……」

朝っぱらからすごい言われようだ。

「そんなに驚くほどのもんかな？」

引き続き朝食の準備を続ける母さんの背中に、俺は問いかけた。

「そりゃねえ」

と、母さんはどこか楽しそうな声で背を向けたまま続ける。

「休みの日は必ずと言っていいほど昼まで寝てる隼人が、まさかこんな時間に起き出してくるなんて。雪でも降らなきゃいいけど」

真夏に雪が降るわけないだろうと、俺は内心で母さんに突っ込みを入れておく。

それでもまあ、槍が降るよりは大分マシなんだろうけど。

俺は無造作にリモコンのスイッチを入れた。

電子音が鳴り、ブラウン管の画面に映像が映し出される。

早朝のこの時間じゃ、さすがに放送しているのはどこのチャンネルもニュース番組ばかりだ。

チャンネルを切り替えるのもムダなので、とりあえずは天気予報に耳を傾ける。

本日は全国的に晴れ、夕方まで熱くなる日々が続くとのことだ。

佐倉町のある地域にも、でかでかと快晴マークの太陽が表示されている。

最高気温は二十九度、最低気温は二十度。

快晴というよりは、蒸し暑い一日というのが正しい表現の気がする。

「それで、どうかしたの？」

ふいに母さんのそんな声が聞こえた。

「……何が？」

一瞬だけ迷ったが、今リビングにいるのは俺だけだ。

ということとは、その言葉は俺に対して投げられたものなのだろう。

「こんな朝早くに起きてくるなんて」

「おかしい？」

「んーん、おかしくはないけど……」

フライパンを持ったまま、母さんが向き直る。

野菜炒めを皿の上に盛り付けながら、呟くように言う。

「……何か、悪い夢でも見たのかなって思ってた」

「……………」

悪い夢。

俺の中でそれに該当することと言えば、たった一つだけだった。

だけどその悪夢にうなされ続けていたのも、今はもう昔のことだ。

今ではそんなことはないに等しくなっている。

至って平和なものだ。

「別に、そんなんじゃないよ。ただ、何となく目が覚めただけで…

…」

「……そう」

カタン、と。

出来上がったばかりの野菜炒めが盛られた皿が、テーブルの上に

置かれた。

「……あのね、隼人」

「ん……………」

母さんのその声は、どこか悲しげに聞こえた。

言おうか言うまいか、ひどく悩むように、一拍の間が流れた。

「あなたはあの日の出来事を今も引きずって、負い目に感じていることがあるのかもしれない。だけどね、これだけははっきりと言える」

一瞬だけ、言葉が途切れる。

深呼吸をするような間。

続けて、母さんは言葉を吐き出した。

「あなたがどう思おうと、あの瞬間。間違いなくあなたは、七星にとつてのたつた……………」

しかしそこに続く言葉は、俺の耳に届くことはなかった。

「おはよー……」

そんな、いかにも朝に弱いアイツの声が聞こえてきたからだ。

「……………」

「……………」

母さんは俺と七星を交互に見やり、俺は母さんと七星を交互に見やった。

「……………あれ？」

と、七星はそんな間の抜けた声を上げた。

「つて、うわ！ 隼人が起きてる。珍しい……………」

などと、まるで珍獣扱いの一言を頂戴する羽目になった。

しかし、俺も母さんも返答はない。

不思議に思った七星が、俺と母さんを交互に見比べていた。

「……………どうかしたの？ 二人とも……………」

すると母さんは何が面白かったのか、小さく笑って七星に向き直った。

「うつん、なんでもないの。おはよう七星」

そして俺に目配せをしてくる。

今の話はなかったことにしよう、と。

さっきの……………。

母さんのあの言葉の後に、どんな言葉が続いたのか。

俺には見当もつかなかった。

だけど、母さんが会話を中断した理由はすぐに分かった。

母さんは七星の前で、あの日の話をするのが心苦しかったんだろ
う。

それは俺も同じことだったから、今は母さんの目配せに小さく頷
いておく。

今日という一日が、どこか賑やかに始まる。

久しぶりに三人で囲むことになる朝の食卓を、焼けたトーストの
香ばしい匂いが泳いでいた。

のんびりと朝食を食べるつもりだったのだが、あまりのんびりしていると料理も冷めて食欲もなくなってしまう。

結局、矢継ぎ早に朝食を意の中に納めていくことになってしまった。

それでも今朝の食卓は会話が弾んだ方だったと思う。

とはいっても、俺はいつもどおり母さんと七星の会話に耳を傾けていただけだ。

時折、何の前触れもなく七星が話を振るわけだが、基本的に俺は相槌を打つくらいのことしかない。

それでも大体は、七星がしつこく絡んでくるわけで、端から見ればそれも会話として成立しているように見えるのだろう。

しかしその実態は、俺がいいように言われているだけである。

もちろん俺だつてずっと黙ってばかりいるわけではないけど、七星のテンションに比べればずいぶんと大人しい。

コイツ、寝起きはメチャクチャに弱いくせにどこからこんなに喋る気力が溢れてくるんだろう。

まあ、考えるだけムダなんだよな。

コーヒーをすすりながらテレビの画面に目を向ける。

画面の中は報道特集の連続だった。

とりわけ面白いとも思えないし興味もないので、俺はコーヒーを味わうことに集中していた。

とはいえ、インスタントのコーヒーにそこまで味を追求できるわけもない。

淹れ方は大分自己流になってきたが、味に大差があるのかというとそこまでのものでもなかったり。

そんな風にコーヒーをすすりながら、朝の時間は緩やかに流れていく。

さて、どうしたものだろう。

まずは今日の予定を立てるつもりだったのだが……。改めて思っても、やはりこれといって特にすること、したいことは思い当たらない。

一昨日のように散歩がてらの買い物に出かけるといふ手もあるが、そこまで財布に余裕がわるわけでもない。

いっそのことバイトでも始めるといふ手もある。

が、残りわずかとなった夏休みではあまり期待はできない。

新学期が始まれば学校の方もそれなりに忙しくなるだろうし、バイトとの両立は難しいかもしれない。

夏休みの期間だけのバイトをするのなら、もっと早くに計画を立てておくべきだった。

さてさて、どうしたものだろうか……。

最後の一口を飲み干して、俺は溜め息をついた。

その横では、七星がのんびりと週刊誌のページに目を落としていた。

なんだかんだでコイツも結構暇そうなのに、今日は何をしようとか考えないのだろうか。

その辺は呑気というかマイペースというか、まあ七星の場合はお気楽という言葉が一番似合う気もするけれど。

俺はソファから立ち上がり、空のカップを持ってキッチンに向かう。

ちょうど洗い物をしている母さんの隣に立ち、カップの中を水ですすいだ。

「あ、そうそう」

と、思い出したように母さんは口を開いた。

隣にいる俺もソファに座っている七星も、同時に母さんの方を向いた。

「二人とも、今日は何か予定とかあるの？」

洗い物に手を動かしながら、母さんは尋ねた。

「いや、俺は特に何も」

「私も、特には」

揃いも揃って暇人だったようだ。

「じゃあ、よかつたらちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど？」

どうだろうかと、母さんは俺達に聞く。

どうもこうも、まずはその手伝いの内容とやらを聞かせてもらわない限りは……。

俺は七星に目を向ける。

七星も同じ意見なのか、俺と目を合わせた直後、再び母さんに視線を戻した。

「手伝いつて、なんの？」

蛇口を止める。

母さんは濡れた手をタオルで拭きながら、七星の方を振り返って言った。

Third Day(2) : 昼食風景

時刻は昼の十一時。

俺は手に鉄パイプを抱え、炎天下のうだるような暑さの中、長い石段を上っていた。

「何で、俺が、こんな、目に……」

すでに何往復目が忘れるくらいに行き来している石段。

その長さもさることながら、バカみたいな傾斜がいつそう体力を奪っていく。

額から滲み、頬を伝う汗はポタポタと地面に黒い斑点を作っている。

首にかけてタオルで汗を拭い、俺は体力を振り絞って石段の頂上を目指した。

「つい、たあ……」

全身で息を切らしながら、俺はようやく石段を上りきる。

覚えているだけで、これで石段を七往復はしたはずだ。

さすがに体力も底を突き、手に抱えている鉄パイプも今は体を支える杖の代わりになっている。

体力にはそれなりの自信があつたのだが、この炎天下が必要以上に水分と体力を奪っていくのだ。

俺は手にした鉄パイプを地面に転がすと、力なく近くの木陰に座り込んだ。

そろそろ休憩をしておかないと、今度こそ石段を真っ逆さまに転がり落ちかねない。

「はあ……」

ぐつたりと肩をうなだれる。

やはり安請け合ひすべきではなかったかもしれない、内心で後悔じみた感情が沸き上がる。

夏祭りの準備を手伝ってほしいと、母さんは俺と七星に頼み込んだのだ。

佐倉町では毎年夏祭りが行われている。

今年もその時期が迫った、というか目前に控えていたのだ。

佐倉町の夏祭りは一風変わっており、全日程が二日間の構成で行われる。

その前夜祭が明日の土曜の夕方から始まり、当日祭が日曜の午後から開かれる。

言われて思い出したが、確かに今年ももうそんな時期を迎えていた。

そういえばこの前、母さんが朝早くから町内会の集まりに出かけていたけど、それも夏祭りに関する集まりだったのだろう。

さて、そんな相談を受けた俺と七星だが。

はつきり言ってしまうえば、断る理由などはなかった。

結局俺も、今日の予定を何一つとして立てられていなかったわけだ。

それだったら何でもいいから目的を持って行動するほうがいいだろうと、俺は母さんの提案を受け入れたのだ。

一方七星も、断る理由がないので承諾した。

で、その結果がこれだ。

俺が今休んでいる木陰のある場所は、神社の境内の一角だ。

佐倉町の神社だから佐倉神社。

なんのひねりもないそのままのネーミングの神社である。

そして俺がさっきから幾度にも渡って運んできた鉄パイプ。

決してこれは、ガラの悪いお兄さん達が河川敷で血に飢えながら振り回すような物騒なものではない。

これは神社の境内に開かれる夜店の屋台、その骨組みとなるパイプの一つだ。

何しる場所が場所だ。

神社というだけあって、立地場所は小高い山の中腹になっている。石段前まではトラックで一氣に運んでこれるのだが、さすがにトラックに石段を走らせるわけにはいかない。

いや、そんなアクロバティックなことができるのならそれはそれで見てみたい気もするのだが。

とまあ、そういうわけで。

地上から境内まではさすがに人の力で運ぶことになるわけだ。

そこで俺は、男〃力仕事というあんまりな社会公式でこの仕事を手伝っている。

しかし周りを見れば、そこはいかにも力自慢の漢が粒揃いだった。それもそのはずだ。

なぜならそのおじ様方の大半は、常日頃を海の漢として生きるサバイバー達なのだから。

生死の狭間の極限で闘う彼らにとって、陸の上など恐れるものはない。

鍛え抜かれた筋肉と、漢達の目には見えない魂という団結力。

想像することちが怖くなりそうだが、こと力仕事に関してはこれ以上の存在はない。

だからといって、そんな中に一般高校生の俺が混じっても大した効果はないわけで。

「……無理。基本の体力が違いすぎる……」

作業開始から一時間。

俺はあえなく、一度目のダウンを奪われてしまった。

境内の中央の通路を挟むようにして、夜店の屋台は向き合って開かれる。

その数はおよそ二十ほど。

しかもここだけではなく、石段の下の地上にも多くの屋台が開かれるという話だ。

年に一度の祭りは、小規模ながらも盛大に行われる。

明日の夕方になれば、この辺りは多くの家族連れや子連れの姿で賑わいを見せるだろう。

そんな風に思いながら体を休めていると、突然首筋に冷たいものを感じ取った。

「うわっ！」

驚いた俺は中途半端に立ち上がるようにして、その場から飛び退いた。

そしてすぐに向き直る。

「……って、お前」

「おー、やっぱり隼人だったか！」

意外な人物が、そこにいた。

「健二、何でお前がここにいるんだ？」

今俺の目の前にいる人物は、高校の同級生でクラスメートの西久保^{ほけんじ}健二の姿だった。

「何でって、お前、そりゃこっちのセリフだったっの」

そう言って健二は俺の隣に腰を下ろした。

その手にはスポーツドリンクの缶が握られ、健二は二つあるうちの一つを俺に差し出した。

「ほれ」

「くれるのか？」

「ああ、差し入れ。ってか、向こうでみんなに配ってるんだけどな」
そう言って健二は神社の社の方を指差した。

確かに底では、おばさん達が飲み物を配っている姿が見える。

「でもまさか、こんなところでお前に会うとはな」

「それこそこっちのセリフだ。お前、夏休みは帰郷してるんじゃないかったのか？」

「おう。それで昨日の夜帰ってきたんだよ。なのに、今朝起きたらいきなり祭りの準備手伝え、だぜ？ ヒデーよなあ」

健二はどこか大げさに自分の不幸をアピールした。

俺はその様子に笑いながら、健二からもらったスポーツドリンクの蓋を開ける。

「で、どうして隼人はこんなことしてんだよ？」

「ん？ お前と似たようなもんだよ。母さんに手伝ってくれって言われて、特にすることなかったから引き受けた」

「ふむ。で、どうよ実際？ 働いてみた感想は？」

「……ちよっと、後悔してる」

「……だよな」

などと話しながら、俺と健二は笑い合った。

その後も休み中のことなどを適当に話しながら、俺達は火照った体を休ませた。

「さて、と」

言って、健二は立ち上がった。

「んじゃ、俺はそろそろ行くわ」

「ん？ 帰るのか？」

「逆だよ逆。どういうわけか、ウチの親が夏祭りの実行委員だからさ。もうちよっと働かないと、あとで何を言われるやら」

「なるほどな」

「隼人はどうすんだ？」

「そうだな……」

少し考えて、俺は立ち上がる。

「まあ、お前一人じゃ可哀想だから、俺ももう少し手伝っていくよ」

「お、さっすが隼人。俺が見込んだだけのことはある」

いつ、お前が俺を見込んだんだ。

という突っ込みは、この際あれなので黙っておくことにしよう。

「んじゃ、またあとでな。昼飯も出るらしいから、そのとき一緒に食おうぜ」

「ああ、別に構わないぞ」

「んじゃな」

軽く手を上げて、健二は石段を駆け下りていった。
さてと。

俺も負けてはいられないな。
もう一仕事してやるか。

……まあ、倒れない程度に。

太陽が真上に差し掛かる頃、俺は通算で十三回目になる階段の往復を終えたところだった。

いい加減に鉄パイプを抱える腕も、それを支える肩も痛くなってきた。

グレーのシャツは汗を吸い取って黒く変色してしまい、中途半端に乾いてどこか着心地が悪い。

とにもかくにも、これでようやく一区切りがついた。

午前中の作業で、大体の骨組みとなるパーツは運び終えることができた。

もつとも、俺が運んだものなんてそれこそ数えるほどだったが、それでも達成感があった。

作業に区切りをつけた大人達も、休憩のために物陰などで休んでいる。

さて、俺も一休みしたいのだが、先に約束した健二の姿がまだ見当たらない。

まだどこかで作業をしているのだろうか。

俺は木陰から立ち上がり、一度下の様子を見てくることにした。
パツと見たところ、境内の中に健二の姿は見当たらない。

仮にすれ違うとしても、俺が石段を下ればお互いに気付くだろうと、俺が石段を下ろうとしたそのときだった。

「お、いたいた」

案の定、健二はちょうど石段を上り終えてやってきたところだっ

た。

「ちょうどよかった。俺も健二を探してたところだ」

「そっか。まあ、すれ違いにいらなくてよかった。んじゃ、昼飯食いに行こうぜ」

「それはいいけど、どこで食べるんだよ？」

「ああ、下のほうに休憩用のテントがあるんだよ。あと、集会所が解放されてるからそっちでもいい」

「何にしても、下りないといけないってことか」

「そうゆうこと」

健二と並び、長い石段を下る。

さすがに何度も石段を往復したこともあって、足の筋肉は特に張ってきているようだった。

早いところ涼しい場所で昼食にありつきたいところである。

俺と健二は真っ直ぐに集会所に向かった。

なんだかんだで、やはり屋内の方が冷房が効いているだろうと思っただけだ。

集会所の扉は全開にされ、玄関口には多くの靴が脱ぎ捨てられている。

中からはガヤガヤと話し声も聞こえ、結構な人数が集まっているようだった。

俺と健二も靴を脱ぎ捨て、集会所の中へ入る。

「ああ、こっちだ隼人。場所はもう取ってある」

真っ直ぐに多目的ホールへ向かうとした俺を、健二がそう言っ
て呼び止めた。

健二が指差す先は小さな和室があるほうだ。

確かにそっちも休憩場所として使われているようだが、場所を取ってあるとはどういうことだろう。

疑問に思ったが、ここは素直に健二の言葉に従っておくでしょう。何にしても、まずは腰を据えて休み、空腹を満たすことが最重要

だ。

和室の扉をくぐる。

すでに多くの人が集まり、各々に昼食と談笑が交わされている。

「あ、やつと来た」

と、そんな声がしたのは部屋の隅の方からだった。

声がした方を向き直ってみると、そこには七星の姿があった。

それともう一人、これまた意外な形でクラスメートに出会うことになる。

「行こうぜ、隼人」

「え？ ああ……」

促され、俺は健二の後について二人のいる場所に向かう。

「遅いぞ健二。それと、来栖君は久しぶり。元気だった？」

「まあ、元気といえはそれなりにはな。瀬口は相変わらずだな」

「まあ、それが取り得みたいなものだしな」

「ちよつと健二、それどういう意味？」

「ご想像にお任せしますよ」

などと、早くも談笑が始まる。

今こうして健二と喋っている彼女も、健二同様に俺のクラスメー
トだ。

名前は瀬口葵。せぐち あおい

健二とはいわゆる腐れ縁とのことだ。

「はい」

と、すぐ隣にいる七星からカップが差し出される。

「ん、サンキュ」

カップの中身はよく冷えた麦茶だった。

水分を失っている体としては、補給できる冷たい水分ならなんでも歓迎だ。

一気に飲み干して、俺はようやく一息をつく。

「隼人、結構汗かいたみたいだね」

「ん？ ああ、そりゃあな。あんな長い石段を十往復以上もすれば、そりゃ汗だくになるって」

「だよなあ。ったく、若いからっていいように使われるのも問題だよな」

「全くだ」

同じ苦勞を共にしているので、俺と健二の意見は合致する。

その会話が見た目異常に年寄り臭くて、結局四人揃って笑い合っているわけだけど。

「ま、何にせよお疲れ様男性諸君。お喋りもこれくらいにして、まずは腹ごしらえといきましょうか」

言って、瀬口が人数分の弁当を手渡してくる。

弁当といっても、こういう席ではおなじみのおにぎりだ。

不思議と、それがかえって食欲を誘う。

俺達四人は輪になるように座り、各々に食事を開始した。

黙々と食事が続くと思ったが、そこは話し好きの瀬口がいい具合に会話をリードしていく。

「ウソ！ 来栖君も七星も、もう夏休みの課題終わっちゃったの？」

「まあ、一応やるだけなら全部やった。つっても、他にすることなくて暇な時間が多かったからただけなんだけど」

「いいないいなー。結果論でも、終わりよければ全てよしじゃん」

何か言葉の使い方がズレているような気もするが、ここはあえてスルーだ。

「葵はまだ終わってないの？」

「んー、私も大体は片付いてるんだけどね。世界史のレポートが面倒で、まだあんまり手をつけてないんだよねー」

世界史、か。

俺もやり終えた身分として、その面倒さはよく分かっている。

「確かに、あれは結構面倒だよな」

「そうだね。あらかじめテーマが与えられてれば、もう少し楽しかったとは思っけど」

「だよー。ったく、半沢のヤツ、妙なところで回りくどいんだから」

半沢というのは、俺達の通う高校の二年の社会化担当の教師の名前だ。

別に嫌われているわけではないのだが、妙なところで回りくどいという瀬口の言い分は大体当たっている。

「それで、二人はテーマ何にした？」

「私達は産業革命にしたよ」

七星の言葉に俺は頷く。

「第二次世界大戦とかにしようとも思っただけど、戦争だとやらと人物の名前が多いだろ？ だからこっちにした」

「なるほど。それに、二人で共同でやれば作業量も減るもんね」

「そういうこと」

「んー、だとすると、私は産業革命じゃないものにしたほうがいいよねー……」

「別にかぶっても問題ないと思うぞ？ そもそもテーマも自分で決めるって言われてるんだし、そりゃ少なからずかぶるだろ」

「ま、それもそっか」

世界史の課題は、歴史上の出来事一つを題材にして論文のようなものを仕上げるというものだ。

簡単に言えば新聞記事をスクラップして自分なりの見解を述べる、ってところだろうか。

まあ、この場合舞台は日本だけじゃなく世界全体で、自然とテーマも広く分かれるわけだが。

「ところで健二」

瀬口が呼ぶ。

「ん？ 何だ？」

「アンタ、さつきから話についてこないけど、もう課題済ませちゃってるわけ？」

俺と七星の視線も健二に向く。

「おいおい、そんなの決まってるんだろ？」

と、健二が意外にも余裕の笑みを見せた。

「な……まさかアンタに限って、そんなこと……」

信じられないと言わんばかりに、瀬口は苦しそうな表情を見せる。

正直、俺も驚いた。

だが、しっかりと課題を済ませておくとは健二もやるじゃないか。と、そう思ったのも束の間で。

「そんなもの、終わってるわけがないだろう」

と、健二は堂々と言い放った。

「……………」

「……………」

「……………」

一同沈黙。

いや、まあ、そんなことじゃないだろうかとは思いつつも、思わないようにしていたんだが……。

「ま、そんなこったろうと思ったわ。健二に限ってそんなこと、ありえるはずがないもんね」

うんうんと一人納得し、瀬口はお茶をすする。

「その割には、ずいぶんと余裕があるみたいだね、西久保君」

「ふ、当然だ。俺の辞書に不可能の文字はない」

それはきつと、お前がそのページだけを破り捨てたからだろう。後で確かめてみる。

不可能と一緒に、不完全の文字まで消えてるだろうから。

「その自信は一体どこから来るのよ……」

疑り深い視線で瀬口が聞く。

「もちろん、それは当然っ！」

ビシツつと、健二はなぜか俺に向けて指を向けた。

「……アンタまさか、来栖君のそのまま写そうってんじゃないでしょうね」

「イエス、オフコース！」

何で英語なんだ。

しかも、堂々と言うな。

「健二、言っておくが……」

「おお、みなまで言うな隼人！ 言わなくても分かっている。水臭いこと言っとなってんだろ？ 分かっているよ、俺達親友だもん……」

「いや。写させてやらんぞ、俺は」

「なっ……」

そして、健二の時間が凍りついた。

間抜けにも口をあんぐりと開けたまま、健二は信じられないといった表情で俺を見返している。

「ま、待て！ どういうことだ隼人！ 話が違っぞ！ ワツツ？

ホワイ？ ハウアーユー？」

「なぜも何もあるか。そもそも、俺はそんな約束した覚えはない。

それに、ハウアーユーって何だよ」

いきなりご機嫌いかかと聞かれても、どう答えていいか分からない。

「そ、そんなバカな……俺の計画が……」

「いや、どう見てもバカはアンタでしょ……」

ダメ押しの一撃だが、瀬口の言い分は正しい。

それっきり、健二はしばらく石化したように動かなかった。

こうしてその後もしばらく、食後の談笑は賑やかに続く。

気の許せる仲間同士でこうして時間を過ごすのが、本当に久しぶりに思えた。

Third Day(3) : 似たもの同士

一時を回った頃になって、休憩していた人々が続々と部屋をあとにするようになった。

俺達四人もそれに便乗し、一度外へ出ることにする。
外に出るなり、うだるような暑さが肌を直撃する。

日中の気温はますます上昇し、地面はさながらに熱した鉄板のような熱さを帯びているようだ。

「あーあ、また午後も石段の往復すんのかー」

健二がいかに面倒くさそうにぼやく。

だが、俺も健二の意見には賛成だ。

ある程度は慣れてきたとはいえ、あの石段の往復はさすがに堪える。

できれば午後はもう少し楽な仕事をしたいものだ。

「でも、もうほとんどのパーツは運び終わっただろ？ 屋台の組み立てなんて当日でもいいわけだし」

「だといいいんだけどな。どちらにしても、力仕事ばっか任せられそうだし」

なるほど、確かにその予感正しそうだ。

「そういえば、七星達は午前中何してたんだ？」

「私達は浜辺のテントの中で作業してたよ。提灯を糸に通したり、飾り付けをしたり」

ようするに雑務というところだろうか。

しかしそれにしても、日陰で過ごせるだけずいぶん快適だとは思う。

「げー、何だよそれ。メチャクチャ楽じゃなか。こんなの差別だ。なあ隼人？」

「何言つてんのよ。ずっと座りっぱなしで同じ作業を繰り返すのつて、実は結構疲れるんだからね」

「そうそう。お尻も痛くなってくるし……」

つまるところ、どっちでも疲れるということだ。

俺と健二は力仕事で体力を、七星と瀬口は細かい作業で集中力を、といったところか。

「まあ、なんでもいいけどさ。とりあえず何をすればいいか、俺は母さんに聞いてくる」

「あ、私も行く。明美さん、午前中は私達と一緒にいたから、まださっきのテントにいると思うから」

「だったら、俺の親父も多分そこだろうな。実行委員会の人もテントにいるって聞かされてるし」

「じゃ、みんなで行けばいいじゃない。バラバラに仕事するより、まとまってたほうが退屈しのぎくらいにはなるでしょ」

瀬口の意見に全員が合致し、俺達はまず浜辺付近のテントへと向かうことになった。

海岸沿いの道から階段を下り、浜辺に下りる。

熱砂と言う言葉があるように、俺達の踏む浜辺の砂は日差しの照り返しでキラキラと輝いていた。

こんなところを素足で歩こうものなら、それこそボイル焼きのようになつてしまいそうだ。

しばらく歩くと、浜辺の一角に白いテントが見えてくる。

夏祭り期間の本部テントでもあるそこは、過去に海の家として機能していたものを流用したものだ。

歩み寄る俺達の姿に気付いたのか、たまたまテントから顔を出した母さんがそれに気付いた。

「あらあら、お揃いで」

「ご無沙汰してます、おばさん」

「ども」

瀬口と健二が口々に挨拶を交わす。

「こんにちは、葵ちゃん。それに西久保君も。午前中はお疲れ様」
二人の挨拶に、母さんも微笑んで返す。

「母さん、それで午後のこれからのことなんだけどさ」
とりあえず俺は話を切り出す。

「午後は俺達、何をすればいいのかな？」

前述の通り、屋台のパーツを運ぶ仕事は午前中のうちでほとんど終わっている。

七星や瀬口にしたらって、できるなら午後もお尻の痛くなる仕事はしたくないだろう。

「んー。母さんも直接の実行委員ってわけじゃないから、詳しいことはちょっとねえ……」

ということは、仕事は無事終了ということでもいいのだろうか。
それならそれで、一度家に帰ってシャワーで体を洗い流してしまいたいものだが。

「健二、お前こんなところで何やってんだ？」

と、そんな声が俺達の耳に届いたのはそのときだった。

「げ……」

その声に、健二が一瞬だけ表情を苦くする。

声の主である男性は、テントの奥からこちらへとやってくる。
その風貌には、俺も見覚えがあった。

「あ、健二のお父さん」

瀬口がそんな言葉を口にした。

俺よりももう少しだけ高い背丈に、日に焼けた黒い肌。
ガッチリとした体格は、さながら海の漢を想像させる。

地元の漁港で漁師をしている健二の父親、修吾さんがそこにいた。
「ん？ おう、来栖さんとこの隼人か。また少し背が伸びたんじゃないのか？」

「あ、はい。あれからもう少しだけですけど」

そうかそうかと、修吾さんは嬉しそうに笑った。

こうして会って話すのはずいぶんと久しぶりだが、相変わらず賑やかで大らかな人だった。

「で、お前は何やってんだ健二？ もう飯は食ったのか？」

「昼飯？ うん、もう食い終わった。でさ、午後は何をやらされるのかと聞きに来たわけ」

なるほどなと、修吾さんは一つ頷いた。

「しかし参ったな。思いのほか手際がよかったから、午前中だけで大体の準備は完了してんだよなあ」

「マジ？ だったら俺達、このまま解放？ ラッキー」

健二は労働からの解放を知り、一人喜び出す。
だが。

「いや、待て。あー、しかしなあ……」

修吾さんは何を悩んでか、ウンウンと一人で唸り始める。

「どうかしたんですか、西久保さん？」

隣にいた母さんが聞く。

「いえ、一応準備そのものは終わってるんで、帰ってもらっても構わないんですよ。ただ……」

「ただ、何です？」

瀬口が聞き返す。

その様子を、健二が視線だけで余計なことを、と言って見ているような気がした。

「これは、ずいぶんと私的な用件でね。ここから少し先に歩いた岩場の奥に、小さな入り江があるのを知ってるかい？」

言って、修吾さんは指を指した。

その先には確かに遠めでも分かるほどの岩場があった。

「実は、その入り江の近くが毎年花火とかで使われてるみたいなんだが……」

「ゴミ、ですか？」

「ええ、そうなんですよ」

母さんの言葉に、修吾さんは相槌を打つ。

「あの入り江は海に直接面した流れ込みだ。そこが汚れてちゃ、海そのものにも影響が出る」

なるほど。

漁師である修吾さんとしては、海的环境というのは生命線に繋がるものでもある。

それが汚されるというのは、正直な話気分はよくないのだろう。

「毎年うちの組合でも点検には行くんですけど、今年は時間がなくてね。実際今も、祭りの準備で手が離せないときてる」

実行委員である修吾さんは、機材運搬や事務処理の手続きなど、このあと裏方の仕事が残っているのだという。

「そこでだ。ぶしつけだとは思うんだが、みんなでちょっと様子を見てきてくれないか？」

「えー。マジかよ親父。大体なんで俺達なんだよ」

「アホ。お前一人で行かせるほうがよっぽど不安だろうが」

不思議と、その言葉には俺も七星も瀬口も素直に納得して頷いてしまう。

「お前ら……」

その様子に、健二はガックリと肩を落とした。

「わーったよ。行けばいいんだろ行けば」

ブツブツと文句を言う健二だったが、結局は折れる形になる。

そんなわけで、俺達は浜辺の奥にある入り江に向かうことになった。

岩場を迂回する道は残念だがないので、俺達は足を滑らせないように岩場を乗り越えた。

「よっ、と……」

入り江の中に到着する。

周囲を見渡した限りでは、目立つようなゴミは散らかってはいなかった。

ただ、ところどころに花火の残骸のようなものが残っているのも確かだ。

それが去年のものなのか、今年のものなのか、それともさらにずっと昔のものなのかは分からない。

とりあえず俺は、目に見える範囲のゴミは持ってきたビニール袋の中に入れていく。

「なんか、悪いなみんな」

ふと、健二がそんなことを口走った。

「な、なによいきなり。気持ち悪いわね」

真っ先に反応したのは瀬口だ。

「いや、成り行きとはいえ、付き合わせる形になっちまったしさ」

「別に、そんなこと気にすんなよ。嫌だったら最初から付き合わないって」

「そうそう」

「うう。お前達の熱い友情を感じるぜ……」

「っていつか、むしろアンター人だとかえって不安なのよね。そのまま失踪とかしそうで」

「……………」

もはや健二は何も言い返さない。

口では瀬口に勝てないと、どこか諦めたようだった。

「ねえ、ところでさ。これって何？」

七星の言葉に、全員がその方向を向き直る。

七星の指差す先、そこに、ポツカリと口をあけたような空洞が覗いていた。

「これ、洞窟になってんじゃないか？」

真っ先に身を乗り出して中を覗く健二が、そんな言葉を口にする。

「へえー。こんなのがあったなんて、私初めて知った」

俺も瀬口と同じ意見だった。

確かに浜辺を訪れる機会なんてないに等しいが、まさかこんなところこんなものがあったとは。

「この洞窟、どこかに通じてんのかな？」

「どうだろうな。そんなに深そうには見えないけど……」

言いながら、健二は足元の小石を洞窟の中に投げ込んだ。

カツン、カン、カン……。

そんな音を鳴らして、小石は洞窟の奥へ転がっていった。

「地下に通じてるってわけじゃないみたいだな。多分直線だろうけど、意外と長いかもしれない」

まあ、どちらにしても足を踏み入れるのは遠慮した方がよさそうだ。

何もないと思うが、何かあってからじゃ大変だし。

「よし。行くぞ」

「……は？」

その声に、俺は健二を見る。

「だから、行くぞ」

「行くって、この中にか？」

「他にどこがあるんだよ？」

「……………」

頭が痛くなってきた。

そうならないように、俺達三人がついてきたんじゃないかなかったわけ？

「なあ瀬口、どうする……って」

「さあ、レッツゴー！」

「……お前もか」

もはや頭痛には慣れた。

まあ、どこかでこうなるんじゃないかと思ってはいたけれど。

「どうする、隼人？」

七星が聞く。

「……どうもこうも、あの二人を放っておいていいと思うか？」

「……だよ、ね……」

結果、一致団結……なのだろうか。

何か、何かが違うような気がしてならない……。

「で」

歩き始めてわずか二分。

俺達は早速、お決まりのパターンに出くわしていた。

「分かれ道か……」

「分かれ道ね……」

「……分かれ道だな」

「うん。分かれ道だね……」

そして、一同沈黙。

「で、どうすんだよ健二？」

「俺かよ！」

「お前が先陣切ってきたんだろうが！」

「はいはい、洞窟内で騒がない。トラップが発動したらどうすんのよ」

「ト、トラップ……？」

これは何かのRPGなのか？

「とにかくだ。道が二手に分かれてるなら、俺らも二手に分かれればいいわけで」

「いや、まあ、そりゃそうかもしれないが」

男同士女同士で行くわけにもいかないし、どうしたものだろう。

と、俺が考えているときだった。

「んじゃ、私達はこっち行くから」

「イデデデ……」

健二の耳を引っ張って、瀬口はスタスタと左の道に向かっていった。

「ちょ、ちょっと葵？」

「いいのいいの。このバカは私のほうが扱いに慣れてるからさ。じや、そっちはそっちでがんばってー」

「バカ、いてーっつーの！ 離せ！ コラ、聞いてんのか葵！ つか聞けよ！」

そんな声が、少しずつ洞窟の奥に遠ざかっていく。

「……どうする、隼人？」

「どうするって言われてもな……」

幸い、洞窟の中は思ったほど暗くはない。

目を凝らせば十分視界の先は見えるし、足場も安定している。

「引き返すならそれでもいいけど、健二達は先に行っちゃったしなあ……」

反対側の道からは、まだ遠くに健二の声が聞こえるような気がした。

「まあ……行ってみるか？ 嫌ならいいけど」

隣の七星の反応を待つ。

「……じゃ、行ってみよっか？」

「そうするか……」

あまり乗り気ではなかったが、とりあえず俺と七星も奥へ進んでみることにした。

Third Day(4)：回想少女

道なりに歩く。

薄暗さはあるが、これといって障害らしいものもなくスタスタと先に進むことができる。

「当たり前だけど、何もないな……」

「……そうだね」

瀬口がトラップなんて言葉を口にしたときは、さすがにちよつと嫌な予感がしていたんだが……。

まあ、さすがにこんな場所にゲームみたいな仕掛けがあるわけがないよな。

「あ」

ふいに七星が声を上げた。

「どうした？」

振り返ると、七星が立ち止まっている。

「ごめん、ちよつと靴紐がほどけたみたい。先に行つて」

七星は屈みこんで、靴の紐を結び直す。

俺は言われたとおり、ゆっくりと歩きながら考えた。

さつきからこうして歩いている地面は、やけに人の手が行き届いているような気がする。

少なくとも、天然の洞窟の道とは思えない。

だがしかし、入り口を見た感じではこの洞窟はどう見ても天然のものだ。

ということは、もともとあった天然の空洞に、人の手が加えられたということだろうか？

だとしたらそれは、一体何のために？

「……」

などと考えたところで、答えなんて分かるはずがない。

別に古代の遺跡ってわけでもあるまいし、そこまで深く考える必要もなさそうだ。

「七星、まだか？」

振り返り、名前を呼ぶ。

「あ、もうちよつと……つと」

紐を直し、七星は爪先をトントンと叩く。

「ごめん、今行く……」

屈んでいた七星が、立ち上がりかけたとき。

「……？」

ふいに、俺の視界の先で何かが動いた。

それは最初、煙のように見えた。

さほど大きくもない洞窟の中、天井と地面との間に灰色の煙が見えたような気がして……。

カツン、と。

聞こえたその音に、俺の神経はいち早く反応した。

「七星！ 後ろに跳べ！」

そう叫ぶよりも早く、俺の体は反射的に動いていたのだと思う。

「……え？」

そんな七星の声を聞きながら、俺は全力で走っていた。

ふと、七星が自分の頭上を見上げる。

そこに、砂時計の砂が落ちるような映像。

流砂の中に小石が混じり、パラパラと音を立てて落ちていく。

その、もつとも奥に。

大きな黒い影が一つ、近づいてきていた。

「あ……」

それが岩の塊だと理解するよりも早く、俺は七星の体を抱えて地面の上を転がっていた。

「ぐっ……！」

背中から落下したとはいえ、衝撃で一瞬だけ呼吸が停止しそうになる。

そのまま七星を腕の中に抱えたまま何度か転がり、ようやく回転が止まったその直後に。

ドズン……と、大きな音を立て、天井の岩肌の一部が通路の上に落下した。

「い、つてえ……」

俺はゆっくりと、地面を転がった体を起こす。

腕を少し擦り剥いたくらいで、目立つような大怪我はしていない。背中がまだ痛いままだが、それもじきに引いていくだろう。

「お、おい、七星！」

思い出したように、俺は自分の腕の中にいる七星の名前を呼んだ。

「え……な、何？」

キョトンとしたままの表情で、七星は答えた。

その様子だと、ケガらしいケガはしていないようだ。

ホッと、俺は緊張の糸を緩めた。

「何、今の……」

七星はまだ状況が飲み込めていない様子だった。

「多分、落盤だろうな。あの部分だけ、岩肌が脆くなってたんだと思う」

先ほどまで七星が靴紐を直していた地面の上には、崩れ落ちた岩が真つ二つに割れて転がっていた。

大きさこそそんなにでもないが、あれが人間の頭を直撃したら大変なことになっているだろう。

たんこぶ程度で済まないのだけは確かだ。

「そ、そうだ。隼人、大丈夫？ ケガとかしてない？」

ようやく理解ができたと思った途端、七星は取り乱したように俺の容態を気にかけてくる。

「ん？ ああ、なんともない。ちよつとあちこち擦り剥いてるくらいだ」

「ホントに、ホントになんともないの？ ねえ？」
どうしたというのだろうか。

七星の心配は、どこか行き過ぎているようにも思える。

なんというか、どこか必死さにも似たものが伝わってくるのだ。

「あ、ああ。大丈夫だって。なんともないから」

そう答えると、今度は納得したのか。

ふいにヘナヘナと力なく膝をつき、七星は呟くように言う。

「……よかった」

今になって気付いたが、七星はずっと俺のシャツの裾を手で掴んでいた。

まるで握り締めるかのように強く掴むその手が、どうしてもか、小刻みに震えていた。

「……バカ。大げさなんだよ、お前は……」

「だって、だって……」

その声はどこか、泣いているように聞こえてしまう。

バカと呟いたにもかかわらず、七星は食いついては来なかった。

ふいに、ここが薄暗くてよかったと思ってしまう自分がいた。

ここだと、七星の顔ははつきりとは見えないから。

もしも陽の当たる場所だったら、もしかしたら……。

七星の目に微かに光るそれを見た俺は、きつと平静ではいられなくなってしまうそうだったから。

「……行こうぜ。立てるか？」

コクンと、七星は答えずに一つだけ頷いた。

七星のことも心配だが、この場所に長居するのも危険だ。

この洞窟が今すぐに崩れ去ると思えないが、落盤を目の当たりにした俺としては不安の芽は消えない。

幸い、先ほどの分かれ道から大した距離を進んだわけでもないの

で、ここは素直に引き返したほうが安全だろう。

まだ少し落ち着きを取り戻してない七星の手を取って、俺は立ち上がる。

さすがに手を握るということに気恥ずかしさはあったが、この際そんなことは気にしていられない。

手を引かれ、立ち上がった七星と共に来た道を引き返す。

七星はしばらくの間、一言も言葉を口にはしなかった。

そして俺は、今更ながらに気付かされた。

握った七星の手は、驚くほどに小さかったということに。

合流地点まで戻ってみると、そこにはなぜか健二と瀬口の姿があった。

「あれ？　なんで二人とも……」

「お、そっちも戻ってきたか」

健二達も俺達の帰りを待っていたようで、再びその場所に四人が集合する形になる。

「いやはや、参ったわ。こっちの道、行き止まりになってんだもん」

「それで、戻ってきたってわけか」

「そういうこと。ああ、そうだ。戻ってくる途中にさ、なんか変な音が聞こえたんだけど、そっちで何かあったのか？」

健二が言う音というのは、恐らくあの落盤のときの岩肌が落下した音のことだろう。

隠しておくわけにもいかないので、俺はそのことについて話す。

「マジで？　それで、二人ともケガとかしなかったか？」

「ああ。それは心配ない。ちよつと転んで擦り剥いた程度だ」

「まあ、何にしてもその程度で済んでよかったよ。そうと分かったら、こんなとこに長居は無用だね」

瀬口が先頭を切り、出口へと誘導する。

「ほらほら。逃げ遅れてペシャンコなんて私はゴメンだよー」

「まさかとは思っけど、そうも言ってるからねーよな。行くっぜ、隼人」

「ああ」

瀬口のあとを追い、俺達は足早に洞窟をあとにした。

再び入り江に出る。

「まあ、ここまでくればとりあえずは安心だろ」

走ってきた道を振り返りながら健二が言う。

「それにしても落盤とはね。まあ、七星も来栖君も無事で何よりだけど」

「一歩間違えば、ケガじゃ済まなかったもんな」

うんうんと、健二と瀬口は頷き合う。

俺は改めて自分の腕に目を向けた。

何ヶ所か擦ったあとがあったが、それだけだ。

痛みはまだ少し残るが、内出血や打撲の心配もないと見ていい。

「それよりどうする？ 最初の目的からすっかりズレてるけど」

元々俺達はゴミ拾いにきただけであって、それがこんな結果になることなどは誰にも予想できなかったことだ。

まあ、確かに自分たちの好奇心と判断でこうなったわけで、アクシデントと言うよりは自業自得なのだが。

「つつても、ゴミなんてほとんど落ちてないよな？」

「うん。思ってたよりはずいぶんと綺麗なものだけだね」

「だったら、ここにいたって仕方ないだろ。戻って、修吾さんに問題ないですって伝えようぜ」

「そうだな、そうするか」

健二が確認を取るように聞くと、俺と瀬口はそれに頷いた。

そうして健二と瀬口は来たときと同じように、岩場を登って浜辺へと戻る。

俺もそれに続き、岩場に足をかけようとして一度後ろを振り返っ

た。

「……どうした、七星？」

「……え？ あ、ごめん。何でもない……」

「……行くぞ。足元に気をつけろよ」

「うん……」

岩場をよじ登る。

一瞬前のその一言が、頭から離れない。

うん、って……何だよ、それ。

なあ、七星。

お前いつから、そんなに弱々しくなっちゃったんだ？

そう思っても、俺は口にはできなかった。

テントまで戻り、事のあらましを修吾さんに報告する。

落盤があつたということには、修吾さんも母さんもかなり驚いていた。

早急に手配して、入り江近辺を立ち入り禁止にするとのことだ。

結局収穫したゴミも数えるほどで、俺達の午後の仕事はこれで終了となった。

まだ十分に太陽は高い位置にあるが、健二はこのあともう少し修吾さんの手伝いをする事になった。

瀬口も夕方から予定があるらしく、一足先に帰宅するとのことだった。

「七星」

と、去り際に瀬口が呼んだ。

「ん、何？」

「何かあつた？ 元気ないよ？」

「……うん。そんなことないけど」

「……そっか。ならいいや。じゃ、来栖君も七星も、また明日ね」

「ああ、またな」

「……」

軽く手を振りながら、瀬口は去っていった。

その言葉がどんな意味合いのものだったのか、俺よりも七星のほうがよく分かっているはずだ。

「母さんは、このあとどうするのさ？」

「私ももう少し、皆さんを手伝っていくわ。二人は先に帰っていいわよ。私も夕飯の支度に間に合うように戻るから」

「ん、分かった」

俺は砂浜に座る七星のもとに駆け寄る。

「七星、帰ろう」

「え？ あ、うん。明美さんは？」

「母さんはもう少し手伝っていくってさ。俺達は先に帰っていいって」

「……そっか、分かった」

立ち上がり、七星はズボンについた砂を払った。

俺達は並んで浜辺を歩き出す。

ザクザクと砂地を踏みしめる音と、ザザアという潮騒の音が交互に耳の奥に届く。

真夏の太陽の下、二人分の影が背中に伸びていた。だけど、どうしてだろう。

七星の影は七星自身よりも長く伸びているのに、横目で見たその背中がこんなにも小さく見えるのは……。

それはきっと、夏の陽炎が見せた一瞬の幻なんかじゃない。

帰宅してまず、俺は風呂のスイッチを入れた。

今はすっかり乾いてしまっただけはいるが、午前中の肉体労働でかなり汗をかいていたはずだ。

さすがにそのまま着替えるのも忍びないので、まずはさっさとシャワーを浴びてしまふことにしよう。

「七星、お前はどつする？」

「え、何が？」

「だから、シャワー浴びるかって。お前も汗かいてんじゃないのか？」

「あ、うん。そう、だね。じゃ、そうする……」

言葉が途切れ途切れで、どこか弱々しい。

自分が何を言っているのか分かっていないようにも思える。

「……んじゃ、お前先に浴びてこいよ。俺は後でいいから」

「うん……」

答えると、七星はやはりどこか重い足取りで風呂場へと向かっていった。

「アイツ、大丈夫かな……」

七星には聞こえないように、俺は小声で呟いた。

しかしまあ、さすがに風呂場まで押しかけるわけにもいかない。

しばらくはテレビでも見ながら待つことにしよう。

と、リモコンに手を伸ばしかけて俺は気付いた。

ソファの上に畳まれているのは、体を拭くためのバスタオルだった。

これがここにあるということとは、いつも洗面所に置いてあるタオルは今はないということになる。

さすがにシャワーを浴び終えて、その体を拭くタオルがないのは困りものだろう。

それは俺に限らず、七星だって同じことだ。

仕方ない、持って行ってやるか。

どうか、お約束のアクシデントだけは起きませんように……。

洗面所の扉を開ける前に、俺は一度耳を澄ませる。

ザーと、確かに中からはシャワーの流れる音が聞こえた。

よし、アクシデントの心配はしなくていいな。

それでもできるだけ音を殺しながら、俺は洗面所の扉を引く。

腕に抱えたタオルを、洗濯機の蓋の上に置く。

よし、これでいい。

あとは物音を立てずに扉を閉めるだけ……って、こっちの方がよっぽど怪しく見えるのは気のせいだろうか。

しかしもう後には引けない……じゃなくて、引けばいいんだよ引けば。

が、しかし。

ガタン、と。

「げ……」

俺の膝は確実に、押し開けようとした扉に一撃を見舞ってしまっただ。

「え？」

当然、その音は曇りガラス一枚隔てた浴室にいる七星にまで届いていた。

「……隼人？」

逃げ出すよりも言い訳を考えるよりも早く、浴室から名前を呼ばれた。

というか、逃げ出したところで犯人は俺以外にありえない。

「……あー、違う違う。そんなんじゃない、俺はただタオルを持ってきただけだから」

とりあえず否定から入る。

説明としての手順がメチャクチャなのは、俺も相当焦っているからなのかもしれない。

「タオル、洗濯機の上に置いておいたから」

「……うん。ありがと」

なんだか妙に声が上がらずそうになる。

だって仕方ないだろう。

そういう生き物なんだよ、男ってのは。

「……まあ、それだけだから」

早めに会話を切り上げないと、俺の中の何かがおかしくなっ

まいそつだ。

それだけ告げて、俺はさつさとこの場を後にしようとした。
だが、しかし。

「あ……………」

そんな、あからさまに何か言いたそうな声で俺の動きは止まる。

「な、何だ？　どうかしたか？」

ああ、ちくしょう。

何で俺の声まで緊張してんだよ。

「う、うん。その、大したことじゃないんだけどさ……………」

だったら頼むから後回しにしてくれ、とは言い返せず、俺は黙って七星の次の言葉を待っている。

「その、さつきはありがとね……………」

「……………え？」

「ほら、落盤があつたとき、助けてくれたじゃん……………」

「あ、ああ。そのことが。いいって、気にすんなよ」

「う、うん。それでも、一応ね。ありがと……………」

「…………ど、どういたしまして？」

何で疑問系なんだよ、俺は。

内心で自分に突っ込みながらも、俺はやたらと動悸が激しくなっていた。

「うん。そ、それだけ……………」

「…………そっか。じゃ、行くな」

だから、何に対して断りを入れてるんだ俺は。

「うん……………」

七星、お前も答えるなよ……………。

パタンと音を立て、俺はようやく洗面所の扉を閉めた。

午前中の肉体労働なんか問題じゃなくなるほど、今の時間の方が
息苦しかった。

Third Day (5) : 真実と現実は近く遠く

十五分ほどして、俺は七星と入れ替わりにシャワーを浴びていた。擦り剥いた腕の傷にお湯がヒリヒリと痛んだが、構わずに汗を洗い流す。

体と髪の毛をしっかりと洗い流し、やることだけ終わらせて手早く着替えを済ませる。

強く打った背中が気になったが、今はほとんど痛みもない。

まあ、あとから痛み出すようだったらシップでも張っておくことにしよう。

タオルで髪の毛を拭きながら、俺はリビングに向かう。

汗も流し終わり、サッパリとした気分だ。

リビングに戻ると、ソファに座る七星の後姿が見えた。

一瞬、さっきのやり取りが思い浮かんで心臓が高鳴るような錯覚を覚える。

いや、それが本当に錯覚かどうかはこの際置いておくとして。

テレビの中では、ドラマの再放送が流れていた。

七星はそれに見入っているのか、俺がリビングに入ってきたことにもまだ気付いていないようだった。

が、それは違った。

「……ん？」

テレビの音声に紛れて、何かが聞こえる。

まるで隙間風が吹き込むような、そんな小さな音だ。

その音の正体は、案外目立つ形でそこにいた。

「……スウ………スウ………」

音の正体は、ソファで眠ってしまった七星の小さな寝息だった。午前中からの手伝いで疲れが溜まってしまったのか、七星はソフ

アに座ったまま眠ってしまったていた。

「……ったく、呑気なヤツ……」

俺は呆れながらも、どこかで七星の寝顔を直視できないでいた。しかし、いくら夏場といっても冷房の効いた部屋でそのまま寝かせておくと風邪を引かれてしまうかもしれない。

世話が焼けるとは思いながらも、不思議とそれを面倒だとは思えなかった。

俺は一度母さんの部屋へ行き、押入れの中から薄手の毛布を一枚引っ張り出す。

そしてそれを、呑気に眠る七星の体にそっとかけた。

何も知らない七星は、相変わらずスウスウと幸せそうな寝息を立てていた。

さてと。

俺も部屋に戻って、夕飯までの時間を潰すことにしようか。

二階に上がる前に、テレビを消しておこうとリモコンに手を伸ばす。

リモコンを画面に向け、電源を切ろうとした、その瞬間。

『そうやって、いつまで逃げているつもりなの？』

その言葉に、俺は一瞬心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えた。なんてことはない。

それはただ、ドラマ中の人物を演じる女優が放った、脚本どおりの一言に過ぎない。

ただ、それだけだというのに。

……どうしてだろう。

その言葉は、俺の心の全てを見透かしているような気がして……。

「……………ッ！」

電源を切る。

電子音と共に、画面は瞬く間に暗転した。

リモコンをテーブルの上に戻す。

ゴトリと音を立てたが、七星が起きることはなかった。

言葉ではうまく言い表せない感覚が、俺の中で渦巻いていた。だけど俺は、それと向き合おうともせず、踵を返す。

二階へと階段を上がる。

自分の足音が、家の中にこだました。

そうやって俺は、また知らず知らずのうちに逃げ出していたのか
もしれない。

いつまで、だつて？

そんなの、俺が聞きたいくらいだ……。

助けて、助けて、助けて……。

声にならない言葉がこだまする。

痛みに歪む視界の先、炎の中で揺らめく景色。

美しいほどに猛る赤は、灰燼の空に火の粉と言つ星を降らせる。

一方的な力の行使は止まることを知らず、あたかも炎がその凄惨さを強調しているかのよう。

体は……ダメだ、動かない。

指先一つ動かすだけで、全身をズタズタに引き裂かれるような痛みが走る。

もはや苦痛を上げることさえも至難で、かろつじて目を開けるのが精一杯。

揺らめく炎の中、悪魔の手もまた揺れていた。

相変わらずの耳障りな音。

叫ぶような悲鳴はいつしか、泣き声を殺して痛みに耐えるだけの悲痛に変わっていた。

助けなくちゃいけない。

心がそう言っている。

助けられない。

体がそう言っている。

力が欲しい。

たった一度だけでいい。

この体を無理矢理にでも立ち上がらせ、目の前の悪魔を打ち倒すだけの力が欲しい。

そのためなら、たとえこの体が炎に焼かれて消えてもいい。

一度だけでいいんだ。

たった一度だけ、俺にヒーローになれる力を与えてくれ。

アイツを……助けなくちゃいけないんだ。

守ってやるって、決めたんだ。

だから……。

動けよ、俺の体……ッ！

筋肉をねじ切って、血管を引きちぎってでもいい。

俺にはまだ、立ち上がる足がある。

俺にはまだ、殴りかかる拳がある。

俺にはまだ、やめると叫ぶ声がある。

俺には、まだ………。

守り通すと決めた、大切なものがあるんだ！

そして俺は、それを見た。

真っ赤な炎の中、それだけが綺麗な銀色を輝かせていた。

それは。

神が与えた、悪魔の刃だった。

目を覚ます。

いつの間に眠ってしまったのだろう。

俺は体を起こし、明かりの消えた部屋の中を見回した。

「……俺、寝ちまったのか」

部屋に戻ってきたところまでは記憶があるのだが、そのあとがど

うしても思い出せない。

ということは、部屋に戻ってすぐに眠ってしまったと言うことなのだろう。

眠気はほとんどなかったはずだが、今日一日の肉体労働を考えれば無理もない。

シャワーを浴びて目が覚めたと思っていたが、逆に体が休息を求め始めていたのかもしれない。

枕元の時計は間もなく九時を示そうとしている。

うたた寝程度の時間と思ったが、そうでもなかった。

確か、帰宅したのは三時前後だったはずだから、かれこれ六時間近くも眠っていたことになる。

どつりで頭がスッキリしているわけだ。

そんなことを考えていると、急に空腹感がこみ上げてきた。

いつもの夕食の時間はとくに過ぎているし、それも当然か。

何はともあれ、一度下に下りたほうがよさそうだ。

寝癖の立った髪を軽くかきながら、俺は部屋を出てキッチンへと向かった。

「あら、ようやく起きてきた？」

キッチンではすでに夕食が終わり、母さんは洗い物にいそしんでいた。

テーブルの上には、俺の分の夕食がラップにかけられて残されたままである。

「ごめん、すっかり寝込んでた」

「いいのよ。今日はすいぶんと働いてくれたみたいだから、疲れたんでしょ」

「ん、そうかも」

「今ご飯温めるから、座ってなさい」

言われるまま、俺は椅子に腰掛ける。

ほどなくして、レンジをくぐって暖かさを取り戻した夕食が広げ

られた。

「いただきます」

並んだ料理に箸を伸ばしていく。
ところどころ熱の通ってないものもあったが、空腹の度合いが大きく、そんなものは気にもならない。

俺は黙々と食事を続ける。

普段は隣にいる七星がよく喋るのだが、今はいないのでやけに静かで違和感を覚えるくらいだ。

結果、俺はほぼ無言のままで遅い夕食を食べ終える。

時折母さんが背中越しに話しかけてきたが、ほとんど相槌を打つ程度の会話でしかなかった。

まあ、今の場合は食事に集中していただけたのだけ。
食器を重ね、流し台に運ぶ。

「あ、食器はその置いておいていいわよ」

「いいよ。遅れたし、自分でやる」
スポンジに洗剤を染み込ませ、泡出たのを確認して蛇口をひねる。

手早く食器を洗い、次々に乾燥機に立てかけていく。

「あら？」

と、リビングにいる母さんがそんな声を上げた。

洗い物の途中だったが、俺も首から上だけで背中を振り返る。

「これ、押入れにしまっておいたはずなんだけど……」

母さんが手にしているのは、一枚の薄手の毛布だった。

「ああ、ごめん母さん。それ、俺が使ったんだ」

答えるだけ答えて、俺は再び洗い物を再開する。

「使ったって、この暑い時期に？」

「いや、そうじゃなくってさ……」

振り返らず、俺は続ける。

「昼間帰ってきてから、七星がそこで寝ちゃったんだよ。で、風邪

引かれるのも困るから、母さんの部屋から借りたんだ」

「ああ、そういうことね」

納得したのか、母さんはそう答える。

「でも、隼人」

と、母さんは一度閉じた口をまた開いた。

「ん？」

「どうして風邪を引くだなんて思ったの？」

「どうしてって……そりゃ、冷房入れっぱなしの部屋で寝てたら体が冷えるだろ？」

「それはそうだけど、だったらどうして、直接冷房を切らないのよ？」

「……あ……」

言われてみればその通りだった。

何でそんな簡単なことに気がつかなかったんだろう？

……ああ、そういえば。

確かあの時は、その前後に心臓によろしくないトークがあったりしたから、きっとそのせいだ。

などとは、口が裂けても母さんには言えない。

言えば最後、悪ノリする母さんはあるとあらゆるところまで俺をいじり倒しに来るはずだ。

そしてそれは恐らく、俺に限らず七星にも狙いをつけるだろう。

同じ家の中で二倍恥ずかしい目に遭うなんて、まっぴらゴメンだ。

「……ごめん、気付かなかった」

と、とりあえずそう言っこの場をごまかしておく。

さすがに母さんも、そこまでしつこい詮索はしてこないだろう。というか、そう願う。

「隼人って、時々妙なところで抜けてるのよね」

などと言って、母さんはおかしそうに笑っていた。

まあ、いじり倒されるに比べれば笑われるくらいは何ともない。

俺は特に反論もせず、洗い物を終えて蛇口を戻した。

「あれ？」

そう言えばと、気付いた俺は母さんに聞いた。

「母さん、七星は？」

「今は部屋に居ると思うわよ。もしかしたら、もう寝てるかしれないわね」

確かに、七星もリビングで居眠りしてしまったくらいだ。

今日一日の疲れがドツと押し寄せて、普段よりも早く寝てしまっても不思議ではない。

って、今の今まで寝てた俺がそう言うのもどこおかしい気がするけど。

テレビのリモコンを操作して、適当にチャンネルを替えていく。

と、ふいに今日が金曜であることを思い出し、俺は新聞のテレビ欄に目を向けた。

その後チャンネルを替えるが、どうやら番組がまだ始まっていない様子だ。

おかしいな。

ロードショーは九時から放送しているはずだから、このチャンネルで合っているはずなのだが……。

今の時刻は九時半になったばかりだ。

CMに重なってもいない限りは、番組が放送されているはずである。

俺はもう一度番組欄を見る。

と、その理由が分かった。

「野球放送の延長で、時間がずれてるのか……」

これは決して珍しいことではなく、むしろ日常茶飯事と言える。

まあ、放送局側としてはプロ野球は高視聴率を確保できるわけだから当然の配慮だろう。

間もなくして、ロードショーのオープニングが始まった。

放送時間はちょうど三十分変更されているらしく、毎週のように

見ている俺にとっては嬉しい誤算だ。

食後のコーヒーを飲みながら、俺はしばらく画面へと集中する。

長いようで短い二時間が過ぎ、ロードショーはエンディングを迎えた。

今回放送されたのは海外の映画の日本語吹き替え版のもので、確か去年の春頃に日本でも劇場公開されていたものだ。

いわゆるファンタジーで、様々な画面で最新技術のCGや演出効果が用いられ、見るものを楽しませてくれた。

「ふぁ……」

スタッフロールを眺めながら、ふいにあくびが出た。

少し前まで熟睡していたと言いつのに、もう眠気が押し寄せてきているようだ。

本当ならこの後ももう少し見たい深夜番組があるのだが、何よりもまず、体は休息を必要としている。

「明日も出かけるわけだしな……」

出かけると言うよりは、遊びに行くといったほうが正しい。

今日一日しっかりと働いて準備したのだから、祭りの当日を楽しまないのは損と言つものだろう。

まあ、祭りは夕方からなので時間的にはずいぶんと余裕はあるのだが。

「……寝るか。起きてても眠いだけだし」

テレビのスイッチを切り、空のカップを流し台に置き、俺はあくびを殺しながら部屋に向かう。

「あら？ もう寝るの？」

と、ちょうど廊下で風呂から上がってきた母さんと出くわした。

「うん。何か今日は疲れた……」

「ま、がんばって働いてくれたしね。みんな感謝してたわよ。若い

のに感心だつて」

若いから働かされたんじゃないだろうか、とは思いつつも、俺はあえて突っ込まないでおいた。

「とりあえず寝る。おやすみ」

「はい、おやすみ」

母さんとの会話を早めに切り上げ、階段を上がる。

二階の廊下はシンと静まり返り、地肌で触れる床の温度がどこか冷たく感じた。

明かりの消えた廊下の奥、そこには七星の部屋がある。

俺と七星の部屋は、ちょうど二階の廊下の端と端に位置して扉同士が向き合う形になっている。

俺の部屋の扉は何もないが、七星の部屋の扉は小さなネームプレートがぶら下がっている。

ほとんど飾りのようなものだが、それが七星にとっては自分の居場所を強く示すものだ。

その扉の向こう側。

七星は今も、午後のあの時と同じように優しい寝息を立てているのだろうか。

それとも、眠れずに好きな小説でも読みふけているのだろうか。その部屋から、漏れる光はない。

ふいに、嫌なイメージが沸く。

本当は七星は、もうあの部屋にはいないんじゃないだろうかという、根拠も何もない不吉なイメージ。

バカ、そんなわけないだろう。

俺は自分の頭に浮かんだ言葉をかき消した。

一体何を考えているんだ、俺は。

疲れているんだろう。

と、気がつけば一夜前と同じ思考。

朝がやってくれば、きつと全てがただの杞憂だと証明してくれる。

俺は部屋の扉を押し開けて、明かりもつけずにそのままベッドに
なだれ込んだ。

パタンと、扉が閉まる。

眠れば何もかも、忘れることができる。

夢にならない限り、現実という悪夢からは開放される。

目を閉じると、すぐに睡魔はやってきた。

早く眠ってしまえと、後押しされているようだった。

たとえそれが今宵の悪夢への入り口だったとしても、今の俺は抗
うこともできなかった。

まぶたが下りる。

胸の内に、拭いきれない不安を抱えたまま。

Last Day(1) : 奪い、奪われたモノ

勇者はその聖なる剣で、魔王を打ち倒すと言う。

握り締めた途端、迸るような熱が掌を焼いた。

それでも、握った手を離さない。

立ち上がる。

生まれたての子犬が何度も転びながら立つように、その何倍もの時間をかけて立ち上がる。

体中が悲鳴を上げた。

痛み以外の感覚など、すでに持ち合わせてはいなかった。

ボロボロの体で、炎よりも揺れて立ち上がる。

呼吸を繰り返すたびに、焼けた空気がのどの奥と肺の中をさらに焼き尽くす。

満身創痍とはこのことだった。

立ち上がったところで、前に進む力が残るとは思えない。

それでも俺は、立ち上がらなくちゃいけない。

目の前で泣いているアイツを、助けなくちゃいけない。

何かを救うために、別の何かを犠牲にしなくてはいけないというのなら。

俺は喜んで、この体を差し出してやる。

膝が笑う。

情けないな、無様だなと、自分で自分を笑い飛ばす。

ああ、情けねーよ。

ああ、みっともねーよ。

無様で仕方ねーよ。

それでも俺は、立った。

この一瞬だけ、勇者であるために。

ヒーローであるために、俺は立つんだ。

だけど、きつとそこまでだ。

立ち上がったところで、俺にはもう戦いを挑む力なんて残されてはいないだろう。

この手に握った、剣とは似ても似つかない小さな刃も、ただの一回さえも振り下ろすことは叶わないさ。

……だけど。

そんな無様な勇者でも。

そんな傷だらけのヒーローでも。

目の前の敵に向かって、倒れ込むくらいのことはできるんだ。

笑う膝で、一歩前へ。

体はバランスを崩し、前へと倒れる。

その刹那、さらに一歩前へ。

さらに、さらに一歩前へ。

ひどく乱れた足並み。

九十歳を超えた老人だって、もうちょっと真っ直ぐ歩けるだろう。でも、それでもいい。

絶望的とも思えたその距離は、這うように歩いても十分手が届く距離だったのだから。

よろめき、つまづきそうになりながら前へ。

ただひたすらに、前へ。

地上と星との距離が今、限りなくゼロへと近づく。

ここまできたら、もうエンディングは目の前だ。最後の一步。

踏みしめた大地は、どうしようもなく不安定で。

だけどその手に握った刃を、決して離さない。

今一度、強く握り締める。

炎の熱さを忘れるほどに、強く、強く、強く。

何よりも強く。

願いはただ一つだけ。

壊れてもいい。

ただ、もうアイツの泣き顔を見たくなかった。

本当に、それだけのこと。

傾く体。

これで、本当に終わり。

薄れ行く意識の中で、振り返った悪魔の顔を見た。

直後に、吐き気を覚えるような手応え。

肉を突き破る刃の感覚。

右手が何か、温かい液体に濡れていた。

倒れれば最後。

もう、立ち上がる力なんてどこにも残されていない。

だからこれは、俺が最後に見た炎の中の記憶。

一瞬、幻かと思った。

悪魔の顔が、優しく笑ってた。

口の端に赤い雫を伝わせながら、何かを告げていた。

ありがとう、と。

そう、聞こえたような気がして。

そこで俺は、今度こそ意識を失った。

日に日にあの頃の夢が鮮明になっていく。

推理ドラマが解決編に向かって進行していくようだ。

最初はただの映像。

次はシーンの再生。

そして、役者の再演。

苦痛でしかなかった。

誰も好き好んでこんな夢を見たいわけではないと言っのに。

まるであてつけのように、悪夢は連日甦る。

だから今もこうして、夢見の悪さに俺は一人苦しんでいる。どれだけ体が拒み続けても、夢と言うのは結局その人間の心の問題だ。

だから俺にはきつと、この悪夢に苛まれ続ける、その理由となる何かがあるのだ。

そして俺はそれが何であるか、すでに答えを導いている。

そこまですべてできているのなら、あとはそれを言葉や行動に移すだけでいい。

そう、その通りだ。

だけど俺は、そのたったそれだけのことができないんだ。

伝えるべき言葉も、やるべきことも全て知っている。

それでも心のどこかで、俺はいつも怯えていた。

だって、俺の手はもう真っ赤な血の色に染まってしまっている。

罪人の手なんだよ、この手は。

たった一度の傲慢で、数え切れないほどのものを失ってしまったんだ。

……いや、失わせてしまったんだ。

それは本当にかげがえのないもので。

世界中どこを探しても、そこにしかなかったもので。

たとえそれが俺にとってどれだけ大切な人を傷つけたとしても、俺がその人を傷つけていい理由にはならなかったんだ。

ちょっと考えれば分かることだった。

そんな大切なことに気付いたのは、もう何もかもが手遅れになってからだった。

結果として、俺は俺の大切なものを守った。

その代わり、大切なものが大切にしていたものを奪った。

奪った俺が幸せを手に入れて。

奪われたアイツが幸せを失った。

それがどれだけ理不尽なことか、考えるまでもないだろう。

結局はただの自己満足だったんだ。

俺はあの日、ヒーローになれたつもりだった。

自分にとって大切な人を守ることができたから。

だけど、大切な人を守ったその手は、もう取り返しのつかない罪を犯していた。

何かを守るためには何かを犠牲にしないといけない。

その犠牲は、俺が背負わなくちゃいけないはずだった。

俺が俺を犠牲にしなくちゃいけなかったんだ。

だけど俺は、知らず知らずのうちにそのことから逃げていた。

結果、俺は自分を何一つ犠牲にすることなく、俺の大切なものを守り通した。

その影で、俺の代わりに犠牲になったものがあつたなんてこと、気付きもしなかったんだ。

そのことに気付いたのが、アイツが俺の家と一緒に暮らすようになった頃だった。

新しい三人の家族。

母さんと二人だけの暮らしは辛くも苦しくもなかったけど、一人増えた三人の家族は楽しかった。

違和感なんて何一つ感じさせなかった。

まるで最初から三人は家族だったかのように、当たり前の日々を過ごしていた。

でもあるとき、俺は思った。

どうしてアイツは、俺と母さんと一緒に暮らしたいと思ったんだろっ？

そして俺は、一つの結論に至る。

この新しい三人の家族の中で、血の繋がりが無いのはアイツだけだ。

家族なのに、どうして血が繋がってないんだろっ？

それは、アイツが本当の家族じゃないからだ。
じゃあ、アイツの本当の家族はどこにいるの？
それは……。

……あれ？

アイツの、本当の、家族……？

ねえ、どこにいるの？

それ、は……。

ねえ、どうなの？

……。

……いないんでしょう？

え……。

いないんだよ、本当の家族なんて。

……何を、言っ……。

いるわけないんだよ。

……。

だって、当たり前でしょ？

まさか、忘れたの？

だったら、思い出させてあげるよ。

……やめろ。

アイツに家族がない理由。

……やめろ。

俺がこの手で 殺したからさ。

やめろ……っ！

目が覚める。

どこへ伸ばしたのか、俺の右腕は無造作に虚空を掴もうとしていた。

「は、はあ、はあ……」

寝起きとは思えないほどに呼吸が乱れている。

にもかかわらず、不思議と寝汗の一つも流していない。

だらしなく伸びた手が、ストンと抜けるように落ちる。

呼吸を少しずつ整えながら、俺はようやく悪夢にうなされていたことを思い出した。

夢の中はいつも炎の中。

誰かを守り、誰かを殺したあの日。

あのときから十年、今でも俺の手は見えない血の色に染まったまま。

罪を背負うこともできない罪人。

傲慢すぎた自分の中の正義。

悔やんでも悔やみきれず、だからこうして夢の中で苦しむのかもしれない。

自分の罪を改めて知るように、そうすることが償いであるかのよう。

「……っ！」

奥歯が軋む。

今更許してほしいなんて思っていない。

許されればきっと、俺は罪の重さまで忘れてしまっから。

背負わなくちゃいけないと、頭では嫌になるほどに分かっているのに。

未だに答えが見つからないんだ。

俺が犯した罪をどう背負えばいいのか。

アイツに、伝えなくちゃいけない言葉があるはずなんだ。

それはきつと、難しいことじゃない。

驚くくらいに簡単な言葉なんだ。

「隼人？ いるの？」

コンコンと扉を叩く音と、廊下のいる七星の声。

俺は一瞬、肩を震わせた。

単純に驚いただけでもあったが、あまりにも悪いタイミングでその声を聞いてしまったからかもしれない。

「……隼人？ まだ寝てる？」

「……いや、起きてる。何？」

「ん、別に用事ってほどのことじゃないんだけど。ただ、なんか悪い夢でも見た？ 叫んでたよ？」

「え……俺がか？」

「うん。なんか、やめろって。ちょうど部屋を出たときに聞こえたんだけど、いきなりでビックリしたよ」

「……そう、か……。そんなこと言ってたか、俺……」
やめろ、か……。

それは、誰に向けて叫んだ言葉なんだろうな。

今の俺自身か、それともあの日の俺に向けてか。

どちらにしても、そんなことを叫ぶようじゃ結局俺は何も変わってないってことだな。

ずっと逃げ続けてる。

逃げ切れないって分かってんのにな……。

つたく、往生際が悪いって言うか、諦めが悪いって言うか……。

「ホント、何やってんだろうな、俺は……」

「……ねえ、隼人？ まだ半分寝ぼけてるの？」

「ああ、そうかもしれない。今起きたばっかなんだ」

「まあ、そんなことだろうとは思ってたけどさ。もうお昼近いんだし、あんまり寝すぎると脳が溶けちゃうよ」

「……ああ、悪い」

「……変な隼人。ま、いつか。早く起きなさいよね」

足音が遠ざかっていく。

足取りは軽く、どこか嬉しそうなリズム。

どうしてそれが、こんなにも俺を苦しめるんだろう……。

「……ちくしょう……」

Last Day(2)：その道どの道逃げた道

俺は駅前までやってきていた。

目的なんて最初から何もなかった。

ただ、少しでも早く一人になりたかっただけ。

……いや、逃げ出してしまいたかった。

だからこうして、着替えだけを簡単に済ませて家を飛び出したんだ。

「ちよつと、用事を思い出した」

出かける理由にした言葉。

理由らしい理由もなければ、ウソなりにひねりを加えたわけでもない、ただの口からでまかせ。

もちろんそれは、ただの建前だった。

一人になりたかったというよりは、二人でいられなかったと言う方が正しいのかもしれない。

自分でもおかしいと思う。

だけど、もう七星のことを真っ直ぐに見ることができない。

それは昨日までのような、多少なりともお互いを意識していると言う気恥ずかしさなんかじゃなく。

正真正銘の、俺が七星に対して一方的に抱いている負い目だった。それでも、共に暮らしてきたこの十年間、過去の一度も似たようなことがなかったわけじゃない。

歳を重ねるに連れて、俺の中でも過去の罪の重さを理解できるようになっていった。

初めはそれが恐怖以外の何物でもなかった。

けれど、それを忘れるくらいに俺達は三人で幸せだった。

本当の家族じゃないけれど、本当の意味で俺達三人は家族だった。

その居心地のよさが、俺の中から罪の重さを少しずつこそぎとっていったのかもしれない。

いつしか三人でいることが当たり前になって、過去の傷が目には見えなくなつて。

俺はそのことを自分勝手に、自分の犯した罪が許されたと思うようになっていたのかもしれない。

いや、事実そう思っていたんだろう。

少なくとも、ほんの数日前までは。

それを掘り返したのが、ここ数日の間に連続して見続けた悪夢だ。どうして今更、そんなものを見せるんだ。

もう終わったはずだろう。

今の俺から、居場所を奪わないでくれ。

そうやって、いつも言い訳をしてた。

許されなくていいと思いつながら、忘れたいだけ願つてた。

そうして今も、ただ逃げている。

誰が悪いわけでもない。

そもそも、悪いなんていう概念そのものがあつてはいけないんだ。頭では分かっているんだ。

今までだつて、自分で何度も何度も言い聞かせてきたんだ。

俺さえ全てを受け入れてしまふことができれば、それで全てが終わるんだと。

分かつてゐるのに、どうしてもできない。

心がいつもそれを拒んでいる。

受け入れたら、俺は、俺は……。

この手を血に染めて唯一守り抜いた大切なものさえも、離れていってしまうんじゃないだろうか……。

ただ、不安だつた。

ただ、怖かつた。

言えばそれで、全てが崩れてしまふような気がするんだ……。

……おかしいよな。

夢の中では確かに、言えたはずなのに……。

人の波に沿って足を動かす。

明確な目的も目的地も持たず、歩く姿はまるで人形のように見えるかもしれない。

土曜日の昼間、いつにも増してアーケードを行き来する人の数は多い。

人々の喧騒と町の騒音が混じり合って、俺にはそれがチューニングのうまくできてないラジオノイズに聞こえて仕方がなかった。

雑音に雑音をさらに加えたような、ただの不快感だけの音の塊。メロディも旋律もあつたもんじゃない。

それらはただ、空気を振動させているだけに過ぎなかった。

……うるさい。

耳鳴りを覚える。

ただでさえ下を向いて歩いているのに、これ以上気分をうなだれさせられるというのだろうか。

静かな場所を求めたわけじゃないが、今の俺にこの大音量のノイズは毒以外の何物でもなかった。

道を外れよう。

このままじゃ本当に頭がおかしくなってしまう。

狭い裏路地に入る。

湿った空気と乾いたホコリの匂いが鼻をつくが、そんなものは毛ほども気にならなかった。

足元に散らかる掃き溜めのようなゴミを踏み潰しながら、薄暗い路地を進む。

空気が冷たい。

まるでここだけ季節が過ぎ去ってしまったかのようだ。

少し後戻りするだけで、そこは炎天下の夏の下だというのに、ここだけが中途半端に秋と冬の間にいるみたいだった。

どこをどう歩いたのかは覚えてない。

歩くことさえも面倒になってきていたはずなのに、気持ちとは裏腹に足はどこかへと向いていた。

「……………」

どこへ行くと言っただろう。

体はいつでもブレーキをかけることができる。

それなのに足が勝手に動くのは、つまり俺が無意識のうちにアクセルを踏み込んでいるからだ。

なあ、どこへ行くんだよ、俺は。

こんな場所に、目的地なんてあるわけがないだろう。

何よりもまず、俺には目的がないんだ。

目的がなければ、そもそも目的地なんて存在するわけがないじゃないか。

散歩するにしたって、もう少し気の利いた場所があるだろう。

何もこんな、薄暗くて小汚い路地裏の細い道を歩く必要はない。

……さあ、引き返そう。

人ごみの中をまた歩くのも億劫だが、このままどこに通じるかも分からない道に行くよりはマシだ。

「……………」

しかし、どういっわけか踏み出す足は止まることを知らない。

それはもう、俺の意思のどここうを完全に無視している。

ただ、前へ。

どこに続いているかも分からない暗がりに向かって進む。

……………おいおい。

何だよ、何があるって言うんだよ、この先に。

何もありません。

少なくとも、今の俺が求めているものなんてあるわけがない。

それを言ってしまうえば、今の俺が求めているものなんて世界中のどこにもありません。

「そう、だ……。あるわけがない。答えなんて、どこにも……………」

それでもこの足は、どこかを目指してる。
まるでそこになら、答えまではないにしても、それに繋がる鍵く
らいは落ちていると言わんばかりに。

前へ、前へ。

細い道は続く。

広がるのは無機質な灰色の壁だけ。

ここには、はるか上空の陽の光さえもまばらにしか届かない。

ところどころ、薄汚れた地面が木漏れ日のように光の欠片を映し
出している。

俺の足は、まるでそれを追いかけるように進んでいた。

ふいに、何かを思い出す。

ただ細く狭いだけの汚い路地裏に過ぎないこの場所。

でも確かに、見覚えのある景色。

どこかで見た、どこでもない場所。

それはほんの数日前の記憶。

二人並んで歩いた道を少し外れて、アイツが俺の手を引いて歩き
出した場所。

閃光のように甦るイメージ。

気がつけば俺は、その場所に立ち止まっていた。

古びて錆付いた店の看板と、電球の切れたネオンサイン。

目印らしいものといえばたったそれだけ。

それでも、その場所は十分俺の記憶に新しい。

中古のCDショップ。

看板が古いせいで、店の名前さえも分からない。

俺はその古びた看板をジッと見上げていた。

「……………」

一歩、足を踏み出す。

今度はちゃんと、自分の意思で。

ガーと音を立て、反応の悪い自動ドアが開く。

ドアが完全に開き切ってから、俺は店内に足を踏み入れた。

空気がガラリと変わる。

陰湿な路地裏とは取って代わり、店内は数日前と同じゆったりとした暖かい空気が流れていた。

店内にはテンポのいいジャズの曲が流れ、こう言うのもなんだがちょっとした時代錯誤を覚えてしまうくらいだ。

「いらつしやい」

と、カウンターの奥から声がした。

見ると、そこには身長がゆうに百九十センチはあるかという巨体の男……店のマスターが椅子に座ってコーヒーを口にしていた。

この男性、背丈が高いだけではなく恰幅もいい。

ようするに縦にも横にも大きな男なわけだ。

俺はマスターの挨拶には答えず、代わりに小さく頭を下げて店の奥へと歩き出した。

今日はたまたまだろうか、見渡す限り店内に俺以外のほかの客の姿は一人も見当たらなかった。

もとより客足は少ないだろうとは思っていたが、ここまで客がないのも考え物である。

まあ、それも店そのものの立地条件を考えれば仕方のないことだ。もう少し表通りに面した場所にあれば、若い年代の客層は店を覗きに來てくれるとは思っただが。

と、店内を歩き回りながら思った。

どうしてこんなところに立ち寄ってしまったているのだろう。

……いや、考えるのはやめよう。

俺はたまたま路地裏に入って、その道がたまたまこの店の前に続いていたと言う、ただそれだけのことだ。

辿り着いた場所が見覚えのある店だったら、フラフラと足が向い

ても不思議なことはない。

そうだ、そうに決まっている。

何も目的を持たずに歩いていったんだ。

ここが俺にとつての目的地である理由も根拠も、そんなものは何一つありはしないのだから。

とはいえ、さほど広くもない店内とはいえ客が俺一人というのはどこか変な気分がする。

これといって欲しいものがあるわけでもなく、それなのにこうやっていつまでも店内を見て回るのは迷惑ではないだろうか。

俗に言う冷やかしと何一つ変わりはないのだから。

チラと、俺は店の一角からカウンターのマスターの姿を見た。

しかしマスターは俺のことなど気にもくれず、相変わらずのその大柄な体を椅子に預けて新聞を読みふけている。

ごゆっくりどうぞという意味合いだろうか。

まあ、マスターとしても客がいらないじゃ商売にもならないわけだよね……。

洋楽のCDの棚を見て歩く。

どれもこれも知らない海外のバンドばかりだったが、中にはどこかで見たことのあるグループのジャケットも目に付いた。

しかし、英語ならまだしも他の言語では曲名も歌詞も読めないし、日本語の意味も分からない。

結局俺はCDを見て回ると言うよりは、ジャケットのデザインを見て回っているだけだった。

そんなことをしている時間でも、俺には悪いものじゃなかった。少なくとも、こうして他の事に集中している間だけは余計なことを考えないですむ。

そう考えれば、結果としてこの店に立ち寄ったのは正解だったのかもしれない。

あのままだと俺は、本当にどこまでも際限なく自分を追い詰めて

いただろう。

きつかけなんて何でもよかったのかもしれない。

今はただ、こうして落ち着いて何かを考える時間が必要なだけで。

「……………」

不思議と気分が落ち着く。

店内に流れるメロディがそうさせたのかもしれない。

聞いたことがあるようで、でも実際は全く知らない曲。

それでも懐かしさが芽生えて、ついつい耳を澄ましてしまう。

曲自体は似たようなメロディを繰り返しているだけだと言つのに、
どうしてこんなに気持ちが悪く落ち着くのだろう。

音楽には癒しの効果があるというのは、今ではもう周知の事だ。

ということは、俺も癒されているということなのだろうか。

だとしたら、俺は何を癒されてる？

何を癒してほしい……苦しさから開放して欲しい？

……そんなのは、分かり切ったことだった。

「……俺は……………」

ふいに、店内の雰囲気が変わった。

今まで流れていたジャズの曲が途絶え、一瞬だが完全な静寂がこの場を支配した。

空気が凍るように収縮していくのが分かる。

さっきまでの路地裏と同じ。

何も聞こえない。

気分が悪くなってくる。

また、この場所からも逃げ出してしまいたいという抑えきれない
衝動が芽生える。

が、それも一瞬だった。

カチリと、何かが切り替わる音。

ジジジという機械音。

直後に、さっきまでとは違う別のメロディが流れ出した。

「……この、曲は……」

それは、気のせいでも間違いでもなく。
今度こそ心の底から懐かしいと思える、大好きなメロディが流れ始めた。

フリープルーム。

自由の羽根と言う意味の曲。

俺はこの曲の歌詞を全て、一言一句間違えずに口ずさむことができる。

昔好きだったドラマの主題歌として歌われていた曲。

当時はCDなんて買わなかった。

ただ毎週のようにドラマを見ているだけで、フレーズは頭の中に入っていた。

そのメロディが。

その詩が。

何よりも心地よかった。

曲を聴いている間だけは、まるで自分の背中にも羽根が生えているように思えた。

自由なんて、そうそう簡単に手に入れられるものじゃないけど。

誰だって手にできるよと、曲の中の詩がいつも言っていた。

その言葉が、全然ウソに聞こえなくて……。

「……………」

気付けば俺は、目を閉じて曲に耳を傾けていた。

あの夜。

ほんの数日前、この店で買った同じ曲のCD。

一度聴いただけで、今はもう机の上に投げ出したまま。

あの夜は、信じられなかった。

自由なんてない。

俺には羽根もないと、否定した。

……おかしい話だよな。

あれつきり聴きたくもないと思ってた曲に、今こうして耳を傾け

ているんだから。

だけど、不思議なんだ。

どうしてか今は、あの頃と同じように、ただこの曲を心地よく思
えてしまえるんだ。

Last Day(3) : 本日二回目のその言葉

フルコーラスを終えて、曲はしだいに遠ざかる足音のように小さく消えていく。

消えたくないと言う名残のような残響が、いつまでも耳の奥で残っていた。

「今日は、連れの子は一緒じゃないのかい？」

ふいにそんな声が、隣から聞こえてきた。

「え？」

俺が隣を振り返ると、そこには棚の中のCDを整理するマスターの姿があつた。

間近で見ると、改めてその体の大きさを嫌と言うほど実感させられる。

「……あの子って」

「三日前、君と一緒に来ていた彼女だよ。今日は一緒じゃないのかなと思つてね」

マスターの言う彼女と言うのは、間違いなく七星のことだろう。

三日前のあの日、俺は七星に連れられて初めてこの店を訪れたのだから。

「……今日は、俺一人です」

「……そうかい。いや、すまなかつたね、おかしいことを聞いて」
マスターの声はとても穏やかだ。

見かけの体格とは裏腹に、きっと性格も優しく温厚なのだろうと俺は思う。

「……………」

「……………」

それっきり、俺とマスターの間の会話は途絶えてしまう。

もつとも、会うのはこれで二回目で、接客以外で話をするのはこれが初めてのことだ。

大した話題もないのに、そうそう話が長続きするはずはない。と、少なくとも俺はそう思っていた。

「……今の曲ね、私が大好きな曲なんだよ」

「……え？」

マスターがふいに呟いた。

その言葉に俺は、隣にいるマスターを少し見上げた。

「何年か前に、ドラマの主題歌で使われていた曲なんだけだね。売り上げ自体は騒ぐほどじゃなかったけど、私の中では名曲だよ」

「……」

マスターは腕の中に抱えたCDを棚の中に次々と納めていく。カチャカチャと、腕の中でケースがぶつかり合っていた。

「君もこの前、同じ曲のCDを買っていつてくれたろう？」

「え？ ああ、はい……」

慌てて答えると、それでもマスターはとても嬉しそうに微笑んできた。

「いや、正直嬉しかったよ。同じ曲を好きな人がいてくれるって言うのは、いいものだ」

「……そう、ですね」

マスターがあまりに無邪気に笑うので、その姿が一瞬俺よりも小さい子供のように見えてしまった。

本当にこの人は、心の底から音楽を愛しているんだなと思った。

「……彼女もね、いつもこの店に来ると決まって聴いている曲があるんだよ」

「七……アイツが、ですか？」

「ああ」

マスターは答えて、一度後ろを振り返る。

「ほら、そこに視聴用のプレイヤーがあるだろう？ その真ん中の

やつには、いつも彼女の好きな曲が入っているんだ」

マスターの指差した先、そこには三日前に訪れたときに七星が使っていたプレイヤーが置かれていた。

「……聞いてみるかい？」

「……え、俺がですか？」

俺は自分を指差すが、もとより今は店内に俺とマスターしかいないわけだ。

答えずに、マスターは一つ頷いた。

俺は断ることもできた。

別にいいですよと言ええば、それでいいだけのことだ。

だけどなぜか、少しだけ興味が沸いた。

七星があれだけ好きになるほどの曲。

だけど、決して手に入れることはなかった曲。

俺はそれを、単純に金銭面での問題だとばかり思ってた。

だけどここは中古CDショップだ。

プレミアのついたレコードとかならんでもない値段がつきそう

だが、CD一枚にそこまで値段がつくとは思えない。

俺はプレイヤーの前にやってくる。

ヘッドフォンをつけ、プレイヤーの電源を入れた。

読み込みが始まる。

キュイイという機械音。

再生ボタンを押す。

そして、アイツのメロディが流れ始めた。

「……………」

停止ボタンを押す。

俺はヘッドフォンを外し、しばし呆然とする。

「……彼女はね」

その様子を見たマスターが、俺のすぐ隣へとやってくる。

「初めてこの店を訪れたのは、大体一年くらい前になる」

俺はマスターに向き直り、無言で話の続きを促した。

「そのとき彼女が最初に聴いた曲が、今君の聴いたその曲だった。それで気に入ってしまったのか、以来、店に来るたびに聴いているよ」

「……本当に、アイツがこの曲を……？」

「ああ。本当だとも」

マスターは微笑む。

まるで自分のことのように穏やかに語る。

「だが、その半面不思議に思ったよ。それだけ気に入った曲なら、CDを買っていけばいいのに、どうしてそうしないのかなと」

マスターの疑問は当たり前のものだ。

事実、三日前にこの店を訪れた俺も七星に対して同じ疑問を抱いたからだ。

「あるとき私は、彼女に聞いてみたんだ。そんなに好きな曲なのに、どうして自分で手に入れないんだい、と」

「……」

「そうしたら彼女は、こう言っていたよ」

マスターは一度目を閉じ、すぐに開いた。

「この曲は、私だけの曲じゃない。いつか一緒に、この曲を聞いた人がある。だから、手に入れるのはそのときでいいと」

その言葉に、俺は頭をハンマーでぶん殴られたような衝撃を受けた。

「……何だって？」

七星が……アイツがそう言ったのか？

そんな……でも、どうして……。

「……どう、して……」

その一言だけは、どうしても言葉に出てしまった。

しかしそれを聞いたマスターは、何もおかしいとは思わなかったのか、表情を変えないままにいる。

「どうして、か。君は、どうしてだと思う？」

「……俺は……」

分からない。

「……分からない。どうしてアイツが、そんなことを……」

「……彼女も、そう言っていたよ」

「……え？」

「私がどうしてだと聞いたら、彼女は分からないと答えたよ。自分でもよく分からないと。けど、彼女はこうも言っていた」

俺は息を呑む。

「今はまだ分からない。でも、いつか分かるときがきたら、それはきつとこの曲を二人で聴くときだと思う」

その一言に。

どれだけの意味が、想いが、感情が込められているのか。

……分かった。

はつきりと、分かった。

逃げ出したままだったのは、俺だけじゃなかった。

アイツも……七星もずっと逃げていたんだ。

俺は勘違いをしていた。

救われない存在が自分だけだと勝手に決め付けて、七星に対していつも負い目を感じるように自分を作り上げていた。

だけどそれは、大きな間違い。

同じだった。

ずっと、同じだったんだ、

七星もずっと、俺に対して負い目を持っていて、自分が救われな
い存在だと決め付けていたんだ。

そんなことが、これから続くのか？

何も変わらないまま、未来永劫に続くと言うのか？

……いいや、違うだろう。

そんなことがあっていいはずがない。

……何だ、ちゃんと分かってるじゃないか。

そこまで分かってるんなら、もうやることは一つだよな？

「……どうか、したかい？」

マスターが変わらぬ声で話しかける。

「いえ、何でもないです。ただ……」

「……ただ？」

さあ、行こう。

行くべき場所が、あるんだろう？

「……ちよっと、用事を思い出しました」

それは。

もう、口からでまかせの言葉なんかじゃない。

「……ああ。行っておいで」

そう言っただけで送ってくれたマスターの笑顔は、本当に優しくかった。走り出す。

答えなんて、どこにもなかった？

ウソばっか。

答えなんて、最初からずっと持ってたじゃないか。

まあ、気付くのにちよっと時間がかかりすぎたよ。

遅れは取り戻さないといけないよな？

だから、走るんだ。

もうすぐ夕方になる。

夏祭りの前夜祭が、もうそろそろ始まる頃だ。

「七星、私達もそろそろ行きましょうか」

ソファで小説に読みふけていた私を、明美さんが呼んだ。

「……そう、ですね。行きましょう」

私は小説を閉じ、グッと背伸びをして立ち上がる。

「大丈夫よ。隼人ならどうせ、忘れた頃にひょっこりやってくるわ」
だから安心しなさいと言わんばかりに、明美さんは小さく微笑ん

だ。

「え、べ、別にそんなこと一言も言っていないじゃないですか！」

本当は凶星を突かれてどうしようもなく慌てているのをごまかそうとして、逆に私は焦って言葉足らずになってしまふ。

「はいはい。そういうことにしておくわね」

「も、もう、明美さんってば……」

と、私はそこで食い下がる。

これ以上食って掛かっても、逆に明美さんはますます楽しんでしまいそうだったからだ。

私は荷物を取るために、一度部屋に戻る。

荷物といっても、携帯と財布を上着のポケットにしまいこんでしまえばそれで準備は完了なんだけど。

「じゃ、行きましよう。一応鍵も渡しておくわね」

明美さんから合鍵を受け取る。

それも一緒にポケットの中にしまいこんで、私と明美さんは揃って家を出た。

空はまだまだ明るい。

ずっと遠くの空が、ほんのりとオレンジ色に染まっているだけだった。

海岸線に続く道を歩き出す。

あちこちの電柱に、今日と明日の夏祭りの広告やチラシが張られていた。

私と明美さんが揃って歩く道を、子供達が自転車で追い抜いていく。

きつと、行き着く先は同じなんだろうな。

浜辺に近づくに連れて、ぶら下がる提灯の数が多くなっていく。微かだけど、祭囃子の音色も確かに聞こえていた。

笑われるかもしれないけど、少しだけ心がワクワクしていた。その反面、どこかフワフワしていた。

原因は分かっている。

ホントにもう、一体どこをほつつき歩いているんだろう。

昼過ぎに用事があると家を出たつきり、隼人はまだ帰ってこない。メールもしたんだけど、返事は返ってこなかった。

気付いていないのか、それとも電源を切っているのか。

まあ、どっちでもいいけどさ……せっかくのお祭りなんだから、早く来なさいよね。

あんまり遅いと、晩御飯は隼人の奢りってことで。

Last Day(4)：祭囃子と昔語り

神社のふもと、浜辺付近の海岸通はすでに多くの人々で賑わいを見せていた。

交通規制がしつかりと行われているようで、この付近には車両は入ってこれないようになっている。

時刻は間もなく夕方の方の五時。

この時間に開いている屋台は、ほとんどが子供向けのものばかり。金魚すくい、わたあめ、カキ氷、射的、その他ゲームじみたものがほとんど。

食品関係の屋台は、六時を過ぎないと開かないとのことだった。

まあ、さしてお腹も空いているわけではないし、一時間ほどのんびりあちこちを見て回るのも悪くないかな。

途中で明美さんと別れる。

実行委員の方に顔を出して、少し手伝いをしてくれるとのことだった。

「さて。私はどうしようかな……」

到着してから思ったのだけど、もう少し家でゆっくりしててもよかったかもしれない。

この時間では圧倒的に子供達の姿が多く、屋台もそれに合わせたものしか開いていない。

歩き回ったところで、あまり見るものがないというのが現状。どうしたものだろう……。

と、道の真ん中で考えているときだった。

「わっ!」

「わあっ!」

果たしてどちらが驚かし、驚かされた声なのか。

分からなくなるくらいに、私達の声は同じだった。

「な、なんだ、葵かあ……」

振り返ると、がっしりと肩を掴んだ葵の姿があった。

「へへー。どう、驚いた？」

「うん、ビックリした」

そう答えると、なぜか葵は満足そうに笑うのだった。

「って、あれ？ 七星一人？ 来栖君は？」

「隼人なら、昼過ぎから出かけててまだ戻ってないよ」

「あらあら。七星を置き去りにしてどこかへ行ってしまったってことなのね」

「お、置き去りって何？ 変な言葉使わないでよ……」

「おや？ その割にはそれらしい反応を示しているように見えるんですが……これはもしかして……？」

「な、何考えてんのよ葵！ 私だって怒るよ！」

「アハハハ。ごめんごめん。ちよつとからかってみただけだって」

「うう、相変わらずなんだから……」

私はどうやら、明美さんと葵には相当いじくりやすいキャラをしているみたいだ。

二人の態度を見ると、それを嫌でも実感させられてしまう。

……ちよつとだけ、自分が情けなくなってくる。

「ま、来栖君もそのうち来るでしょ。それまでは一緒に見て回ろうよ」

「うん、それは構わないんだけどね。今の時間って、子供向けの屋台しかやってないでしょ？」

「大丈夫大丈夫。神社の上では色々イベントやるって話だから、そこで時間潰そう」

そう言つと、葵は私の手を引っ張って人ごみの中に走り出した。

「わ、ちよつと葵！」

成すすべなく、私は葵に引っ張られていく。

行動力があると言えば聞こえはいいけど、葵のこれは猪突猛進と

言うものだと思う。

でもまあ、それもいつものこと。

半ば諦めて、私は葵のあとに続いて走り出すのだった。

「……あ、揃った……って」

私がそう呟くなり、隣に座っている葵が勢いよく立ち上がり、叫んだ。

「ビンゴ！ はいはいオジサン、揃ったってば！ コラ、無視すんなっ！」

「あ、葵……？」

葵は性格が変わって……いや、ここまでくればこれはもう変貌と言ってもいいと思う。

私の手からビンゴゲームの紙を奪い取り、堂々と夕暮れに染まり始めた空に向けて掲げていた。

正直、見ているこっちが恥ずかしくて仕方がない。

周りには大勢の子供や家族連れの姿までいるというのに、葵はそんなことなどお構いなしだ。

本当にこの性格は、見習わなくちゃいけないようで見習ったら大変なことになりそう……。

その葵は、今ちょうど景品を受け取って私のもとに戻ってきた。

「はい七星。やったじゃん」

葵は言いながら、私にその封筒を渡した。

「う、うん。ありがと……」

嬉しいことは確かなのに、どうして手放して素直に喜べないんだろう。

その理由は、今こうして目の前にいるんだけど……。

「葵って、改めてすごいと思った」

「へ？ 何よそれ」

と、本人はあっけらかに言い放つ。

まさかとは思うが、気付いていないんだろっか？

いや、いくらなんでもそれはない。

と、いうことはだ。

ようするに……自覚症状がないってことなのかな。

……それってある意味、気付いていないよりもタチが悪いんじゃないかな……。

考え出したら頭が痛くなってきた。

とにかくきりしたことは、私は葵みたいにはなれないなということだった。

「ところで、賞品って中身何だった？」

言われて、私は手の中の封筒に目を落とす。

「何だろう？ 薄いし、商品券とかじゃないかな？」

私は封筒の封を破る。

中から出てきたのは、三千円分の図書券だった。

「図書券ねえ……って、葵は小説とか読むし、案外ちょうどいいかもしれないね」

「うん。そうかも」

私は素直に笑って答えた。

ちようど来月に、今読んでいるシリーズものの新刊が発売される。そのときに使わせてもらうことにしよう。

私は図書券を封筒に戻し、ポケットの中にしまった。

そしてふと、葵がマジマジと私の顔を見ていることに気付いた。

「な、何？ どうかしたの、葵？」

「……んー、私の考えすぎだったかなあ……」

などと言って、勝手に自己完結してしまう。

「え、え？ な、何？ 気になるなあ……」

「いや、そのね。別に大したことじゃなかったんだけど……」

葵はそこで一度口ごもる。

大したことではないという割には、どこかバツの悪そうな感じだった。

「……この前さ、祭りの準備をみんなでした日。あの入り江から出てきてから、七星の様子がちょっとおかしかったからさ」

「あ……」

言われて私は思った。

そっか、葵なりに、私を心配してくれてたんだ……。

必要以上にハイテンションだったのも、もしかしたら私が気落ちしてると思ってそうしてくれていたのかもしれない。

「何でもなかったなら、それでいいの。ごめんね、変なこと言ってる……」

「うつん、そんなことないよ。私、葵にも心配かけてたんだね……」

「そんな大げさなことじゃないけどさ。ただ、なんとなく雰囲気がある。来栖君と、何かあったのかなって」

「……私って、そんなに顔に出るのかな」

「どうなんだろ。私もよく分かんない。でも、あのときは何て言うか……雰囲気がちよっと違ってたから、かな……」

「アハハ……ホント、葵には敵わないな……」

「……七星、やっぱり何かあったの？」

葵が私の顔を覗きこんでくる。

本当に心配してくれてるんだ。

「……少し、歩こう。ここは、人が多いよ」

人ごみを避けて、私と葵は境内の裏手にやってきた。

そうしなくちゃいけない理由はなかったけど、できるならあまり他人には聞かれなくなかった。

「何から、話せばいいのかな……」

私は一人呟いて、わずかに空を見上げた。

明るさと暗さの境界線。

中途半端に染まりかけた色の空が広がっている。

それはまるで、私の心の中身をそのまま映す鏡のようだった。
混ざることでもできず、かといって片方の色に染まることもできない
半端物。

……イヤだな。

ホント、イヤになるくらいにそっくりだよ。

そんな中途半端な空の上、いくつかの星が光ってた。

それらはきつと、星にはなれなかった星屑達。

でもいつか、星になれると信じて輝いている。

祈りも望みも届かない、広すぎる宇宙の海の中。

彼らは一体、何を想って光を放っているのだろう。

「……七星？」

葵の呼びかけに、私は視線を地上に戻す。

「ごめん。ちよつと考え事してた」

「……ううん、それはいいけど……」

辛いなら、無理しなくてもいいよ、と。

そのあとに続く言葉は簡単に想像することができた。

「大丈夫。平気だよ」

「……………」

葵はまだ何か言いたそうだったけど、私は強がりですそれを止めさせた。

「……少し、長くなるかもしれない。それでもいい？」

答えずに、葵は静かに頷いてくれた。

柱に背中を預け、私は小さく深呼吸をする。

昔話を始めるよ。

「私に親がいないのは、葵も知ってるよね？」

「……うん。前に聞いたよ。確か、お母さんは体が弱くて、七星が生まれてすぐに死んじゃって、お父さんは事故で……」

葵の言葉に私は頷く。

「その事故についてなんだけどね、表向きは火事ってことになって

るんだけど、本当は違うんだ……」

葵は少なからず驚いてたみたいだけど、あえて無言で先を促してくれた。

私は続ける。

「家事なんかじゃないの、本当は。住んでた家が燃えたのは本当。だけど、お父さんは火事が原因で死んじやったわけじゃないの」

……その先を、言っていいのだろうか。

今ならまだ、タチの悪い冗談だよと笑ってごまかすことだってできるんだよ？

そうまでして苦しみを掘り返す必要が、どこにあるの？

誰でもない、苦しむのは私自身なのに。

どうして自ら、苦しみの中に身を委ねなくちゃいけないの？

あんなに苦しんだじゃない。

あんなに泣いたじゃない。

今更それを、どうして繰り返す必要があるの？

……そうだね。

ホント、その通りだよ。

でもね。

口にするからこそ、一時でも苦しみから解放されることだってあるんだよ。

その相手が、心の底から親友と言える人なら、それこそ、ね……。

「……お父さんはね、殺されたの」

「…………！」

葵は声を上げはしなかった。

けど、表情の変化でどれだけ動揺しているのかは火を見るより明らかだった。

誰に、と。

その目が聞いてくる。

「……お父さんを」

言いかけて、一瞬言葉が詰まる。

だけでもう、後戻りなんてできない。

「お父さんを、殺したのは……」

永遠のような一秒。

まるで、はるか頭上で輝く星達の一生のようだった。

「私のお父さんを殺したのは………隼人」

葵の体がわずかに震えてた。

私はただ、沈黙を保つことしかできなかった。

私のお母さんは、私を生んですぐに病気でこの世を去ってしまったらしい。

らしいというのは、このことはあくまでお父さんから聞かされた記憶であり、私はお母さんの顔を写真ですら知らないからだ。

そうして私は幼少時代をお父さんと一緒に暮らしていくことになった。

けれど、いつの頃からだったろうか。

お父さんは変わってしまった。

私に、暴力を振るうようになっていったのだ。

最初はただの暴言程度のものだった。

仕事がつましくいかなかったのか、それとも私がもとから嫌われていたのかは分からない。

物心ついた頃、私の目の映るお父さんはもはや恐怖の対象でしかなくなっていた。

それでも表面上の家族を装うことができたのは、お父さんはかうじて暴力を抑制していたからだ。

だから私は、小学校に入学する以前まではお父さんに暴力を振るわれたことはない。

しかし私が小学生になり、最初の夏がやってきた頃。

とうとう、今の今までかろうじて繋いであった糸がプツリと切れ

てしまった。

お父さんは私を叩き、殴るようになった。
日に日に飲むお酒の量も増えて、一種の幻覚が狂乱のような状態
になっていたのだと思う。

昼夜を問わず、私は同じ家で怯えながら暮らさなくちゃいけない
ことになった。

料理も洗濯も掃除も、この頃から覚えた。
いや、覚えざるをえなかった。

お父さんはまるで悪魔に取り付かれたかのようなだった。
仕事もやめて、一日の大半をお酒を飲むか寝て過ごすかしかしな
くなっていった。

虫の居所が悪いと、決まって暴力に訴えた。
矛先はもちろん、私だ。

毎日が地獄のようだった。
それでも、私は祈ってた。
願わずにはいられなかった。

いつかこの暗闇の日々に終わりが来て、また二人で仲良く笑い合
える、そんなときが来ると。

顔も声も知らない、天国のお母さんに祈り続けてた。

そんな私が唯一自分でいられるのは、学校にいる時間だった。
そこには仲のいい友達もいる。

優しい先生もいる。

学校にいるわずかな時間だけが、私が私でいられる時間だった。
けど、学校の先生も私の家の惨状には何も気付いていない。
それは、私が何も言い出さなかったからだ。

家庭訪問のときでさえ、お父さんは仕事で忙しくてどうしても都
合がつかないとごまかした。

学校側にも私がお母さんを早くに亡くしていることは伝わってい
たので、その言い訳は実に効果的だった。

それでも私は、やはり苦しかったんだと思う。
何しろ逃げ場なんてどこにもなかったのだから。

そんな私の家の異変にいち早く気付いたのが、隼人と明美さんだ
った。

隼人は昔からの幼馴染で、家も近所だった。

もちろん、通う学校だって一緒だった。

家が近いから、登下校で一緒になることだって珍しくなかった。
今思えば、隼人は幼い頃から妙なところで勘がよかった。

だから、当時の私の異変にもいち早く気付いたのかもしれない。

ある秋の日のことだった。

学校の帰り道、私と隼人はたまたま帰り道の途中で一緒になった。

「あ」

「あ」

互いに一言そう呟いて、しばらく沈黙する。

学校では同じクラスなのに、ここ最近はめっきり会話することも
少なくなっていた。

誰がそうしたわけでもない。

私が勝手に隼人から離れていただけのことだった。

家が近所の隼人には、今の私の家の様子を特に知られなくなっ
た。

「…………お前さ」

と、おもむろに隼人は口を開いた。

「何か、元気ないんじゃないのか？」

凶星だった。

そんなもの、あるわけがなかった。

「…………うつん、そんなことないよ」

強がりだった。

知られたくないと言う気持ちだが、折れそうな心を無理矢理に奮い立たせていた。

「ホントか？ ウソだろ」

「ウソじゃないよ。ホントに、何でもないから……」

「……そっか。なら、いいや」

そう言つと、隼人は歩き出した。

私は後味が悪いまま、それでも変える方向が同じなので隼人の後に続いた。

無言の時間が流れる。

聞こえるのは、二人分の小さな足音だけ。

夕暮れが迫る道に、同じ背丈の影が二つ。

つかず離れず、わずかに揺れて歩いてた。

やがて、分かれ道が来る。

私の家は、隼人の家よりももう少し先にある。

「じゃ、また明日な」

隼人は玄関前で振り返り、私にそう告げた。

「うん。またね……」

返事も簡単に、私は家に急いだ。

帰りが遅いと、またお父さんに殴られてしまう。

「なあ、七星」

そんな私の背中を、隼人は呼び止めた。

答えずに、私は振り返る。

「今度、ウチに遊びにこいよ。俺の母さんも喜ぶからさ」

「……」

私は呆然と立ち尽くしていた。

突然のことに、返す言葉が見つからなかった。

「おい、聞いてんのか、七星」

「……え、あ、うん。今度、遊びに来るね」

それだけ言つと、なぜか隼人はとても嬉しそうに笑ってくれた。

「おう。待つてゐるからな。またな」

そう言つて、家の中へと歸つていく。

嬉しい反面、どこか悲しかった。

そんな風に自由になれる日々は、いつになったらやつてくるのだろうか。

流れそうな涙をどうにか堪えて、私は家に向かつた。

幸いお父さんは寝ていて、そのときは暴力を受けずに済んだ。部屋に戻り、鍵をかける。

こうでもしないと夜は怖くて眠ることもできない。

だけど今日は、よく眠れそうな気がした。

待つてゐるからな。

そう言つてくれた人がいた。

それだけで、今日一日がいい日に思えた。

だけど。

きつとそれは、感じてはならない幸せの欠片だつたんだろう。

そんな些細な幸せすらも残さず奪い去るように、その夜、事件は起きた。

Last Day(5)：ヒーローの手が血塗れた日

炎の中にいた。

床も壁も天井も、どこもかしこも真っ赤に染まっている。

熱い、熱い、熱い。

床の上に横たわる私の体に、炎の熱が迫る。

痛い、痛い、痛い。

体のあちこちを殴られる。

やめてとどれだけ叫んでも、一方的な暴力は止まることを知らない。

背中を殴られ、腕を殴られ、腹を殴られる。

その衝撃に、肺の中の空気の塊を根こそぎ吐き出してしまう。

「ゲホッ、ゲホッ！」

苦しい。

息ができない。

ただでさえ酸素不足だというのに、それを後押ししてしまう。

そんなことは気にも留めず、暴力は続く。

実に一方的。

無抵抗な生き物を嬲り殺すのと同じ。

弱者に対する強者の力の提示。

弱いものいじめの究極形。

「やめ、て……お父さん、おね……がい……」

少ない酸素を吐き出して私は叫んだ。

しかしそれは叫びと言うにはあまりにも儚く、もはや囁きにしかならなかった。

そんな声は、轟々と猛る炎の中では誰の耳にも届きはしない。

「お父、さん……やめて……痛い、痛い、よ……」

言葉を口にするたびに、焼けた空気がのどの奥の肺まで回ってくる。

声帯が麻痺してしまったように、もう小鳥のさえずるほどの声も出ない。

イヤだ……こんなのは、イヤだよ……。

痛いのはイヤだ。

苦しいのはイヤだ。

辛いのはイヤだ。

……助けて。

誰か、助けて……。

誰でもいい。

もしもこの世界に神様がいるんだったら、お願いだから助けてほしい。

もうこの際、神様なんて贅沢は言わない。

今だけ。

この一瞬だけでいいから……。

正義のヒーローにやってきてほしかった。

意識が遠のいていく。

結局最後まで、この目に映っていたものは赤い炎の色だけだった。

痛みなんてもう慣れてしまつて、苦痛にしか感じない。

体中から力が抜けていく。

このまま眠ってしまえば、少しは楽になれるのかな？

……そうだ、きっとそうだよ。

きっと、次に目覚めたら。

今までのことは、全部悪い夢のせいに行けるんだ。

だから、眠ろう。

もう、疲れたよ……。

まぶたが落ちる。

その刹那、誰かの声が聞こえた。

待ってるからな。

それは、彼との約束。

……ごめんね、隼人。

約束、守れ……なか……。

意識が落ちる。

からうじて繋ぎとめておいた回線が、プツリと音を立てて途絶える。

瞬間、世界の一部が崩壊した。

ボタン、と。

大きく音を立てて、扉が開かれた。

振り下ろされていた腕が止まる。

私もその大きな音に、意識を取り戻した。

目を開ける。

炎に揺れる視界の先、誰かが立っていた。

ひどく虚ろで、ひどく小さいその姿は、しかし確かな怒りを剥き出しにしていた。

「……はや、と………」

その名を呼ぶ。

途端に、涙がとめどなく溢れた。

来て、くれた……。

それだけのことが、私には何よりも価値のあることだった。

「何だよ、これ……」

声が聞こえる。

ああ、本当に、間違いじゃないんだ。

これは、夢なんかじゃないんだ。

「何やってんだよ、叔父さん！」

小さなヒーローは吼える。

その言葉を、覚えている。

私はそのとき、どうしてか小さく笑ってしまった。
不思議だよ。

もう、何も怖くない、って。
そう、思えたから……。

ヒーローはやってきてくれた。
ただ、それだけで嬉しかった。

でもそれは、間違いだった。

私はヒーローを望んではいけなかった。

小さな体が突き飛ばされる。

全身を壁に叩きつけられ、隼人は目に見えて弱々しくなっていく。
考えてみれば当たり前のことだった。

子供と大人じゃ体格はもちろん、力だって全然違う。

勝負なんてなるわけがなかった。

「く、そ……」

それでも隼人は立ち上がる。

絶対に敵わないと分かっているはずなのに、何度でも立ち上がる。
そのたびに、容赦のない暴力が隼人の体をボロボロに引き裂いて
いった。

ガンッ！

幾度目かの衝撃。

背中から壁に叩きつけられ、隼人は力なく床の上にへたり込む。

小さな体は、その全身が見ていられないほどにボロボロだった。

どうにかまだ五体満足ではあるけど、もう体は言うことを聞か
なくなっているはず。

「……もう、いい、よ……隼人、立たない……で……」

このままだと、隼人まで死んでしまう。

私なんかを助けにきたばかりに、とばっちりを受けて死んでし
まう。

それだけは、絶対にダメだ。

私の体はまだ動く。

だったら、止めないと。

「……やめ、て。お父、さん……やめて……」
両手で足にしがみつく。

それに気付いてか、再び暴力の矛先は私に変わる。
振り払われた足が、私の腹を抉った。

「……っ！」

呼吸が停止しそうになる。

必死に咳き込みながら、酸素を求める。

直後に、また大きな物音がした。

見ると、隼人が床に転がっていた。

また壁に叩きつけられたのだ。

「はや、と……もう、いいから。逃げ、て……」

隼人の体はまだ動いている。

呼吸で胸が上下する程度のものだが、確かに生きている。

しかしそれももう虫の息だ。

生きていると言うことは、死んでないと言うことと同じではない。
今の隼人は、かろうじて死んでいない状態だ。

だからもう、これ以上立ち向かおうものならば、確実に死んでしま
う。

それだけは絶対に止めなくちゃいけない。

「立たない、で……もう、いい、から……立たないで、隼人……」
祈るような囁き。

隼人はこうしてきてくれた。

それだけで、私は十分すぎるほどに嬉しかった。

だからもう、立ち上がらないで。

隼人まで苦しい思いをする必要なんて、どこにもないんだから。

心の中でそう告げて、私は全身に力を込めた。

ズキズキと痛みが走り、まるで自由が利かない。

本当に、壊れたオモチャにでもなってしまった気分。
それでもいい。

オモチャだったなら、痛みも苦しみも何もないんだから。

「お、父さん……私は、こっち、だよ……」

少しでも、私が時間を稼ぐから。

隼人、その間に逃げて。

来てくれて、本当に嬉しかった。

神様は、いたんだね。

隼人は、本当に……。

「私の中の、たった一人のヒーローだよ……」

頭上から拳が振り下ろされる。

そこにためらいと言うものは何一つない。

完全に我を失って、血の繋がった娘をその手で亡き者にせんとする暴力の塊。

まるで映画のワンシーンのよう。

クライマックスをスローモーションで見せるような、怖いくらいにゆっくりとした動き。

……ありがとう、隼人。

目を閉じる。

……バイバイ、隼人……。

視界が暗転する。

その、直後。

「うあああああつ！」

叫ぶ声。

私は慌てて目を開ける。

炎に包まれた視界の先、私の目に映ったもの。

それは。

ナイフを握ってお父さんに倒れこむ、隼人の姿だった。

けれど、間に合わない。

このままじゃ隼人のナイフよりも早く、お父さんの拳が隼人を殴りつける。

そうなれば、きっと隼人はもう助からない。

お父さんを止めなくちゃいけない。

でもそうしたら、お父さんはナイフに刺されてしまう。

私は……どうすれば……。

悩んでいる時間はない。

そうこうしている間に、お父さんの拳は完全に隼人を標的に変えていた。

このままでは、隼人は確実に殴り飛ばされる。

そして、そして……。

死んでしまう……。

「……ダメ　　ッ！」

気がつくとは私は、お父さんの腕にしがみついていた。

お父さんが私に振り返った、その一瞬に。

隼人は、そのナイフをお父さんの体に突き刺した。

そのまま、私達三人の体がバラバラに床の上に転がった。

そこで私の意識は完全に途絶え、次に目を覚ますのは病院のベッドの上のことになる。

「……………」

一通りの話を終え、私はもう一度空を見上げていた。

思ったよりも時間が経っていたのか、空の色はうつすらと紺色に染まり始めたところだった。

「……そっか。そんなことがあったんだ……」

隣に座る葵は、暗い表情でそう呟いた。

「……うん」

暗くなるのも無理はない。

私が話した内容はそういうものだったから。

少しだけ涼しくなった夕方の風が、私と葵の間を通り抜けた。心地よい風に、私はわずかに目を閉じた。

「……でも、私は後悔はしなかったよ」

「……え？」

「こんなこと言うと、お父さんもお母さんも悲しむかもしれないけど……」

視線を戻し、葵を真っ直ぐに見据えて言う。

「私は、本当に隼人に感謝してるから……」

「……うん。部外者の私が言うのも何だけど、きっとそれは間違っていないと思う」

「ありがと、葵……」

「な、何よ改まって」

「話、ちゃんと聞いてくれたから」

「……それはこっちのセリフだよ。ありがとね、七星。話してくれて。ちょっとだけ、七星のことが分かったような気がする」

言って、葵は微笑んでくれた。

だから私も、笑い返してみた。

「でもさ」

「ん？」

「どうして急に、そんな大事なことを話してくれたの？」

「……正直、自分でもよく分かんないんだよね」

でも、理由らしい理由があるとすれば、それは一つだけ。

「思い出した、からかな。きっと……」

「思い出したって……その、火事のときのこと？」

「うん」

思い出したとは言っても、記憶がなくなっていてそれを思い出したわけじゃない。

いつの間にか記憶の中からも薄れていったあの日の出来事を、思い出してしまったのだ。

「この前、みんなで入り江に行ったでしょ？ あのとときに、思い出したんだ……」

あのととき。

隼人は落盤から私を助けてくれた。

それこそ、自分の身を犠牲にしてまで。

そのときに、あの日の記憶がふいに甦った。

絶対に敵わないと分かっている相手に、しかし何度も何度も立ち上がった隼人の姿。

デジャヴユ、って言うんだっけ？

あの日の隼人と、そのときの隼人が重なって見えたんだ。

「そっか……それで、ついつい思い出しちゃったってわけね」

答えず、私は頷いた。

「そのときにね、私思ったの。ああ、また私は隼人に助けられてる。助けられてばかりだな、って……」

「……人間なんて、みんなそうだと思うよ。気付かないところで誰かに助けられて、気付かないうちに誰かを助けてる」

葵は詠うように言う。

「大切なのは、その気持ちを忘れないでいることなんじゃないかな？ 少なくとも、私はそう思ってる」

「……そうだね。きっと、葵の言っていることは正しいと思う」

「その点で言えば、七星は大丈夫だよ。ちゃんとそのことを覚えてる。中には辛い記憶もあるだろうけど、ね」

「……うん。だけど、ね……」

私の言葉に、葵が疑問の表情を浮かべる。

「それでもやっぱり、私は隼人を苦しめているんじゃないかって思うんだ……」

「な……どうしてよ？」

「……私のせいで、隼人は人殺しになっちゃったから。それは、私が弱かったせいだもの……」

「待って、七星。それは違うよ？ 誰だって、人間なら弱さを持つてるものなの。強い人間なんて、それこそいないようなものだよ？」

「違うの。そうじゃないの……」

自分でも驚くくらいに消え入りそうな声。

「……私をもっと強ければ……せめて、もっと早くに誰かに助けて
って叫ぶことができれば、きっと、あんなことにはならなかった……」

……」

「……七星」

「結局私が弱かったから、隼人は私を助けるために人殺しになるし
かなかった。私が、隼人を人殺しにしちゃったの……」

「……」

「……隼人はきっと、そのことでずっと苦しんできた。ううん、今
も苦しんでる。いつそのこと、あの日私なんか死んじゃえば……」

「七星っ！」

葵が怒鳴り声を上げた。

私はビクンと肩を震わせ、葵に向き直る。

「……それ以上言うなら、私はアンタを引つ叩かなくちゃいけない」
「……」

葵は本気で怒っていた。

膝の上で握られた手は、小刻みに震えていた。

「……ごめん。でも、私は……」

「七星、アンタ本気でそう思ってる？」

「……」

「本当に、そう思ってるの？ 来栖君がどんな想いで、たった一人
でアンタを助けに行っただと思ってるの？」

「……それは……」

「来栖君にはね、選択肢があつたの。警察が来るまで待つとか、大
人に相談するとか。無難に乗り切ることなんて簡単だったの」

「……」

「それでも彼は、それをしなかった。単身で火事の中に飛び込んで、
アンタを助けた。そうでしょう？」

「……」

「命をかけてまで、助けたいと思ってくれた人がいるの。そうして助かった命があるから、アンタは今、こうしてここにいる」

葵は一度目を閉じ、ゆっくりと開ける。

「それなのに死んじゃえばよかったなんて、そんなの間違ってるよ。それは、七星だって分かってるはずだよね？」

最後は諭すように、どこか優しく。

「……うん。分かってる、けど……」

やはり私は、簡単に首を縦に振ることができない。

その様子を見て、葵は言った。

「だったらもう、手っ取り早く確認したほうがいいよ」

「確認って、もしかして……」

直接隼人に聞く、ということだろう。

「それは……」

できることならそんなことはしたくない。

あの日のことを無理矢理掘り返されることは、隼人だってイヤなはずだ。

「このままズルズル引きずっても、何も解決しない。ときには踏み出すことも必要だよ」

「……」

葵の言っていることはもっともだった。

だけど私は、まだ心のどこかで怖がっている。

あの日と同じ、弱い自分のままだった。

このままずっと、弱いままの自分でいるの？

そうやって逃げ続けて、何もかもを偽って生きていくの？

それがどれだけ自分を苦しめる道か、本当に分かっているの？

「……私は」

と、そのときだった。

ふいにポケットの中の携帯がメロディを奏でる。

無言で促す葵を横目に、私はデジタルの画面を覗く。そこに。

着信　来栖隼人。

「……七星、がんばって。来栖君だってきつと、同じ苦しさを背負っているはずだよ」

私は葵の言葉に小さく頷いた。

そしてわずかに震える指先で、通話ボタンを押した。

Last Day(6)：いつか僕らが星になって、僕らの記憶も星になった

俺は長い石段を上り終える。

祭りに賑やかさがそこにも続いていて、多くの人々が大して広くもない境内の中、ひしめき合うように集まっていた。人ごみの中を掻き分けて、俺はその場所に向かう。神社の裏。

七星はそこにいと、電話の向こうでそう言っていた。境内を抜け、神社の裏手に続く雑木林を目指す。と、その途中で意外な人物に出会った。

「……瀬口？」

雑木林の近くで一人佇んでいるその姿は、間違いなく瀬口だった。瀬口も俺に気付いたのか、ハッと顔を上げてこっちに歩み寄ってくる。

「や。来栖君」

軽く片手を上げて瀬口は言う。

「瀬口、何やってんだよこんなところで？」

「いや、特に何ってわけじゃないんだけどね……」

瀬口の言葉はどこか歯切れが悪い。

俺、何か悪いことを聞いてしまったのだろうか？

「それより、来栖君こそこんなとこで立ち止まっていいの？」

「え？」

「七星、そっちで待ってるよ。早く行ってあげないと」

「あ、ああ。でも、何でお前がそんなこと……」

「詮索はあとあと。ほら、女の子を待たせるんじゃないってば。そつ言つと瀬口は、ドンと俺の背中を押した。

「お、おい。何なんだよ、一体……」

そう言いつつも、俺は促されて歩を進める。

「来栖君」

と思つたら、また呼び止められる。

ホント、一体何なんだ？

「ん？ 何だよ？」

「七星のこと、ちゃんと支えてあげないとダメだよ。あの子の救えるのは、きっと来栖君だけだと思うから……」

「……何だよ、それ。瀬口、お前何言つて……」

「私から言えるのはそれだけ。じゃね、がんばって」

言いたいことだけ言つて、瀬口はさっさと祭りの人ごみの中に去つていった。

俺だけがそこに取り残されたようで、ひどくその場所は空虚だった。

「……何でお前が、そんなこと言つんだよ」

だけどそれは、結果として俺の背中を押したことになるのかもしれない。

……つて、実際に背中押されたよな、俺。

などと、どうでもいいことを考えている暇はない。

七星はこの先にいる。

会つて話そう。

ちゃんと、伝えるべきことを伝えよう。

そのために必要なものは、最初から全部この手の中にあつたんだから。

「あ……」

最初に声をあげたのは七星だった。

「悪い。遅くなった」

「うつん。私も今来たところだから」

バレバレのウソだった。

なぜなら、俺はすぐそこで瀬口と会っていたのだから。
まあ、今はそのウソなんてどうでもいいことだ。

「隣、いいか？」

「あ、うん……」

俺は七星の隣に腰を下ろす。

とはいえ、そこはコンクリートの地面の上。

ズボンの下から、わずかにひんやりとした感覚が伝わってくる。

俺はそのまま、一度頭上の空を見上げた。

徐々に夜の色の変わりつつある空模様。

ところどころに、儚いほどの光を放つ小さな星が顔を出していた。

「急に呼び出してごめんな。家に帰ってから話そうとも思ってたんだけどさ」

「ううん、いいよ別に。それで、話つて、何？」

「ん……」

いざ話し出すとなると、俺は何から話せばいいのか分からなくなってしまうた。

肝心要の伝えたい言葉は、それこそたった一言だけ。

だけどそれだけじゃ、きっと無意味なんだ。

言葉を探す。

うまく言い繕うことなんて、最初からこれっぽっちも考えていないんだ。

拙い言葉でもいい。

伝えたいことを伝えればいいんだ。

「……なんだかんだでさ、俺達が家族になってからもう十年だよな」
独り言のように、正面を見据えて言う。

「……うん。そうだね。もう、十年になるんだ……」

相槌を打つように、それでも七星はしっかりと答えてくれた。

「長いようで、あっという間だったよな。ありきたりな言葉だけど

さ」

「うん。ホント、早すぎるよね。家族になったの、ついこの前のように思えるもの」

それぞれにこの十年を思い返す。

それは本当にあつという間で、だけどこうして振り返れば、やはりいくら思い出を口にしてもキリがなくて。

光陰矢のごとして言う言葉もまんざらじゃないかと、そう思えた。

「色々あつたよな。今思うと、しょっちゅう喧嘩ばつかしてたよな」

「それは、隼人がいつも先に口を出すからでしょ」

「何言つてんだ。その後真つ先に手を出すのはお前じゃんか」

「いくら言つても、隼人が分からずやだからだよ」

「それで結局、母さんに怒られるのは俺の役目だったよな。女の子に手を上げるんじゃないって」

「自業自得でしょ」

「そっちは女二人、こっちは男一人。口で勝てるわけないっつーの」
「アハハと、俺達は互いに笑いあつた。」

「そういえば、どれだけ喧嘩したときでも最後には必ずこうやって笑い合つてたよな……。」

まあ、大体最初に謝るのも俺の役目だったんだけどさ。

それからずつと時間が流れて、俺達も少しずつただ大人への階段を上つていつて。

「そうつ目には見えない積み重ねがあるから、今こうして並んでいるんだよな。」

「色んなことがありすぎて、全部は思い出せないかもな」

「だけど、きつとどこかで覚えてると思う。隼人が忘れたことでも私が覚えてて、私が忘れたことでも隼人は覚えてるのかもしれない」

「そうだな。確かに、そうかもしれない」

「……人間ってさ」

言いながら、七星はその場で立ち上がった。

「生まれてから死ぬまでの一生が、星によく似てるんだって」

「星って、あの星か？」

俺は空の星を指差す。

「そう。知ってる？ 星に終わりなんてないんだよ」

「終わりが無いんじゃ、人間とは違うんじゃないのか？ 人間は、その……やっぱ、死んだらそこで色んなものが終わっちゃうだろ」

「形はね。だけど、その人の記憶や声、思い出、生まれた場所、過ごした時間は、絶対になくなるらない。だって……」

一歩踏み出し、振り返って七星は言う。

「その人のことを覚えてる人が、必ずどこかにいるから」

「……そりゃまた、ずいぶんとメルヘンな話だよな」
立ち上がり、俺は言う。

「実は、小説の中の受け売りなんだけどね」

「ああ、そんなことだろうと思ったけどさ」

そうしてまた、互いに小さく笑い合う。

「でもまあ……」

もう一度俺は空を見上げる。

いくつもの小さな星々。

いつか、無限に広がる宇宙の海で瞬いて生まれて。

こうして今、地上を照らしている。

弱く儚い光。

それでも、誰かに届けと。

どこかに届けと。

生まれた意味を求めて、光を放つ。

それは本当に、人間と何ら変わりのないもので。

振り返り、俺は言う。

「そういうメルヘンも、たまには悪くないかもな」
「でしょ？」

そうしてお互いに、空を見上げる。

ああ、悪くないな。

だって、そっくりだ。

あの星のこの星も、全部自分みたいに思えてくるんだ。

……さあ。

昔語りは、もう十分だろう。

伝える言葉は、最初から決まっていたんだ。

何一つ難しいことなんてない。

何気ないその一言を、伝えよう。

「……七星」

「ん？」

「ありがとう」

「……え？」

「家族になってくれて、ありがとう」

「……隼人？」

「……ずっと、言い出せなかった。だって俺は、お前の大切なものを奪い取ってしまったから……」

「……」

「俺、ずっと逃げた。奪うだけ奪って、背負うことから逃げたんだ。自分だけが苦しんでるって、勘違いしてた」

七星は何も言わない。

それが否定でもいい。

逃げるのもう、嫌なんだ。

「だけどそれは、七星も同じだったんだよな。奪った俺よりも、奪われた七星のほうがずっとずっと辛かったに決まってる」

「隼人……」

「許されたいって、いつもどこかで思ってた。楽な道ばかり選ぶうとしてた。でもそれじゃダメなんだ。何も変わらない」

「……うん」

「だから、俺はもう逃げないから。全部、背負って生きていくから。」

七星の辛さも悲しさも、俺が半分背負うから、だから……」

「……うん、うん……」

「……これからも、一緒にいてほしい。いや、いてもいいか？ 七星の隣に、いてもいいかな？」

「……ズルイよ、隼人……」

「……え？」

「……私が言いたかったこと、全部先に言っちゃうんだもん。これじゃ私、もう何も言えないよ……」

「あ……悪い」

「……いいよ。許してあげる。けど、私にもこれだけは言わせて」

「……何？」

七星は俯きかけた顔を上げて、真っ直ぐに俺の目を見た。
そして……。

「……ありがとう。私を家族に迎えてくれて、ありがとう。それと

……これからもよろしくね、隼人」

目の端に涙を一杯に溜めて、それでも笑顔でそう言った。

「……ああ。よろしくな、七星」

それが限界だったのか。

七星の頬を、透明な雫がゆっくりと伝って地面に落ちた。

それと同時に、俺の胸に軽い衝撃。

地面を蹴って、七星は俺に飛びついた。

俺は突然のことに一瞬バランスを崩すが、どうにか踏ん張って耐える。

今度はそう簡単に、手を離すわけにはいかないよな。

そっと、七星の肩を抱く。

俺の腕の中で、七星はいくつもの涙を流していた。

その驚くほどに小さな体を、壊れないようにできるだけ優しく支える。

……もう少し。

あと少しだけ、こうしていよう。

七星の涙が、枯れてしまつまで……。

「とりあえずは、これでハッピーエンド、かな」

私はそつと物陰から歩き出す。

覗き見してたことにはちよつと罪悪感はあるけど、やっぱり氣になつて仕方なかった。

できることなら、七星にも来栖君にも幸せになつてほしかった。でもそれは、やっぱり無用の心配だったのかもしれない。

「ま、めでたしめでたしってことだね」

「……何がめでたいんだ、何が」

「うわあっ！」

と、私はのけぞるように大声を出してしまう。

マズイ。

今の声で七星達に気付かれてしまったかもしれない。

「おい。人をパシらせといて何打その態度は……って……」

「うるさい、黙れ！」

私は健二の襟首をつかんでズカズカと歩き出す。

「待て、葵！ 話せば分かる！ ってか、首！ 締まつてる締まつてる！」

「いいから、黙つて歩く！」

ズルズルと健二を引きずつて、私は空いたベンチにやつてくる。

後ろを振り返るが、そこに七星と来栖君の姿はない。

どうにか気付かれずにはすんだようだった。

「ふう……危ない危ない」

「それは、俺の余命のことじゃないのか……」

健二は貪るように酸素を取り入れていた。

「アンタは殺したつて死ぬようなタマじゃないでしょうが」

「偏見だ、差別だ。俺だつて生きてるんだぞ」

「ああ、ハイハイ、そうですね」

健二の言葉に適当に相槌を打ちながら、私はふと思う。
よかったね、七星。

もとからいつかはこういう結果になるんじゃないかとは思っていたけど、そうなる過程がずいぶん遠かった。

いつまでたつてもつかず離れずの二人は、私から見ればひどくまどろっこしいものがあつたのかもしれない。

だけど今は、ちゃんと心の底から祝福できるよ。

喜びも苦しみも、悲しみも楽しみも共にできる存在。

正直、羨ましいな。

……それに引き換え、私ってば。

チラリと、振り返り健二の顔を見る。

幼馴染で腐れ縁。

悪いヤツじゃないのだけれど、何を考えてるか分からない上にどこかパツとしない。

この差は何だろうと、私は溜め息しか出てこない。

「何だよ、その意味ありげな溜め息は」

「……別に、何でもない。気にしたら負けよ」

「……微妙にムカツクな、それ」

そして、互いに溜め息を漏らす。

「で、健二。それ何？」

私は健二が手にぶら下げた袋を指差して言った。

「何って、お前。それを俺に言わせるのか？」

「何それ？ 意味がわかんないんだけど？」

「……神様、コイツ殴っていいですか」

そんな囁き声が聞こえた気がした。

「あのなあ。お前が俺に何か適当に買ってこいって言ったんだろうが」

「へ？ 私、そんなこと言っただけ？」

「言った！ 間違いなく言ったぞ。しかもお願いじゃなく、命令だ」
……ああ、そういえば。

私が来栖君と分かれてからすぐに、健二もあの付近にやってきたんだっけ。

それで、このまま健二を突っ込ませたらなるものもなくなる
って私の直感が知らせて……。

「ああ、うん。言ったような気がしてきた」

「……神様、コイツ蹴飛ばしていいですか」

だから、独り言ならもつと聞こえないように言えばいいのに……。

「……まあいいや。何か疲れてくるから。もうどうでもいい」

「む。その言い方はちょっと聞き捨てならない……って」

「ほれ。冷めないうちにとつと食べ」

そう言つて健二が私に差し出したのは、屋台のたこ焼きだった。

「お前、たこ焼き好きだろ？ 毎年のように食つてたもんな。感謝しろよ？ 屋台の人に無理言つて、出来立てもらつてきたんだから」
そう言われて受け取ったたこ焼きは、確かにまだホ力ホ力と暖かった。

「……………」

「な、何だよ。急に黙り込んで。気持ち悪いな……」

そんな健二の文句も、今はまともに耳に入らない。

……そっか。

もしかしたら私も、近すぎて全然気がつかなかっただけなのかな……。

「おい、どうしたんだよ葵？ 腹でも痛いのか？」

いや、確かにたこ焼きは大好物だけどき。

それを私が毎年のようにお祭りで食べてたなんて、普通分かんないよね。

……だけど健二は……コイツは知ってたんだ。

「……葵？ マジで気分でも悪いのか？」

「……え？ な、何？ 聞いてなかった、ごめん」

「……お前なあ……」

健二は呆れたように溜め息をつく。

「もついい。お前が食欲ないんなら、俺がまとめて消化してやる」

「え？」

「とっつ！」

と、私の手からたこ焼きの入った箱が奪われた。

「あ、こら！ 何すんのよ健二！」

「うるせえ！ よくよく考えたら、これ俺の自腹じゃん。というわけ、これらは両方とも俺のものだ！」

言うなり、二つのたこ焼きを手にして逃げ去っていく。

「こら、待て！ 私のたこ焼き！」

そうして私は、目の前の背中を追いかけていく。

どうしてだろう。

不思議と、笑える自分がそこにいたんだよね……。

西久保健二。

私の幼馴染で腐れ縁。

悪いヤツじゃないのだけれど、何を考えてるか分からない上にどこかパツとしない。

上記に、もう一つ追加。

案外、いいヤツ。

……かもしれない。

Last Day(7):「君」がいる。「此处」にいる。それだけで、もう……

俺達四人は揃って浜辺へと下りる階段に座っていた。

もう間もなく、自国は夜の八時を迎えようとしている。

ちょうどその時間になると、祭りの前夜祭メインイベントである花火大会が始まる。

浜辺を中心とした海岸通にはすでに多くの人々が場所取りにやってきており、俺達もその中の一部だった。

あれから俺と七星はもうしばらく昔話を続け、その後二人で祭りの中に戻っていった。

ちょうどそのとき、健二と瀬口の二人とも合流し、四人で祭りを見て回るようになった。

合流直後の健二がやたらとスタボロだったのが気になったが、まあどうせいつものことだろう。

「健二、あと何分？」

「んー、あと五分つてとこかな」

浜辺ではいくつかの人影があちこちを動き回っている。

おそらく、実行委員関係の人が花火の最終調整をしているのだろう。

「花火かぁ……」

と、隣の七星がふいに呟いた。

「花火がどうかしたのか？ 七星」

「ん、別にどうってわけじゃないんだけど。ただ、こうやって花火を見ることなんて、年に一回のこのお祭りのときくらいかなあって」「確かに、そうかもね。今じゃ結構、こういう小規模なお祭りってなくなってるって言うし」

言われてみればそんな気がしてくる。

子供の頃は家の庭でも花火をしていたような記憶があるけど、最近じゃそういうことはめっきり少なくなっていた。

それが俺達の体や心の成長に伴うものなのか、そうでないのかは分からない。

だから今は、少しだけ心が弾んでいた。

もっと幼かった頃、どんな些細なことに対しても興味や好奇心を当たり前のように抱いていたように。

「……まだ少し時間あるし、私ちよつと飲み物でも買ってくるよ」

「え？ おい葵、時間っていつてももうちよつとしか……って、イデデ、耳を引っ張るな耳を！」

「いいから、アンタも来る。七星と来栖君も何か飲む？」

「ああ、それじゃ俺はコーヒーを頼む」

「私は紅茶がいいな」

「オツケー。ちょーつと人ごみで時間取られるかもしれないけど、気長に待っててね」

「おい、時間食ってたら花火が終わっちまう……イデデデ、だから引っ張んなっつーの！」

「ハイハイ、黙ってついてくる。んじゃ、ちよつとばかし行ってくるね」

「分かった。分かったからまず耳を離せ。千切れるから、マジで」
そついい残して、二人は人ごみの中に紛れていった。

残された俺と七星は、二人の姿が見えなくなるまで小さく笑っていた。

「葵ってば、無理に気を使わなくてもいいのに……」

「……だな。今は正直、健二相手だからこそ通じたようなもんだろ」

言いながら、俺達は浜辺に向き直る。

夜風に乗り、潮の匂いが微かに運ばれてくる。

空はいよいよ夜の色一色に塗り潰され、顔を出す星々も一際多く

なっていた。

半分より少しだけ欠けた月が、揺れる波間にポツカリとその姿を映し出している。

やがて、何の前触れもなく打ち上げ音が響いた。
空を仰ぐ。

夜空の真ん中に、夏の花が咲いた。

続けざまに、いくつもの花火が打ち上がる。

咲いては散る、光の花。

それは人の一生に比べれば、あまりにも短すぎる儚い命。
まさしく、真夏の夜の夢。

それでもその花咲く一瞬は、誰かの心に残るだろう。

誰かの目に映るだろう。

誰かの記憶になるだろう。

そしていつの日か、語られる思い出になるだろう。

ふいに、俺の手の上に七星の手が重なった。

横を見ると、花火のせいか、わずかに紅潮して見える七星の頬。

それでも七星は、笑ってた。

だから俺も、笑い返してみる。

ギュッと、重ねた手を握り返す。

その手の中に、数え切れないほどの過去と今、そして未来を握り
締めて。

背負うものもある。

決して楽な道の前にはならないだろうさ。

だけど。

守るものも、見つけたから。

もう、一人じゃない。

手を取り合って歩いていけるよ。

いや、歩いていくよ。

どこまでも、どこまでも……………。

「葵達、どこまで行ったんだろ……」

「だな。もうすぐ最後のやつになっちまうぞ……」

周囲の人だかりに目を向けるが、夜の暗さで二人の姿を見つけることはできない。

ふと俺は、そのときになってようやく思い出した。

上着のポケットの中から、MDプレイヤーを取り出す。中にはもう、一枚のディスクがセットしてある。

「七星、これつけて」

イヤホンの片方を七星に手渡す。

七星は訝しげな表情を見せたが、俺は構わずに促す。

そうして俺と七星は、イヤホンを片方ずつ耳につける。

「隼人、これ……」

七星の言葉には答えずに、俺は小さく笑ってMDの再生ボタンを押す。

イヤホンをつけたのだから、音楽を聴くに決まっている。

ただし、その曲は……。

「七星、この曲知ってるか？」

音楽に耳を傾けながら、俺は聞いた。

「……ううん。知らない曲。でも、いい曲だね」

「だろ？俺が一番好きな曲なんだ」

タイトルはフリーブルーム。

日本語で言えば自由の羽根。

数年前、恋愛ドラマの主題歌として歌われていた曲。

ぶっちゃけ珍しいものでもないし、すごい売り上げを記録したわけでもない。

平凡と言えばそれまでの、どこかにはありそうな曲。

それでも、俺にとっての特別な曲。

そしてこの曲にはもう一つ、カップリングになっている曲があった。

演奏が終わる。

トラックが二曲目に移行し、演奏が再開される。
そこから流れる曲は……。

「……あ」

七星が呟く。

それもそのはずだ。

だって七星は、この曲を誰よりも知っているはずだから。
時間を忘れるくらいに視聴して、とても嬉しそうに笑みを浮かべる曲。

「七星さ、あの中古CD屋でいつもこの曲を聴いてたんだよな」

「隼人、知ってたの？」

「今日の昼間、その店に行ってた。そのときにマスターから、少し話を聞いたんだ」

「……そっか、あのお店に行ってたんだ」

俺が昼間、マスターに言われてこの曲を聴いたときは本当に驚いた。

なぜなら、ヘッドフォンの向こうから流れてきた曲は俺の大好きなフリープリームだったのだから。

しかしそのまま曲を聴いていると、カップリングの曲にトラックが移行したのだ。

そして流れ出した曲が、この曲だった。

聴いたことのない曲。

でも、七星が時間を忘れるくらいに好きな曲。

俺はそのまま、静かに曲に耳を傾けた。

そして曲の終わる頃、どうして七星がこの曲を聴いていたのか、その意味が分かった。

俺から言わせれば、それはずいぶんと恥ずかしい理由だったけど。
それでも七星にとっては、何よりも大切な意味があったのだろう。
「お前がこの曲を好きな理由って、これだったんだろ？」

「……さすがにバレちゃったか。って、笑わないでよ！ 私だって

結構恥ずかしいんだから！」

さらに顔を赤くして、七星は言った。

まあ、俺だって結構恥ずかしいんだけどさ。

お互い様ってことで、いいだろ？

それは。

幼すぎた少女にとっての、唯一の真実。

自分を救って、父親を奪った少年の話。

悲しくないと言えば嘘になる。

だけど、少女の傍にはいつも少年がいた。

寂しくないと言えば嘘になる。

だけど、少女の傍にはいつも少年がいた。

だから少女は、幸せだと思うことができた。

たとえ世界が少年を許さなくても、少女は少年を許すだろう。

そこに、理屈なんて何一つ必要ない。

あるのは、たった一つの真実。

あの燃え盛る炎の中、自分の身を省みずに駆けつけてきてくれた

少年がいたこと。

嬉しくて涙が出た。

悔しくて涙が出た。

悲しくて涙が出た。

全てが終わって、少女は父親を失い、自分を得た。

全てが終わって、少年は自分を失い、少女を得た。

それでも少年は、少女を守ったことを後悔なんてしていない。

代償として、その両手が生涯血の色に染まったままとしても。

きっと、後悔することなんてないだろう。

だから。

少年がその想いを持ってきている限り、少女の想いも変わらな

い。

どんなことがあっても、決してその想いは変わらない。

あの日、少女を助けにきてくれた少年は……。

少女にとっての、世界でたった一人のヒーローだったのだから。

演奏が終わる。

最後のフレーズがエコーのように遠ざかり、俺は停止ボタンを押した。

フリープルーム。

その曲のカップリングとなった曲の、タイトルは……。

君だけのヒーロー。

L a s t D a y (7) : 「君」がいる。「此処」にいる。それだけで、もう……

やたらと更新だけが早いペースで終わりました。

本作はこれで完結となります。

最後までお付き合いくださって、どうもありがとうございました。
もう少し書き足そうかなという部分も多々あったのですが、悩んだ末にここでひとまずの終了とさせていただきます。

とはいえ、続編などのこともまるで考えていませんので、やはりこれはここで一つの区切りを迎えるべきなんだろうなと思っています。
それでは最後になりますが、最後まで読んでくださった方は、よろしければ適当に感想の言葉でも添えて評価していただけると幸いです。

現在連載中の「千年の冬」ももうすぐ完結を迎える予定ですが、それが終わったら今度はファンタジーかSFのジャンルに挑戦してみようかと考えています。

機会があれば、ぜひご覧ください。

それでは、この辺で失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990a/>

気がつけばいつもそこに君が

2010年10月8日15時44分発行